603
4
603-44
1200501530784
複写

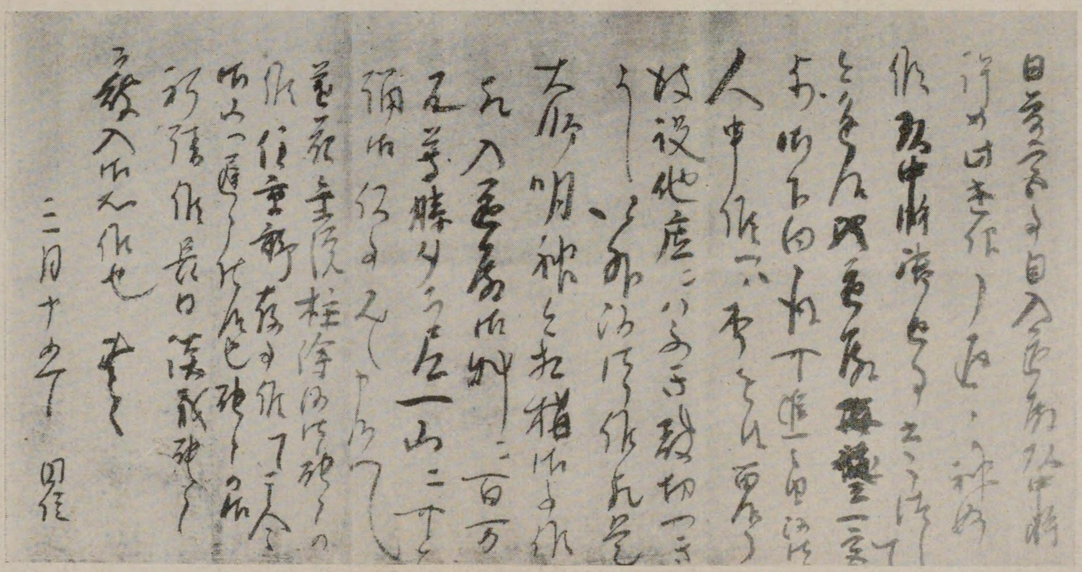
西行全集

野口米次郎編著

東京 富士書房版

帝国図書館蔵

昭和五・四・廿 帝国図書館



二月十四日　四郎

603-44

序

私は時々『鍵となる人物』といふことを考へる。それはどういふ人間のことだかといふに、簡單にいふと代表的人物といふことだが、その人が鍵となつて所謂國民性の理解を容易ならしめるやうな人物をいふのである。ある外國人が私に質問した、『ロバート・バーンズを讀むと蘇格蘭人の性質がはつきりする。古代希臘人の國民性はソフオクルスで知れる。ボルティアも佛國人を了解するに無くてならない人物である。そして英國人の性質をだれが一番明瞭に說明するかといふに、いろいろな議論もあらうが、私はフキールディングの小說を讀めといふであらう。愛蘭人の性質を知らうとするにはゴールドスミスなどが最も必要な文學者だ。ボスウエルがかういつてゐる、「ゴールドスミスは普通愛蘭人に許されてゐる以上に思想が躁急であつて、時々笑ふべき滑稽の感じさへ與へる。」所で私の君に質問したいのは日本で誰を讀むと一番よく日本人の國民性が知れるかといふことである。日本の詩歌を論じたものを讀むと西行法師や芭蕉が重大視されてゐ

るが、彼の靜寂主義は日本人の素質の土に染みこんでゐる性癖であるだらうか。秀吉は非常な英雄であつたといふことは日本歴史に書いてある。そして秀吉を日本の『鍵となる人物』だとすると德川家康はどうなるだらう。君に私の問題に答へることの出來る用意が出來てゐるだらうか。』なるほどこれは重大な質問である。私は直に彼に明快な返事を與へることが出來なかつた。

然し國民性といつても必ずしも一つや二つの性質で律することが出來ない。ロバート・バーンズとカーライルとは隨分違つた性質の文學者である。然し蘇格蘭人の性質をカーライルからでも說明することが出來る。コールドスミスとエドマンド・バークとは驚くほど相違した二人物だが、愛蘭人の性質は必ずしもゴールドスミスだけが說明するとは限らない。今日のショウと詩人イエーツを比較して見給へ……彼等位相違した性質はないかも知れない。然しその何れからでも愛蘭人の性質は說明されるといふことが出來さうである。如何なる國民性でも矛盾してゐる……故にある人間がその一方を說明すると他の方面の說明は他に待たねばならない。芭蕉や西行の靜寂主義は確に私共日本人の性質の一つに相違ないが、私共の性質は決してそれ丈けではない。秀吉も家康も違つた方面から共に日本人の國民性を說明してゐると見るのが正當であらう。今日私共の近代生活から論ずると芭蕉や西行の性質は極めて遠方のものらしく感じられるが、さりとて彼等が私共とその性質を異にしてゐるのでない。實際に、私共が彼等と異つて來れば來るほど彼等が懷しくなつて來る。故に私共の心のなかに於ける彼等の存在は年を立つに從つてますます明瞭になつて來る。

勿論代表的人物だといつたからとて、一人で全部を代表し得るものでない。然し若しその人が假令小部分にしても、その國の一般的性質を明快ならしめるに役立つならば、私は躊躇なく彼が『鍵となる人物』であるといつて差支がないと信ずる。西行も芭蕉もその種の偉人物であれば秀吉も家康もさうである。またかういふ私自身もその種の人間だと平氣にいつて退けられると思つてゐる。

私は今西行全集を編纂するに當り、彼の歌を一々讀んで彼が確に日本國民性の大きな部分を代表してゐるの感なきを得ない。

序

彼は少くも日本に於ては失つてならない歌人であつた。

昭和五年一月

野口米次郎

目次

序
西行論……一
御裳濯川歌合……八一
宮河歌合……一〇三
異本山家集序……一二五
異本山家集……一三八
追加西行和歌……二一二

挿絵解説

表紙の絵は廣重の『略畫立齊百圖』より。

四行の肖像(想像畫なれど)は勝川春章の『錦百人一首あつま織』より。

四行の筆蹟は高野山所藏にかかるものから取つた。

廣重と春章の兩畫は幸尾隆太郎氏所藏にかかるものを拝借したのである。

はせを

すてはてて身はなきものとおもへとも
ゆきのふる日はさむくこそあれ
花の降日はうかれこそすれ

西行論

苦悶と解脱。

一

『苦悶を解脱と一變させる魔法師あり。
君は彼に往いてその祝福を受けざる可からず、
されど若し苦悶とは何ぞと問はば、君は彼に何と答へんとするか。
君は彼に往く前、よくよくこの點を考へざる可からず、
若し君が彼の哄笑の一喝にのみ遇はば、如何はせんとするか。
ああ、眞實に苦悶するものは幸福なり、
如何となれば、その人は確に眞理を生む母體のなかに生活すべければなり。
永遠の理趣と流轉の情景とに彷徨ふ苦悶の姿こそ尊し、

永遠の理趣と流轉の情景。

保延六年（日本紀元一八〇〇、西暦一一四〇）十月十五日四行出家、年二十三（蓮記、百練抄）もとより諸說あつてだれも確に語ることが出來ないが、今日まづ普通二十三歲を四行出家の時としてゐる。

如何となれば無意識にその人は自己解放の眞理を體驗すべければなり。

人間は苦悶せざる可からず、

いな、苦悶を解脫せざる可からず……

そは眞實に生きざる可からずといふ意味なり。

若し解脫の光を受けし君の苦悶が眞珠の色を放つた時、

君は卽身卽佛の眞理開けるのを見て、

この地上生活を禮讚せざる可からず。』

西行は月に泣き花に心を傷めた、そしてしかも彼は伊勢大廟に額づき永劫の國體を禮讚した。この二つの彼の姿は、いづれも彼が永遠不朽の理趣と流動變轉の情景との間に彷徨する苦悶の表象である。然し彼はこの苦悶を自己解放の機緣となし、それを正に解脫の母體と信じた。私は彼の一生に自分の道を照らす燈臺を求めることを喜びとする。

實際に彼の一生は外形的には見すぼらしい墨染の衣一枚に過ぎなかつた。然しその魂は感傷的詩の情緒と忍辱苦惱の鋒鐵爐として日本の文學史を飾る最も强い最も弱い、所謂獨創的人物の一人であつた。西行は强い人間であつた……彼は二十三歲で出家して七十三歲で死ぬに至つた間、卽ち、

『露の玉きゆればまたもなるものを賴みもなきは我身なりけり』

と人生の果敢なきを感じ、

『願はくは花のもとにて我死なんそのきさらきの望月の頃』

と釋迦入滅の頃の死を願つたこの二つの歌を繫ぐ一千七八百首の歌は、彼が橫目も振らずに辿つた一本道の記錄である。彼が强い人間で無かつたならば、どうしてかかる執拗片意地な行爲を生活に演ずることが出來よう。彼は弱い人間であつた……彼は涙のインクで佛陀神明の姿を山川草木の上に描いた、彼は永劫の自然から盛衰無常の現實界を眺めて泣き又傷心悲哀の涙を自然に注いで自然を强ひて自分の悲曲に合唱せしめた。彼は厭世家であつた、もつとはつきりいふと厭世そのものを樂む厭世家で、寂しさがなくては生きていかれなかつた。日本一の泣男であつた。私は今この泣男が『鳴立澤』で踏む一人舞臺を想像する……一介の笠一本の杖の西行は花道の舞臺に近い所に立ち遙に

相州小磯の鳴立澤で踏む四行の一人舞臺を見よ。

月の金波銀波が危い岩に碎ける清見が關を心に浮べて、

『清見潟沖の岩こす白浪に光をかはす秋の夜の月』

と口吟む。彼の瞬間的想像は夜を日中と一變させて、眼前の富士の裾野は颯々たる松籟に波打つやうに見え漫々たる青疊の海の上を風を孕んだ白帆が運歩を運ぶ。彼は頭をあげて煙立つ高根を眺め、

『風になびく富士の烟の空に消えて行へも知らぬ我が思かな』

と口吟んで草枕旅寢の纏綿として盡きない情緒の戰慄を感ずる。かう花道の思ひ入りが濟み『鳴立澤』の舞臺に入る時背景の夕日は晩鐘の響につれて沈みゆく……西行は『荻の上風身にしみて芦の枯葉のさやぎも寂しき』を覺える。舞臺一面に漲る空氣は灰色だ。舞臺と背景は渾然と溶けやつてまるで一幅狩野派の繪畫だ。この靜寂な畫面に何か動くものが三つ四つある。それが鳴き飛ぶ……私共はそれ等が鳴であることを直感する。今舞臺の中央に立つ西行を見るとその黑い半面は輪廓がはつきりと暮色を拔いてゐる、この浮彫の顏は微かに動き始める……

自然は永遠性から瞬間的白露をこぼしゆく。彼はその白露一つを拾つて『歎けとて月やは』の歌を歌つた。月は眺めて泣いた。彼は西行の永遠性が涙の白露なぎなく落とした過ぎない。彼は永遠性を一時的に代表した。

『心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ澤の秋の夕ぐれ』

ああこれぞ古今未曾有の一人舞臺である。私は未だ曾てこの鳴立澤の西行のやうに印象の深い舞臺藝術を見たことがない。全世界を通じて彼のやうに自然を支配し否自然に支配された人間の場合を見たことがない。自然は西行に向つては背景でなかつた。恰も波が海の表徵であるやうに彼が自然の表徵であつた時、彼は春花秋葉のうつろい易い零線に觸れた。自然は力强い永遠性から傷み易い瞬間的白露をこぼしゆく……西行はその一つ一つを拾つた。彼は

『歎けとて月やは物を思はするかこち顏なる我が涙かな』

その時月は彼の悲しい戀人である、姉妹である、單に自然の一現象でなく彼と共に感情に生きる一人格である。白雲のやうに霞む春の櫻は眷々綿々たる戀愛の婦人となつて彼をとどめた。彼は路傍に立つてその人情を分つてめそめそ泣いた。彼は自然の非情の斷片を集めて悲哀の熱い涙でそれ等を人情化して詩の世界を作つた。

ああ弱い西行は强い西行であつた、彼は一度出家した以上墨の衣と順禮者の笠と杖を

捨てなかつた。行爲の人として三十一文字以外に何物にも觸れなかつた。水は必ずしも俗塵の都會を流れることを辭するものでないが決してそこに止らない。西行も出家後、時には都會の人と吟詠贈答して、

『吉野山やがて出てじと思ふ身を花ちりなばと人や待つらん』

と歌ひ、又

『還りゆく人の心を思ふにも離れがたきは都なりけり』

と歌つて現實世界を忘れなかつたやうである。然し都會を流れる水がするりと都會を離れ或は森林に入つた月がするりと森林を離れる如く、彼はするりと都會を捨てて再び俗塵の人とならなかつた。彼は他の幾多の特殊人物のやうに强弱兩端の世界に住んだ……この矛盾が私共に異樣の興味を彼に感じさせる。この矛盾が彼を劇中の人物として最も特殊なものとした。彼が自分一人の道を歩き自分一人の言葉を語り自分一人の行爲をした時、彼は立派に劇の一人舞臺を踏んだ。前記『鳴立澤』に匹敵するやうないくつもかの興味の場面を彼は演じてゐる。私共は彼を『特殊』の一語で蔽ふことが出來る。彼が

彼は强弱兩端の世界に住んだ特殊の人物である。

西行と江口の遊女。治承二年は日本紀元一八三八、西暦一一七八、時に西行年六十一。西行の江口物語は信じられないが、兎に角單に小説としても面白い所がある。今この物語がなく、西行の一生はどんなに寂しいものになるであらう。選集抄に出てゐるこの物語は西行の書いたものでなく、後人の僞作であるといつて差支がない。

如何に人の豫期しなかつたことを演じても、如何にも彼に相應しいの感を私共に與へる。彼は語つた、彼は行つた……その言葉、その行爲が如何にも西行らしい感を私共に與へた。

私は今『江口の遊女』の一條を語りたい。高安月郊の劇『櫻時雨』の三郎兵衞閑居は紅葉の秋を奏づる村時雨が横樣に落ちる銀の絲で一幅の畫面を裝飾して、紹由と吉野太夫が沸る茶釜の松風の響につれて踊る一幕であるが、この『江口の遊女』も芦の枯葉をたたく村時雨でその幕は開く。時は治承二年長月二十日餘の頃とあるが、秋の季節でさへあれば必ずしも治承二年でなければならぬ譯はない。見すぼらしい頭陀僧の小さい包を背に負つた西行は、謠曲の言葉を借ると『淀の川舟行末は鵜殿の芦のほの見えし松の煙の浪よする江口の里』へ着いて一軒の遊女屋の軒口に身を寄せて雨宿りをしてゐる。選集抄に『怪しかる賤が伏屋』とあるから障子破れ疊の古びた曖昧屋であつたであらう。今しも裏座敷の危なつかしい欄干に寄つて下を滑りゆく引掛りさうにない船頭を眺めて居つた遊女は、つと立上つて家の軒口に集る陰鬱な空氣をその寂しいが艶な姿でぱつと

光らした。『軒に立つてはいけないよ、不景氣な……さつさと出てください』と遊女は西行に叫んだ。西行は取敢へず、

『世の中を厭ふまでこそつらからめ假りの宿りを惜む君かな』

と口吟んだ。遊女はこれは話せる面白い乞食坊主だと思つて、

『世を厭ふ人とし聞けば假りの宿に心とむなと思ふばかりぞ』

と西行に答へた。

場面の舞臺はぐるつと、半分廻はると西行は遊女と對坐してゐる。薄暗い行燈の光は遊女の顏に落ちる……早や四十の坂を越えた姥櫻だが滿更捨てたものでなく何處かに品がある。部屋の天井から下つた蜘蛛の絲は裏の川から吹いて來る微風に搖れ、驚くほど大きな綺麗な一疋の蛾は行燈を廻つてその影が破れた疊の上に落ちる。蟋蟀の小さい聲が手近な勝手口から聞えて來る。正にこれ場末の遊女の物語を聞くに屈竟の場面である。白居易の琵琶行もどきに語りだすこの遊女の物語も他の遊女の身の上話と異りはない。然し遊女が『女は殊に罪深きと承るにこの振舞をさへ侍る事ゆに前の世の宿習のほど思ひしられて侍りてうたてしく覺える』と語つた時、感傷歌人西行の情緒の絲は震へた。彼は人間生活の痛ましさに觸れて、風に搖れる蜘蛛の巣も蟋蟀も乃至は行燈を廻る蛾も彼と共に、否彼の涙に答へて悲しい人生の悲曲を奏づるやうに思つた。然し彼が告白は卽ちそれ自身が濟度の行爲であると思つた時、眼前の遊女は麗しい希望の微光で後光がさすやうに感じた。遊女は言葉を續けた……『同じ野守の鐘なれども夕べは物の悲しくてすずろに涙にくらされて侍り、此の假初の浮世にはいつまでかあらずらんと味氣なく覺ゆ。曉には心の澄みて別を慕ふ鳥の音など殊に哀に侍り、然あれど夕には今夜すぎなば如何にもならんと思ひ、曉には此の夜明けなば樣を變へて思とまらんとのみ思ひ侍れども年をへて思ひなれにし世の中とて雪山の鳥の心地して今までつれなく止みぬる悲しさ。』彼女はかく語つてしやくりあげて泣いた。ここがこの劇の高潮でこの後を語る必要がないと私は思ふ。芭蕉にも『一つ家に遊女も寢たり萩と月』の句があつて、奥羽行脚の時市振之關で『衣の上の御情に大慈の惠を垂れて結緣させ給へ』と袖に縋つた遊女をふり捨てた話があるが、西行の『江口の遊女』ほど私共の感情を動かさない。

告白は卽ち濟度の行爲である。

私は選集抄第六卷第十六のこの條を讀むと直ぐ謠曲の『江口』を考へさせられる。謠曲の面白味は現實から幻の世界を紡ぐ、卽ち俗塵の世界を延長させて夢の理想へと及ばしめる點にある、故に遊女の歌の『假りの宿に心とむるなと』の言葉を敷衍して、『地「おもしろや、シテ「實相無漏の大海に、五塵六欲の風は吹かねども、地「隨緣眞如の波の、立たぬ日もなし、〳〵、シテ「波の立居も何故ぞ、假なる宿に心とむる故、地「心とめずば浮世もあらじ、シテ「人をも慕はじ、地「待つ暮もなく、シテ「別路も嵐吹く、地「花よ紅葉よ月雪の古言も、あらよしなや、シテ「思へば假の宿、地「思へば假の宿に、心とむなと人をだに、諫めし我なり』とあつて、江口の作者は遊女を理想化して普賢菩薩にして仕舞つて、月の夜舟の川逍遙の有樣を見せた、彼女の船は白い象となつてそのまま白雲の彼方へ消えさせてゐる。この謠曲の最後を繪にした傑作は岩崎男所藏にかかる一幅『白象の遊女江口の君』であらう……筆家應擧は自分好みの小肥りした美人に遊女を描いてゐる、精緻微細を極めた毛髮に對照させる爲め金銀の菱形模樣を襠と帶に浮させて、見るからに平靜優雅な理想再來である。如何にも普賢菩薩の再來に相應しい女性の肖像である。私は應擧の藝術を餘り高く買ふものでないが、この一幅で彼は私に頭を下げさせる。

應擧の外江口の君を題材にした畫家が多い。浮世繪師勝川春章も數葉の江口の君を描いてゐる。松村吳春にもその傑作がある。

謠曲『江口』は月に花に自然の開落盛衰の理趣を人間生活の情景に照し合せて西行の一生を一貫する詩境であつて、遊女が西行に語つた言葉とある『宵には此の夜すぎなばと思ひ曉には明けなばと涙を流し侍る』の苦惱を敷衍說明したものである。西行は永劫不變の理趣と流動變轉の情景との二つの獄門にかかりその現實を取つて以て己が詩歌とした。若し江口の遊女物語が西行の眞實の經驗であつたならば、彼は前記の言葉の苦境に立つ彼女の心理狀態は卽ち彼の夫れで、彼は必ずや人事でないと同情の涙を流したに相違ない。然し人間の苦境は希望の彼岸に達する船賃である。故に眞實の苦悶は卽ち解脫の門である、濟度の微光は苦悶の涙にその眞珠の色を流してゐる。人が苦悶に順應してその祝福を受ける時始めて卽身卽佛の眞理を了解することが出來る。西行の歌の大部分は苦悶者が簡單赤裸に發した悲鳴である……世界に詩多しと雖も西行位自己を曝露した詩人はゐない。彼は何等隱蔽する所がない、彼は日本あつて以來の最も正直無邪氣な詩人である。彼の三十一文字は佛の面前に捧げる告白である……この位尊い禮讃の

西行位自己を曝露した詩人はゐない。

言葉が何處に有らうぞ。彼は月に泣き花に心を傷めた……ああこの態度が自己解放でなくて何で有らうぞ。彼の悲鳴は卽ち人間解脫の表徵でなくて何で有らうぞ。彼は櫻を禮讃して、

『たぐひなき花をし枝にさかすれば櫻にならぶ木ぞなかりける』

と歌つた。西行自身も比類なき正直な歌を身に咲かせて卽身卽佛の理を明かにした。

西行の江口の遊女物語はまだその後篇がある。西行は彼女に分れて再訪問を約したがその意を果すことが出來なかつた。彼は彼女に、

『假初の世には思を殘すなと聞きし言の葉忘られもせず』

の一首を贈つた。遊女はその返歌として、

『髮おろし衣の色は染めぬるになほつれなきは心なりけり』

と彼に答へた。いふまでもなく彼女はその時既に出家して居つたのである。この一首の如きは極めて西行張りの和歌だ。移して以て西行自身の自責の言葉とする事が出來る。

芭蕉の『西行上人像讃』に、『捨てはてて身はなきものと思へども雪のふる日は寒くこそあれ、花のふる日は浮かれこそすれ』とある。これはいふまでもなく、西行の歌に芭蕉が最後の一句を添加したものに過ぎないが、この位西行の西行たる所を躍動させた文字はない。語る芭蕉は西行に一歩を進めて、彼が語らなかつた所を代辯して全きものとしたかの感がある。眞實の詩人は常に眞實の批評家である、卽ち詩人芭蕉は批評家芭蕉である……この西行の像讃だけを見ても優にそれを說明してゐる。芭蕉が西行の感傷的な『ものの哀れ』を心理的に或は表徵的に變形進歩させて『さび』とした點は確に彼の大價値であるが、如何に彼が西行に私淑して居つたかは、彼が死ぬまで山家集を持つて歩いたことを見ても知れる。山家集は前記江口の遊女の『衣の色は染めぬるになほつれなきは心なりけり』の記錄に過ぎない。西行は世を捨てた、それでも春の花に冬の雪に浮かれた震へた……この煩悶を樂み生きて、彼は詩歌をして煩惱卽菩提の表徵たらしめた。西行には詩歌は宗教であつたことはいふまでもない。彼は慈圓に和歌の道を質問された時、『和歌の奥旨は密敎の奥旨だ、密敎を學ばないと和歌は詠まれない』と答へたとあるが、明瞭にその消息を傳へた言葉といふことが出來る。西行が『さもいみじかり

芭蕉の『西行上人像讃。』

『和歌の奥旨は密敎の奥旨だ、密敎を學ばないと和歌は詠まれない。』

ける遊女にて侍る』と江口の遊女を褒めてゐるが、彼は彼女の歌に宗教を見たからである。彼女の歴史はもとより分らないが、一夜の宿を彼女と共にすることを辭しないのは西行ばかりではあるまい。私は西行と共に『彼の遊女の最後の有樣何と侍るべき返す返す床しく侍る』と思はざるを得ない。墨染の法師が青樓に寢たと聞くと不自然のやうに思はれるが、この一挿話はどうしても西行物語になくてならないものである。西行は如何に不自然な場合でも、彼は單純な詩歌の魔法ですべてのものに自然の歸着を與へてゐる。彼は日本の歴史中稀れに見る特殊の人間であつた。

中世紀末期の文學は個性的でない。

二

日本ばかりでなく世界いづれの國でも所謂中世紀、殊に中世紀末期の文學は面白くない。その理由は簡單である。その時代の表現はすべての場合に個性的でない……假令個性的の場合があつても、それが萎靡廢頽に傾いてもう一息といふ所で止まつてゐる。譬へると赤裸な變性を捨てた少年のやうなもので、特殊な個性を發揮するには間のある中途半端の時代である。若し私共に中世紀に興味があるとすると、私共はそれを一般の社會的見地から見ねばならぬ……少くもその時代の人間は皆な類型的で一つの感がある。勿論中世紀の人間が同時代の生活世相や思想を眺めたならば彼等は樣々の變化を見出したに相違ないが、時代を遠く離れた今日の私共には、恰も遠方の海が一枚の廣い疊の如くに見えるやうに、それ等の起伏凸凹を見ることが出來ない。從つて如何なる國の中世紀でも色彩がない。假令色彩があつてもそれが稀薄で私共を力强く引付けない感が多い。

白河鳥羽の兩帝は宮中を容儀の綺麗なバザーとして仕舞つた。

今日本の歴史で平安朝末期以降、特に西行が生きた所謂院政時代から鎌倉末期に至る間を考へると矢張り前記批評の範圍を離れない。英邁な後三條天皇は橫暴な藤原氏の權力を取つて壓へたが、次の白河鳥羽の兩帝が奢侈と逸樂とを喜ばれたが爲め宮中を氣の拔けたやうな見ては容儀の綺麗な歌のバザーとして仕舞はれた。源氏平家が京都を淋漓たる赤い血で彩り町から町へと恐ろしい刀や鎗や矢で野蠻な行進曲を奏して歩いた間でも、所謂月卿雲客は恰も戸をばつたり閉ぢた蝸牛のやうに御所の塀の内で姑息の安を貪つて平氣で暮らした。その後源頼朝が幕府を鎌倉に開いて國の政體が一變しても、彼等

自繩自縛の悲劇。

は意氣の沮喪した蝸牛生活を破るの力も無く又その機會さへも與へられなかつた。彼等が消閑の道具、即ち暇潰しに和歌を口吟んで居つた有樣は、丁度花合せして居つたと同樣であつた。私共はかういふ人間から眞實の文學が望める筈がないのは當然である。眞實の文學は眞實の生活から生れるといふことは古今東西を論ぜずに一定不動の原則だ。それ等の月卿雲客に眞實の生活がなかつた、即ち眞實の文學がないことに成つたのである。私は何も故意に彼等を罵倒して喜ぶものでない。私は彼等が負け將棋のやうに段々とかかる運命に追詰められて行つた事情を寧ろ憐れむものである。そもそもの最初を考へると彼等が東山大堰川を美風景の最大なるものとした京都數里の間を極樂淨土として月雪花の生活をしたといふことは、確に彼等の生活の更新であつた。人生の新發見であつた。然るにそれが傳習となつて彼等の生命を銷磨した時、彼等は云はば自繩自縛の詰らない悲劇を演じたのである。彼等は自分自身が作つた霧圍氣で窒息するに至つたのである。私は如何なる國の中世紀でも色彩がないといつたが、彼等に最初は人を驚かすに足る色彩があつた。そしてその色彩が漸次に消滅して行つたのである。譬へると彼等は色

ありし日の鳥羽院下北面の武士佐藤義清。

圓位法師の世界は掛値なしに自由の世界であつた。

の褪せた烏帽子や指貫のやうなものになつたのである。

然しこの間にあつて大いに氣を吐く人間が一人居つた。それは他の人でない、私が今語つてゐる西行その人だ。世にありし日の鳥羽院下北面の武士佐藤義清その人だ。彼の系圖を案ずると彼は藤原房前の子魚名の末流、俵藤太秀郷が九代の後裔で、父を康清と云ひ母は監物清經の女であつた。して見ると彼は由緒正しい弓矢の家に生れた男だが、年二十三歳の時彼は手に握つた所謂將來なるものをかなぐり捨てて自分丈けの住む獨自の世界を作つた。二十三歳と云へば男子意を決すべきの秋だ。乃ち彼は意を決して自己創造の別世界に入つた……ああ、この西行またの名圓位法師の世界は掛値なしに自由の世界であつた。彼の時代の上に立つた人間は二つの階級に屬さざるを得なかつた。一は『櫻かざして今日も暮しつ』の遊惰な堂上人階級と、他は狹量な黨派氣質を軍馬の蹄で叫ばした武人階級であつた。この二つの階級の外に價値のある生活はないと思はれて居つた時代に、西行が別に大きな一新世界を作つて住んだといふことは偉大な行爲と云はねばならぬ。彼は自分丈けの世界に生きて、前にいつたやうに中世紀が失つた『赤裸

一笠一杖の頭陀僧生活。

な蠻性』を取返した。彼は中世紀の無個性の中途半端を離れて特殊の生活を發揮した。日本に詩人や英雄の數は多いが、西行位無束縛の生活に生きた人間はゐない、彼位自由の何物たるを味つた人間はゐない。彼あつて始めて日本の中世紀にも類型的でない人間が一人居つたことを誇ることが出來る。『行雲流水』といふ言葉があるが西行の生活は正にそれであつた。然し彼はどうして實際生活の法則に掣肘されない自由の生活をすることが出來たか、もつと簡單に云ふと、彼はどうして出家後の飯を食つて來たか、……今日この點を詳細にする記錄がないが、恐らく彼はその後の芭蕉の如く返濟しなくてもいい程度の借金を人にしたであらう、感謝しなくてもいい程度の厄介を人にかけたであらう、又人から歌の謝禮を貰つたであらう、罪にならない程度の無責任な讀經に對するお布施に預つたであらう、人の軒の下に立つ乞食をしたであらう。寺から寺へと宿つて歩いたであらう。然しかかる家無しの風羅坊生活も今日私共が想像するやうに不安な生活でなかつたかも知れない。若しこの一笠一杖の頭陀僧生活が事實上に苦しい生活であつたならば、如何に西行と雖もその不安な生活狀態を五十年の長日月に渡つて堪へるこ

芭蕉の奥之細道。芭蕉時に四十六歳。この旅行は彼一代の大旅行である。

とがどうして出來よう。

芭蕉が奥之細道に、『月日は百代の過客にして行き代ふ年も亦旅人也。船の上に生涯を浮べ、馬の口捕へて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を棲所とす。古人も旅に死せるあり。予も何れの年よりか片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひ止まず、海濱にさすらへ、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巣を拂ひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に白河の關越えんと、そぞろ神の物に憑きて心を狂はせ、道祖神の招きに會ひて取る物手につかず、股引の破れを綴り、笠の緒着け替へて、三里に灸すうるより松島の月先づ心にかかりて、住める方は人に讓り杉風が別墅にうつる』と書出した時、彼は確にその心に西行の無錢旅行を浮べたに相違ない。この旅行で彼が越前の境吉崎といふ所で汐越の松を眺めて、西行の

『終夜嵐に波をはこばせて月をたれたる汐越の松』

をあげて、『數景盡きたりもし一辯を加へるものは無用の指を立るがごとし』といつてゐる。又路通が還俗したことを聞いて曲翠に送つた彼の手紙の文字にも『その志三年以前

より見えたる事に候間驚くに足らず候とても西行能因が眞似はなる間敷く』とあるのを見ると、芭蕉は西行を理想とし西行の生活を詩人生活の模範と思つたであらう。『柴門辭』の中にも、『只釋阿西行の詞のみ假初に云ひちらしあだなるたはれごとも哀なる處多し後鳥羽上皇の書せ給ひし者にも此等は歌に實ありて而も悲しみをそふるとの給ひ侍りしとかや』とあつて、何にかにつれ西行のことを語つてゐる。私はここで西行と芭蕉の比較論をするのでなく、彼等が共に自然により近く接觸する放浪生活に人間本來の面目がある眞實の詩歌がそこから生れると信じた點を指摘する。人間は城廓にもぐり込んで自然を離れ、風や水やとの聖饗共受を否定した罪に問はれて次第に腐れゆく。然るに西行宗祇芭蕉の如き『眼に見えぬ神の御手に招かれてそよ吹く銀の風の如く聖き空をめぐつた』放浪の自然兒は、山水草木を解脱の表徵として禮讃したが爲め彼等は永劫に自由である。その生命は永遠に新しい。浮動變轉は宇宙の方則である。この方則に生きる旅人生活は卽ち菩提の生活である、決して弱者の生活でない、實にその生活そのものが懺悔である、そしてその懺悔が詩歌である。

芭蕉は西行の生活を詩人生活の模範とした。

花の吉野山。

芭蕉時代の旅行も今日のやうに樂なものでなかつたが、それを昔に遡つた西行の漂浪旅行が如何に冒險的のものであつたかは容易に私共が想像する所である。西行は殆ど全國に渡つて山川を遊覽した……その遊覽が非常な忍耐の報酬であるから尊い。今彼の足跡を詳細確實に知ることは出來ないが、私は諸書の語る所を綜合して彼の生活をしのびたい。

そもそも花の吉野山は七世紀の末葉役の小角の開いた所で、奥の院の大峯山と本堂の藏王堂に附屬する堂塔僧舍を總稱して金峯山寺といつてゐる。山澤を拓いて自然と人間との津梁を架することは佛への服務の道だと信じた古代の僧侶に、この山へ櫻樹を植付けること位は何でもなかつたであらう。今日の私共には『歌書よりも軍書に悲しよしの山』として、又『眉雪老僧時止掃落花深處說南朝』の遺跡として有名であるが、平安朝時代の大宮人達はここへ遊山して今日のやうに俗化しない以前の花の新鮮な姿を見たであらう。然しその頃の人々が後鳥羽院の歌にある如く『嵐もしろき春のあけぼのの落花』を賞美して居つた時に、西行が、

『眺むとて花にぞいたく馴れぬれば散る別こそ悲しかりけれ』

と花に悲哀を見出したといふことは彼の新發見であつた。西行が出家後何程の月日を經て吉野入りをしたかを私は知らない。撰集抄に、『山の有樣、花の色、木々の姿、處の靜なる事都にて思ひやりしには猶まさり面白く侍りき、ならのはまではこちたき深山の嵐の花の末によはり、櫻は雪に咲きかけり行くさま珍らかに侍り、上下の御前安禪寶塔の所有樣、心なからんすら見過ごし難く侍るべし、されば此の所は心も止まりしままに三年を過ぐし侍りき』とあるから、彼は三春の花をここで眺めた……

『吉野山こぞのしをりの道かへてまだ見ぬ方の花をたづねん』

と口吟んで人足未踏の花を賞したり、又花が散つて仕舞へば京都の空を眺めて人里戀しいの感に打たれた。西行は果して金峯神社を右へ五六町入つた山懷にある今日所謂西行庵住の舊址でこの三個年を暮したであらうか。彼が、

『とくとくと落つる岩間の苔清水汲ほす程もなき住居かな』

と歌つた苔清水は庵の手前に今も流れてゐる。芭蕉はここへ來て『露とくとくこころみに浮世すすがばや』といつたが此處ならば彼等の好きさうな閑寂な一境である。

所謂西行庵住の舊址。

西行の吉野入りの頃は京都を矢叫び鬨の聲の修羅場とした保元平治を前に溯る十幾年の時ではあるが、眞夜中に既に曙の微動を感ずるやうに、洛中一般の空氣は陰鬱不安で何か將來の悲慘を暗示する所があつたであらう。『この世をばわが世とぞ思ふ望月の』の藤原氏の歡樂榮華は亡びたけれども、一度破壞された皇室の威嚴は到底完全なものとなる理由はなく、御所を中心として生きた大宮人達は過去の夢と宗教の妄信のため明瞭な理性を失つて恰も暗い陰影の夕へ落ちるの感があつたに相違ない。詩人の敏感性は天津橋上で杜鵑一聲を耳にして戰亂を豫想する……假令詩人でなくても、彼が順良な心ある人間であつたならば、必ずやこの不愉快な現實の恐怖を逃れて憧憬の理想を何處かに求めようとしたであらう。この時西行が佛門に入つて大慈大悲の法味を受け光明の遍照に觸れて人生の變動を永劫の不變と變化させようとしたのは極めて自然の行動である。恐らくこの時代に人生の轉身策を佛の法悅に見出したものは西行ばかりではなかつたであらう。選集抄中に『吉野の三世不可得觀の僧侶』のことが書いてあるが、この人も西

詩人の敏感性は天津橋上で杜鵑一聲を耳にする。

久壽二年は（日本紀元一八一五西暦一一五五）、時に西行年三十八。

鳥羽法皇の御大葬に遇ふ歌なり。

行式の一人であつたに相違ない。江口の遊女と同樣にその詳細は傳つてゐないが、倫理の廢頽時代には隱れた求道者が多いものだ。

西行が世がいよいよ亂れて保元の血の池地獄と顯れたのを見た時、彼は世外の放浪坊主としてかかる無道の悲劇に對し何等の干與者でないことを如何に喜んだであらう。久壽二年近衛天皇の御崩御について鳥羽法皇御他界あらせられた……西行は鳥羽殿落成の際歌を奉つて御劍を頂戴したことを德としてゐる、彼は法皇の御寵愛を蒙つた。彼は其當時高野にあつたが偶然に下山して法皇の御大葬に會ひ、

『今宵こそ思ひしらるれ淺からぬ君に契のある身なりけり』

又、

『道かはる御幸かなしき今宵かな限の旅と見るにつけても』

と悲歎の涙にくれた。彼の悲歎はこれで止らなかつた。彼は御大葬の哀歌に征鼓の叫びが續いて起るのを聞いた……左大臣賴長は流矢に中つて倒れた、源爲義は殺された、崇德新院は讃岐に遷御ましますに至つた。保元の亂につづいた平治の亂は京都を一層悲

住吉慶恩筆平治物語繪卷物。

慘の巷と化した……藤原信賴源義朝は戰爭に敗れた、平淸盛は勝利者の勢力を得た。住吉慶恩筆平治物語の中で最も傑出してゐる院の御所三條殿夜討の卷を見たものは、容易に如何に殿舍が燃え宮嬪が叫喚し兵士が走つたかの酸鼻の有樣を想像することが出來る。『御所には軍兵四方を打ふせぎ火を放ちて、洩出づる者をば射殺し切殺す、若しや助かるとて井にぞ多く落入りける、上下の女房局の女のわらべをめき叫びて走り出て倒れ伏す、馬に踏まれ人に踏まる、淺猿しともいふばかり無し』とこの繪卷物の言葉に書いてあるが、この實際を見たものは前大納言成通のやうに遁世を欲したであらう。西行は出家した成通に『いとふべきかりのやどりはいでぬなり今はまことの道を尋ねよ』の一首を贈つてゐる。恐らく彼はその時『これ見たことか云はないことでない』の感を持つたであらう。讃岐に流され給つた崇德上皇は歌人である。天養元年の撰集左右太夫藤原顯輔の詞花集にその御製が六首も入つてゐる。西行は敷島の道の運命はこの上皇の双肩にかかると思つて居つたであらう。上皇が讃岐に遷御ましました時彼は、

『言の葉の情たえぬる折節にありあふ身こそ悲しかりけれ』

上皇崩御は長寛二年（日本紀元一八二四四暦一一六四）八月二十六日御年四十六歳。

熊野參詣の旅に上る。

上皇は保元の亂後五六年目に讃岐の配所で憤懣のうちに崩御し給ふに至つたが、この悲報に接した西行が如何に悲歎にくれたかは想像に餘りある。彼は今紺叢濃の直垂に唐綴縅の鎧を着て重籐の弓を持つ武士でない。彼は大中黒の矢を負つて澤山の郎徒を從へる仙洞御前の佐藤義清でない。彼は墨染の衣を身に纏つて山野を放浪する西行であつてみると、彼は上皇の崩御を自分ひとりの悲みであるやうに感じ如何に彼はその菩提を弔つたであらう。時に西行年五十前後であつたが、私はずつと溯つて彼の吉野庵三年後からつづいて私の物語を續けたい。

西行は吉野を後にして熊野參詣の旅に出た。彼は紀州千里の濱で一夜を明かして那智の御山に着いた。彼は和光同塵の垂跡、平等方便の利生、八相成道の果證、般若妙法の眞法施、言祕密の法樂、臨終正念、往生極樂の爲めとてそこの千手觀音の瀧に入堂して禮拜の日を送つた。彼はその上にある一二の瀧を眺めて後南房僧都といふ先達に伴はれて大峯登山へ出發した。季節が秋であつたから夜は月を賞し晝は老杉古檜の間を彩る紅葉を眺めて行者返しといふ第一の難所も無事に越え、三重の瀧を過ぎ深山の岩屋に籠つて、『烈々たる明王の火炎に我が罪障もうせたりと覺えて』とあつて、

『露もらぬ岩屋も袖はぬれけりと聞かずは如何にあやしからまし』

の一首を口吟んだ。それより彼が大和の國境に着くと山村水郭の田野に山鳩の鳴くのを聞いて、

『古畑のひばのたつきにゐる鳩の友よぶ聲のすごく聞ゆる』

と歌ひ、いよいよ里へ着いて安養淨土の望を就けたと有難涙を流して先達と分れた。

彼は其後津の國の住吉へ參拜したが道すがらの所謂名所靈蹟を訪れた。住吉で波が松を洗ふ有樣を、

『古の松のしづえを洗ひけん波を心にかけてこそ見よ』

又、

『住吉の松の根あらふ波の音を木梢にかくる沖つしほ風』

と歌つて彼はここで一冬を過ごした。住吉明神は謠曲の文字を借りると、『忝くも西の海青木が原の波間よりあらはれ出でし』和歌の神樣である。西行はここで『岸うつ波も松

和歌の神樣住吉明神。

『江口の遊女の事』

風も颯々の鈴の聲ていとうの鼓の音』を聞きながら、明神へ誓約を與へその保護によつて『歌は陰陽二つの道を守る其の句を分つて五體とす、水火木金土なり、上下は卽ち天地人の三才の祕密』を學ばうとしたであらう。謠曲の『雨月』はこの住吉參拜と撰集抄第四卷第十三の『賤が伏屋』卽ち『江口の遊女の事』の條を經緯として書いたもので私に一入の興味がある。これは私の好きな一篇で、恐らく最も詩的なものの一つであらう。假令この『賤が伏屋』が後世の作り話であつたにしても、かういふ工合に詩的に敷衍されると物語の精神が面白く躍動して來る。

私は西行の住吉訪問から横道へそれたが、彼の歌心は過去數ヶ年に渡る山林放浪のため一段と澄み淸められて、彼は再び京都へ歸るに至つた。彼の不在中京都に樣々の變化があつて有爲轉變の感を彼に與へた。西行が振りすてた妻子の門邊へ佇んだといふ挿話もある……其時八九歳位になつてゐた彼の娘は、立部から前庭の花を見て居つたが汚い乞食坊主を見て內へ引込んだといふことである。西行は涙に咽んだが彼女を呼びとめることも出來ず、そのまま昔の自分の家を立去つたといふことである。彼は京都の何處に住みどうして生きたかは知る由もないが、崇德上皇が讃岐で崩御あらせられた頃は、京都と高野とを往來して居つたに相違ない。彼は應保元年の頃高野に住んで、其年崩御あらせられた美福門院の御骨を高野へ迎へ『今日や君おほふ五つの雪はれて』の一首を詠じて居る。西行は血の雨を降らした保元の亂に親子兄弟相爭ふといふ人倫の廢頽を見た。彼はそれに續いて起つた平治の慘狀を見て如何に現實世界の住むに堪へ難きの感に打たれたであらう。

三

崇德上皇が讃岐へ遷御させられた前、意ならずも御髮を剃つて御室の仁和寺にお出になつた。西行は上皇に召されて御前に侍り、『厭難穢土の次第有爲無常の論理成佛得道場の因緣往生極樂の證跡』を詳しく言上したとあるが勿論確かなことでない。また上皇は西行に『われも同じ蓮の身とならん爲に月の百首を詠まんと思ふ』と仰せられた時、西行は月十首を上皇に奉つたと傳へられてゐる。上皇が『都には今宵ばかりぞ住の江のきし道おりぬいかでつみ見し』との御歌があつて泣き叫ぶ女房達に別れ、草津から御船に

長寛二年は日本紀元一一八二、四、暦一一六四。時に西行四十七歳。

乘せられ讃岐の松山へ入らせられた後の物語は、實に悲慘の極みである。

かくて崇德上皇は長寛二年八月二十六日御年四十六歳で崩御せられ白峯山上一片の煙と化せられた。上皇が讃岐へ下られた以來西行の同情は悲歎高潮して、その熱烈な感情をいくつもかの歌に述べてゐる……

『ながらへて遂に住むべき都かは此の世はよしやとてもかくても』

『まぼろしの夢を現に見る人は目もあはせでやよを明すらん』

『其の日より落つる涙とかたみにて思ひ忘るる時のまぞなき』

西行は一念上皇の涙をのんでの臨終を考へると滂沱たる夜半の涙を流さざるを得なかつた。彼は仁安三年十月十日四國遍歷の旅に立つたが、その主なる目的はいふまでもなく上皇の御墓に參拜してその跡を弔はんとするのであつた。出發の前彼は賀茂の社へお別れのため參詣したが、社内は木の間を洩れる微光の月に照らされて神寂びた感に打たれ、

『かしこまるしでに涙のかかるかな又いつかはと思ふ心に』

の一首を詠んだ。

彼は松山に着き上皇が幽閉遊ばされた海岸近くの山上の小屋はと見るに、岸打つ浪に亂れる濱千鳥の聲が悲しく聞えるのみで何の跡方もない。西行はこの餘りの御有樣に悵然たらざるを得ない……彼の歌に、

『松山の波の心は變らじをかたなく君はなりましにけり』

彼は低徊顧望ここを去ることが出來ない。彼は眼前の波濤のやうに百感が交々胸中に捲きかへるのを感じた……そもそも西行出家前の主家德大寺左大臣實能は鳥羽法皇の皇后卽ち崇德上皇の御母待賢門院とは兄妹の間柄であつた。御外戚に主從の關係であつたことが崇德上皇と西行とを親しく結びつけた。そして彼等は詩歌をその生命とする感情の人であつた。今西行は上皇幽閉の形なき跡を彷徨して、如何に上皇の保元の御企ならず一戰敗れて仁和寺で剃髮姿を曝らされたかを考へる。

西行は其時、

『かかる世に影もかはらずすむ月を見るわが身さへ恨めしきかな』

と歌ひて、如何に彼の心が隈なき月光を眺めて亂れたであらう。

この時西行と共に、經信、匡房、基俊、俊頼も歌を奏上したと傳へられてゐる。然し墨水遺稿に、經信は永長二年二月、匡房は天永二年十一月に死んでゐる、なる程西行の生れない以前の人々である。共にふ歌を作つたとは論じてゐる。

待賢門院御在世御繁昌の時代は西行の懐しい追憶である。鳥羽院北面の武士として彼の生活は華麗なものであつた……蹴鞠の催、南庭の御弓、さては四季折々に侍つた酒宴、鳳闕に坐して清涼殿の紫雲を望んだ事や紫宸殿の夜を守つて、曙を迎へた時朝日の見事であつたことなど、どうして彼は忘れることが出來よう。特に彼に憶出の深いことは鳥羽御所の御障子の繪に歌を賛して一代の名譽を博したことである。初春の山に谷川の流れる繪に、

『降りつみし高根のみ雪とけにけり清瀧川の水の白波』

と、世捨人の籠る柴の庵を梅の花が飾る繪に、

『とめこかし梅さかりなる我か宿を疎きも人は折にこそあれ』

と、今を盛りと咲きこぼれる櫻樹の下で人が月を眺める繪に、

『雲にまがふ花の下にて眺むればをぼろに月も見ゆるなりけり』

と、夏の始め山野を分けて時鳥を尋ねる繪に、

『聞かずともここを瀬にせむ時鳥山田の原の杉の村立』

と、時鳥の血に鳴く聲を始めて聞きつけた繪に、

『時鳥高き峰より出にけり外山のすそに聲のきこゆる』

と、女房が清水に影を投げる柳の傍に立つ繪に、

『道の邊の清水流るる柳影しばしとてこそたちとまりけれ』

と、秋風に搖れる草葉の露のしげき繪に、

『あはれいかに草葉の露の氷るらん秋風立ちぬ宮城野の原』

と、柴の庵近く鹿の鳴く繪に、

『小山田の庵近くなく鹿の音に驚かされておどろきにけり』

と、月影が嵐に誘はれる小倉山の紅葉に落ちる繪に、

『小倉山ふもとの里に木の葉ちれば梢にはるる月を見るかな』

と、雲が高い山にかかり時雨來らんとする繪に、

『秋しのや外山の里やしぐるらん伊駒の岳に雲ぞかかれる』

との十首を彼は奉つた。彼は今『道の邊の清水流るる柳影』の外さほど人を驚かせる作

とは思はないが、人生の苦惱を體驗した今日の西行では到底詠ずることの出來ない新鮮艶麗な姿がそれぞれにあると思はざるを得ない。其時彼は朝日の御劍を頂戴した……殊に嬉しかつたのは中納言の前で、目もさめるやうな紅の十五重の御衣を賜つて肩にかけて貰つたことである。その頃の中納言は嬋娟たる美人であつた……それを今日小倉山引退の姿に比較すると何たる相違であらうと西行は思ふ。西行は都出發前に彼女を訪ふてその女僧姿を哀れに思つて、

『山おろす嵐の音の烈しきにいつならひける君が住家ぞ』

と詠んだ。彼女は、

『憂き世をば嵐の風に誘はれて家を出でにし住家とぞ見る』

と彼に答へられたことをその心に浮べる。彼女の住家は前は野邊後は山路で、白露しげき葛や尾花で埋もれ、枝に通ふ萩の上風や寢屋に音づれる松の嵐を聞いて如何に待賢門院御在世の時をしのばれてゐるだらうと思ふと、西行は熱い涙が頰に落ちるやうに感ぜざるを得ない。然し彼女の昔に變らない優しい心ばへは實に感服の至りだと彼は喜んだ。中納言を思ふにつけて忘れられない女房は堀川である……彼女は『長からん心も知らず黑髪の亂れて今朝は物をこそ思へ』の作者だ。西行の、

『尋ぬとて風のつてにも聞かじかし花と散りにし君が行くへ』

の歌に、彼女は、

『吹く風の行くへ知らする物ならば花と散るにもおくれざらまじ』

と答へた。かう待賢門院御一門竝にその眷顧を蒙つた人々の榮華の夢が醒め果てた今日泣くこと位心を慰めることはないと西行は思はざるを得なかつた。

今西行は崇德上皇の御墓があるといふ白峰を登つてゐる。『松柏は奥ふかく茂りあひて青雲のたなびく日すら小雨そほふるが如し、兒が嶽といふ嶮しき嶽背に聳えだちて千仞の谷底より雲きりおひのほれば咫尺をもおぼつかなき心持せらる』と、雨月物語の『白峰』にある情景である。西行は誰訪へとか呼子鳥の聲に驚き、寂しさに堪へられない猿に答へながら道のない山路を登つて、木の間の小高い土の上に石が三つ疊みかさねてある所へ着いた……ああ、これが嘗て一天萬乘をしろしめした上皇がこの世に殘された

彼は中納言を小倉山の山莊に訪づれる。

待賢門院御一門榮華の夢は破れて仕舞つた。

崇德上皇の御墓。『かけてもはかりきや、他國邊土の山中の、おどろのしたにくちぬべしとは、貝鐘の聲も聞せず、法華三昧もせず、一人つとむる僧もなき所に、只峰の松風のはげしきのみにて、鳥だにもかけらぬありさま、見聞るにそぞろに涙を落し、待りき』と撰集抄に書いてある。

萬石の血涙を悲しい運命に注ぐ。

御跡かと思つて、彼は熱い涙にくれた。西行はかゝ九五の御位を踐んだ御人でも最早や有りし世の不平不滿に捕はれて迷つてはいけない、往生安樂の法悅に入つていただきたいと物語り、落ちる涙と共に左の一首を上皇の靈に奉つた。

『よしや君昔の玉の床とてもかからん後は何にかはせん』

萬石の血涙を恩人の上皇の悲しい運命に注ぐ時西行は感情の詩人である。然し彼が理性の人にかへる時、彼は目を閉ぢて上皇の行爲を是認することが出來ない。彼は心のなかで何故に上皇は人慾の懊惱を支配し得ず徒に保元の亂に都の平和を破壞し給はつたかを恨まざるを得ない。彼は上皇は彼と等しく自然讃禮を解脫の道とすべき歌人ではなかつたと思はざるを得ない。彼は前記の歌で佛果圓滿の位に昇り給へと歌つたのは、臣として過去の罪を問ひたくないからである。然し彼はその語調に彼の多少の激した心を匿すことが出來ない……彼は再び感情の詩人にかへつて、あら勿體なしの感に打たれるやうに思つたであらう。

上田秋成は『白峰』一篇で西行を上下に燃えあがる陰火の間に坐らせ、彼を『朱をそ

日本文學中の一大奇觀。

そぎたる龍顏に荊の髮膝にかかるまで亂れ、白眼を吊あげ、熱き嘘をくるしげにつかせ給ひ、御衣は柿色のいたうすすびたるに、手足の爪は獸のごとく生きのびてさながら魔王の形あさましくもおそろしい』崇德上皇の幽靈と對面させてゐる。秋成は保元物語の『新院御經沈めの事』から想像を弄し、『怨念晴れやらで天狗にならせ給へり』といふその當時の風說を敷衍したものだが、西行と上皇との對話は躍動して日本文學中稀れに見る所の奇觀である。『一院崩御たまひて殯の宮に肌膚もいまだ寒させたまはぬに、御旗なびかせ弓末ふり立て御祚をあらそひ給ふは、不孝の罪これより劇しきはあらじ。天下は神器なり。人のわたくしをもて奪ふとも得べからぬことわりなるを、たとへ垂仁王の即位は民の仰ぎ望む所なりとも、德を布き和を施し給はで、道ならぬわざをもて代を亂したまふときは、きのふまで君を慕ひしも今日は忽ち怨敵となりて、本意を遂げ給はで、昔より例なき刑を得給ひてかかる鄙の國の土とならせ給へり』と、西行の追求はいよいよ急である。上皇の靈は汝の理論はさることゝ乍ら敵の無慈悲な態度を怒つて死んで大魔王となり今三百餘類の巨魁であると仰せられる。平治の亂も朝家への崇も豫定の行動で、『只

清盛が人果大にして親族氏族ことごとく高き官位につらなり、おのがままなる國政を執行ふといへども、重盛忠義をもて輔くる故いまだ期いたらず。汝見よ平氏も亦久しからじ。雅仁朕につらかりしほどは終に報ゆべきぞ』と上皇は仰せられる。上皇は天に向いて誰かを呼ばれると、はあと答へて化鳥が飛んで來て彼の前にひれ伏す……上皇は化鳥に『何ぞはやく重盛が命を奪つて雅仁清盛をくるしめざる』と仰せられると、化鳥は答へていふ『上皇(雅仁)の幸福いまだつきず重盛が忠信ちかづきがたし、今より支干一周を得ば重盛が命數既につきなむ、彼死せば一族の幸福此時に亡ぶべし。』此時西行は餘りに魔道の淺ましさを見て前記の歌一首を奉ると、上皇の幽靈は成程と合點されて化鳥と共に消え失せる。西行は程なく明ける朝の空に鳥の聲を聞いて、更に金剛經一卷を供養して下山するのである。

西行は白峰を下山してから善通寺へ參詣して寺の南大門の前に庵を結んだ。門内の東側に老松一株があつた、西行が都へ歸る時その名殘を惜んで、

『久に經て我が後の世をとへよ松跡しのぶべき人もなき身ぞ』

後白河法皇住居御幸に出遇ふ。時に西行年五十四。

高倉天皇大極殿に於て御即位し給ふ。

と詠んだ。彼は幾年間四國に滯在したか不明であるが、承安元年六月後白河法皇が熊野詣の途次住吉へ御幸があつた時彼もそれに出會つてゐるから、勿論その頃に彼は京へ歸つて居つたに相違ない。其時『後三條院のみゆき神も思ひ出給ふらんとおぼえて釣殿に書付侍し』と前書して、

『絶えたりし君がみゆきを待つけて神いかばかりうれしかるらん』

と歌つてゐる。推察するに西行はこの和歌の神への法皇の掛禮に崇德上皇の崩御と共に亡びたと思つた詩歌の復活を認めて喜んだのであらう。

彼が四國遍歷へ出發した仁安三年は高倉天皇が大極殿で御即位あつた年である。天皇の御生母は入道淨海の北の方八條の二位の妹である。自然の結果として宮中府中に於ける平氏の勢力は、恰も東天の太陽の如く隆々として榮えんとして居つた。そして西行が旅から歸つてみると平氏の知行は三十餘ケ國に及び、庄園田畑また幾程なるを知らずで『平氏の榮華は今を盛りとぞ見えし』といふ有樣であつた。彼の時代は廻り燈籠のやうに動く……承安四年に義經は鞍馬山を脫して秀衡に投じた、法性寺の執行俊寛丹波の

治承四年福原遷都あり。時に西行年六十三。

都會人の價値。彼は主我主義の禮節を守つて、環境の惡影響を巧に逃れる。

少將成經平判官康賴の三人は鹿谷に會合して平氏滅亡を計つて治承元年に鬼界ヶ島へ流された、天皇の中宮は毎夜御物氣に取りつかれ始められた。西行は治承四年に福原遷都の報を伊勢で聞いて、

『雲のうへやふるき都に成にけりすむらん月の影はかはらで』

と歌つてゐる。

西行は都會人である。都會人の價値はどこまでも主我主義者の禮節を守つて、環境の惡影響を巧に逃れる點にある。彼の心理狀態は生一本で明瞭である。彼はその生活を整理して人間本來の生氣を浪費させない、故に彼の作る雰圍氣は中心へと集まる……彼はこの陰氣な薄暗い雰圍氣のなかで微笑する、彼は武者振り若々しく現實の野卑を呪詛する。私は嘗て『都會人は心の伊達者の態度で野卑に對して悲痛な戰鬪史を書き、彼は已が主義に殉ずる一國者だ』と書いたが都會人位現實に執着する人間はない、即ち呪詛し乍らそれを忘れることが出來ない運命を持つてゐる。西行は都會人である……都會人の運命として京都を忘れることが出來ずに幾度も旅から京都へ歸つてゐる。彼は何を

伊勢に於ける西行。治承四年は日本紀元一八四〇、西暦一一八〇。

求めに京都へ歸つたか、他なし、彼は現實の野卑を呪詛せんが爲めに歸つた。彼は悲觀論を一層明瞭ならしめんが爲めに歸つた。そして彼はその悲觀論を宗教の神祕主義で肯定してゐるが、彼の宗教觀は矢張り都會人の宗教觀であつて、どこかに一種不思議な爽快味がある。云ひ換へると彼は悲觀を樂み、即ち涙を樂んで泣いてゐる。彼は『寂しさなくばうからまし』の人間である。由來都會は悲しい所である。今日の東京でも倫敦でも巴里でも乃至は紐育でもさうであつて、必ずしも西行時代の京都ばかりの問題でない。然し私は幾年振りに四國遍歷から京都へ歸つた西行を想像する……彼のお主筋は殆ど滅亡して其跡を止めない。今彼は帝闕も仙洞も及ばない入道相國一家の豪奢生活を見て何と感じたであらうか。彼は直にそれに驕るもの久しからずの理を讀んで、彼等を嫌ふよりは寧ろ悲哀の心で彼等を眺めたであらう。彼は久方振りで京都へ歸つたが、彼は京都に住むことが出來ない、そこで彼はまたもや放浪の旅に出たのである。

西行は四國遍歷の次に西國修行の旅に出でてゐるらしいが、私は治承四年伊勢に於ける彼を想像したい。彼は『雲のうへやふるき都に成にけり』と歌つて月卿雲客の都は亡

び、紫宸清凉の詩歌管絃は再び聞くことが出來ないと思つたであらうか。假令邪雲が千年の御所を蔽つてもいつかはその神德を完全に發揮する時が來ると彼は信じたであらう。彼が、

『宮柱したつ岩根にしき建てて露もくもらぬ日の光かな』

と歌つた時、彼の國體に對する渴仰禮讃は決して悲觀詩人の號泣でない。彼は平日の涙を忘れた壯嚴な豫言を語る日本主義者である。彼が、

『何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる』

と歌つた時、彼の涙は弱者の嗚咽でなく、感激しては泣くを恐れない日本人である……彼は無條件で神廟に額づいて八荒に光臨し給ふその威德に平伏する祖先崇拜者である。ここに於て西行の出離解脫の宗教觀は一變して現實的に成り、彼は西方の極樂世界を五十鈴川の神苑に發見する神道論者である。彼は歌ふ、

『榊葉に心をかけんゆふしでを思へば神も佛なりけり』

彼の和光同塵說は決して矛盾でない。彼の神佛が合體してその神德を發揮する時、彼の日本主義が確立して、生を此土に享くることを彼は如何にこの神廟に感謝したであらう。

私は今內宮へ崇敬の歩みを運ぶ西行を想像したい……彼の心は五十鈴川の水の如く淸い。彼は天を突いて列なる大きな杉樹の間を過ぎ二の鳥居をくぐる。彼の心は嚴肅の感に打たれていよいよ益々澄んでゆく。彼が左に神樂殿を見て神路山の麓大宮居の前に進んだ時、彼に崇德上皇の憤死も淨海入道の榮華もない……彼は眼前に天の岩戸を出て八荒に光臨し給ひしわが大君の幻を見るのみである。

彼は多くの場合に落花の悲哀を歌つた、然し彼はこの神苑の花を見ては、

『嚴戸あけし天つ命の其のかみに櫻を誰かうゑはじめけん』

或はまた、

『神路山みしめこもる花ざかりのこは如何ばかりうれしかるらん』

の歌で久方の光のどけき櫻花の姿を喜んでゐる。彼は多くの場合に月を見て泣いた。然し彼は、

『神路山月さやかなる誓にて天の下をば照らすなりけり』

彼の自然禮讃は地上生活の是認となつてゐる。彼は悲觀的詩人である……然し眞實の詩人で誰か悲觀的ならざるものがあらう。彼に樂天的態度がないではない……然り眞實に悲觀的の人間で始めて眞實に現實を是認することが出來る。西行は眞實の詩人である。彼の悲觀が樂觀と一變した場合の嚴肅さを見ると、日本の如何なる詩人も彼に及ぶことが出來ない。彼は泣くことが出來た。故に彼は笑つて現實を禮讃することが出來た。

西行の晩年を飾るものは『御裳濯川歌合』三十六番であらう。これは伊勢內宮の法樂の爲めに集めたもので藤原俊成卿がその判をしてゐる。中に三十六番目左右の歌として、

『深く入りて神路の奥を尋ぬれば又うへもなき峯の松風』

『流たえぬ波にや世をば治むらむ神風涼し御裳濯の岸』

ああ、私共はこれ以上日本に神國禮讃の言葉があらうとは思はない。

『御裳濯川歌合』は西行を國民歌人の最も偉大なるものとするに十分であらう。これは彼が後世に殘した文學的遺產として價値あるものの一つで、彼を詩人として論ずる場合に是非共なくてならない作品である。これを他の悲觀的諸作に比較する時、彼はその他の大詩人の如くに兩極端を握つてそれ等を個性で統一した特異性の人であることを立證するであらう。

四行の自然禮讃。

『御裳濯川歌合』三十六番。

私は大正から昭和へ移るの際一感想と書いてからいつた、『私は先帝陛下の御不例から御崩御にかけての間に日本國民が擧つて帝室に捧げた敬愛と憂慮の感情に觸れて、私の心は感激した。そしてその感激は反省的思想へと私を誘ふに至つた。日本國民は深夜水垢離を取つて陛下の御平癒を祈念した、僧侶は讀經の聲で佛殿を動かし、學校の生徒は默禱の行列を組んで二重橋前や明治神宮にその祈願をこめた。この敬虔嚴肅な陛下の御全快を願ふの外他意のない行爲は何を語つたか……簡單にいふと帝室崇拜の思想が感動の姿で顯れたものに外ならない。帝室は日本の宗家であつて、日本の山川草木は悉く天孫降臨のこの方我が帝王へ奉仕するために示顯したものだといふ思想は傳統的に私共日本人の血に流れてゐる。日本に於ける過去の偉大な詩人は皆なこの思想を歌つてゐる

柿本人麿と山部赤人。

る、そしてこの根本的思想が小さく分れて家族制となり故國の自然禮讃となり、また再び大きく集つて祖先崇拜の觀念となつた。柿本人麿が「掛文ゆゆしきかも言はまくも奇に畏き朝日香の眞神の原に久方の天つ御門を懼くも定め結ひて神さぶと磐隱ります」と「高市皇子尊城上殯宮之時」に歌つたのは、則ちこの帝室崇拜の信仰が纒綿たる感情に反應したものに外ならない。又「天地の分れし時ゆ神さびて高く貴き駿河なる富士の高嶺を天つ原、振放け見れば渡る日の影も隱ろひ、照る月の光も見えず自雲もいゆき悼の不時ぞ雪は降りける」の山部赤人の不盡山の長歌は、祖先崇拜者が語つた最も偉大な自然禮讃の言葉である。又彼の帝室崇拜が叙景情調に結びついた時、「八隅知し我ご大王の高知らす芳野の宮は疊つく青墻隱り、河次の清き河内ぞ春べは花咲きををり、我されば霧立ち渡る其の山のいやますに、この河の絶ゆる事なく百しきの大宮人は常に通はず」と天皇(聖武)の吉野へ行幸の時などに歌つてゐる。西行法師は世を捨ててすべての自然に佛の姿を認めて、安養淨土の法樂に入らんとした風流僧であつたが、それでも伊勢の神前に額づいて祖先崇拜の有難い涙を流して墨染の衣をぬらしてゐる……「宮柱した

類型的一日本人となる。

つ岩根にしき建てて露もくもらぬ日の光かな」とか、或は「神路山月さやかなる響にて天の下をば照すなりけり」とか歌つて、比類のない國土にその生を得たことを感謝してゐる。芭蕉は人の知るやうに彼の自然觀は今日の言葉でいふと虛無思想に近いものであつた。然るに彼は外宮の遷宮を拜して「たふとさに皆押合ぬ御遷宮」の一句を書いてゐる。勿論この句は芭蕉としては立派なものでないが、それでも彼の祖先崇拜から流れ出る敬虔の感情を十分に說明してゐる。ここで私は更に考へさせられる……：それは外でない、西行でも芭蕉でも祖先崇拜乃至は帝室崇拜の問題になると平日の主義主張をけろりと忘れて類型的の一日本人と成つて仕舞つてゐることである。これは確に彼等の矛盾であるが、私共近代の日本人も等しくこの矛盾に喜んで順應してゐる、又この矛盾を極めて自然なものと眺めて私共は決して討議しようとしない。更に又この矛盾を問題として議論することを不都合な非國民的行爲であるとさへ考へることもある。私共日本人は相互に「これは日本人獨特の矛盾性だ、又この不思議な矛盾を常識化し融和合一せしめて行く點に我等の特異な價値がある」といつて濟ませるであらうが、研究好きな外國人

外國人の興味を持つ大きな問題。

がこの問題に觸れるとさう簡單に濟して置かない。彼等はいふであらう……日本人の近代思想と帝室崇拜乃至は祖先崇拜との關係はどうか。日本人の近代思想といつても中途半端なものでまだまだ世界的に變化したものでないが、彼等が言葉通りに世界的になつて世界共通の思想と感情を信ずる場合になつた時、日本人はどうして前記の思想や感情を始末するであらうか。一言でいふと何時まで日本人の祖先崇拜又帝室崇拜が維持繼續されるであらうか。』

確にこの問題は彼等外國人の興味を持つ大きな問題であらう……私共日本人は彼等に對して解けない一の謎であるに相違ない。彼等は私共が御不例發表當時から御崩御後に至る間に表現した國民性を眺めて驚いた、そしていつた……『これは正直な國民だ嚴肅な國民だ、感情の麗しい國民だ、實に尊敬に値する國民だ、然し不思議な國民だ。』今西洋諸國を見るに所謂近代思想に支配され又それに降服してゐない國民はゐない。近代思想とは何であるかに答へる詳細な知識は私にないが、少くも私は近代思想は民主々義を基調としてゐると信ずる。西洋諸國の人々は信じてゐる……我々人間は本質的に

切腹と浮世繪の國民。

相違がない、我々に階級の上下がある筈がない。我々は個性を發揮してそれぞれ人生の問題を解決せねばならない、そしてそれが人間生活を十分に發達させる所以に外ならない。私共日本人もこの近代思想を否定するものでない。私共の大部分のものは或は近代思想家を以て任じてゐるであらうが、私共の祖先崇拜或は帝室に對する尊敬心は決して所謂近代思想に破壞されないとすると、私共日本人は外國人のいふ如く不思議な國民である。私共は維然として彼等には切腹と浮世繪の國民である。私共は彼等には舊日本の日本人である……若し私共に昔と異つた點があるとすると、ちよん髷を散髮にし瓦屋根を亜鉛葺きにした程度の變化に過ぎないであらう。かういふ工合に私共が今日も將來も彼等から眺められてゐると、私共は世界の一國として極めて窮屈な立場に置かれ事々物々に誤解され易いことになるであらう。彼等は無論私共に近代的思想と生活に適應する同情と理解がないとは思はなくても、私共の一方の舊思想が彼等には鎧兜の幽靈のやうに思はれ永久に彼等を威嚇すると感ずるであらう。從つて私共は少くも對外問題の上には、始終說明せねばならぬ立場になつてその苦惱に堪へられない狀態を招くかも知れ

精神的二重生活の國民。

ない。其時私共が彼等に、彼等の信ずるやうな舊思想がない又彼等に矛盾と見えるものも私共は妥協させて世界共通の思想に順應してゐるといつた所で、彼等は恐らく私共を信じないであらう。事實、私共の精神的二重生活は彼等には永遠に興味の問題となるであらう。

然し考へるに私共日本人がその思想にその感情に全然西洋化して、遂には西洋の精神的屬國みたやうな國となつた所で何の價値があらう。私共に西洋と異つた特殊の文化が花を咲けばこそ西洋は私共に感謝するであらう……如何となればそれに依つて彼等の生活も豐富になるからである。實際、外國人でも所謂西洋文明の沒落を語りその平面的な物質美を極力否定してゐる人がある。かういふ主張の人は、若し日本が西洋流の三等國になつて仕舞つたならばどんなにそれを歎くであらう。彼等に三等國が必要であれば伊太利や西班牙で澤山だ、何も日本までその目錄に加入しなければならぬ理由がない日本は何處までも東洋の日本であつてほしいと彼等は思ふであらう。

私は嘗て英文で前記の祖先崇拜を論じて、この原始的信仰は變化してゆく私共生活に

祖先崇拜の破壞。

對してどうして昔日の權威を保ち得るかと疑ひ必然の結果としてそれは近代思想と融和しないであらうと結論したことがある。私はいつた、『この日本の簡單な神祕主義云ひかへると影の信仰』だが、當然に民主々義の電燈に照らされて弱められる。都會生活は散文的である平面的である、從つて祖先崇拜の幽怪味に共鳴しない。假りにここに外國へ移住した日本人があるとする……彼等は日本人に附屬する過去の精神狀態を全然忘れて新生活に入らねばならぬと信ずるであらう。又日本本國に於ても在來の家族制は亡びてゆくかの感がある。分家したもの又その分家から更に分家したものがその祖先の靈に忠實であることは不可能であらう。かういふ工合に破壞されて行つたならば、私共の祖先崇拜は再び昔日の光榮を持ち得るものでない。』この私の議論は少くも理論の上では是認せられるものと信ずるが、最近日本人が帝室の御不幸に關聯して表示した國民性の發露から見ると私の議論は否定せられるやうに私は感ずる。國家が戰爭か何かで危急な場合に出合ふとか或は帝室に意外な事件でも起つたといふ時には、私共日本人は直に個人的思想や感情の相違を捨てて、幾千萬人といふ日本人がたつた一人の思想になり感情に

なつて單純化されるといふことは、實に驚くべき世界無比の現象と云はねばならない。そして私は信ずる、日本の昭和文化はこの驚くべき現象の土壤のなかから芽ぐみ花咲かねばならない、そして日本の特殊文明を發揮して世界の文化へ一大貢獻する所がなくてはならない。然し私共の道は危險である。世界的といふと極めて誤解され易い道であるが、何も他外國を恐れるには富らない。我れに信念あり希望あるに於ては斷然として進むべきのみである。

最近日本に自國の古典研究が盛んになり又盛んになりつつある。事實私が今ここで西行を論じてゐるのもこの古典研究熱の一つの實證に外ならない。この現象は何を語るであらうか。私は今日になつて漸く私共が過去の藝術文藝、一言でいふと文化を整理鹽梅する時が來たやうに感ずる。私共は過去五十年以上に渡つて一意專念に西洋文明を理解吸收しようとして、どの位私共の生氣を浪費し努力を盡したか知れない。然しその結果はどうであつたか。今日になつて私共東洋人はどこまでも東洋人であるといふ結論に達したのではあるまいか。如何に私共が西洋人にならうとした所で、物質的問題は別として到底滿足な精神的收穫を得られる筈がない。又私共は西洋人にならうとしても成れる理由がない。私共日本人は日本人であらねばならぬ。又諸外國人も私共が日本人でないことを希望しては居ない。私共は『不思議な國民』で澤山である。謎の國民で結構だ。不思議な國民として又謎の國民として最善を盡し特殊の文化を創造することが私共がこの昭和時代に於ける一大仕事でなくて何であらう。事實物質的にも精神的にも所謂二重生活は浪費である無駄である。私共は昭和時代にその二重生活を一つの生活として渾然たる日本文明を作ることが、私の將に來りつつある新時代に對する希望である、私にこれ以上大きな希望はないと信ずる。

『不思議な國民』で澤山だ。

ああ、私は西行論から餘りに横道へ脫線したであらうか。いな、私は脫線してならない……私は西行を借りて日本人であらねばならぬことを說いてゐる。彼が事帝室乃至國體の最大問題に及び、平日の悲觀論をけろりと忘れて眞實の日本人となり、

『神風に心やすくそまかせつる櫻の宮のはなのさかりを』

と歌ひ、

『さやかなる鷲の高ねの雲井より影やはらくる月よみのもり』

と歌つて悠々千年の神國を祝賀する時、この昭和時代の私共も少しも昔の西行と異ならないの感が深い。今日の私共は勿論或は百年後五百年後千年後の日本人も依然として昔の人麿であり西行であり芭蕉であるであらう……またそれ等の人々であつて、私共は日本人として世界に獨立してゆけると云はねばならない。

四

私は再び西行の直接問題にかへる。『濱萩を折敷きたる樣にしあれなる住居見るもいと心すむさまなり。大精進菩薩の草を座とし給へりけるかくやと覺えき。硯は石のわざとにはあらで、もとより水入るる所などくぼみたるを置かれたり。和歌の文臺は或時は花がたみ或時は扇やうの物を用ひき。歌の事を談ずとも、「一生幾ならず來世近きにあり」といふ文を座臥の口ずさみに云はれあはれに貴く覺えしか』と西行が二見浦草庵の模樣が、彼の弟子蓮阿の隨筆に出てゐる。然し西行は何處で一時の草庵を結んでも、まづかかる生活をしたものであらうと想像される。そして彼が二見浦を去つた時弟子の誰彼が

これは『西公談抄』に出てゐる。この上書の奥書に『西行上人和歌弟子蓮阿、俗尾崎次郎滿田滿長也、神主者家元民也、官二位宣家也。西行上人和歌之談議謂西公談抄、自筆令書之奥書、如斯云々』今日では本書を僞書とする論者が多い。然し西行者がこのやうな書を相應しいとが書いてあることは本當である。

『東下り』の頭陀僧。

打ち集まつてその名殘を惜み、西行も『君もとへ我もしのばん先き立たば月をかたみに思ひいでつつ』と歌つてゐるが、彼は至る所で詩歌の門人を見出したであらう。彼の名聲は生前既に文字通り津々浦々まで擴まつてゐたかも知れない。人々は至る所でこの瓢瓢旅の一詩客を迎へ、それぞれ彼に便利を與へ彼の旅情を慰めたであらう。彼の旅行は乞食坊主の旅稼ぎではなかつた。

然し外形的には西行は破れた墨染の衣の頭陀僧に過ぎない、旅の見知らぬ人間が彼を尊敬する理由はなかつた。今伊勢を出て『東下り』の西行は、尾張三河を經て遠江の天龍川を渡つて小夜の中山を越し岡部の宿に着いた。西行の有名な歌として、

『年たけて又こゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山』

の一首がある、してみると彼はこの前に一度東遊の旅をしてゐる筈だ。恐らく『心なき身にもあはれは知られけり』の鳴立澤の歌も前東遊の出來事であつたであらう。この前東遊は多分西行の吉野入りをした『畿内めぐり』の後であつたであらうが、關東の何處まで彼の旅行が及んだか知ることが出來ない。私は今西行が箱根山を越え大磯小磯を過

文治二年は日本紀元一八四六、西暦一一八六、西行時に年六十九。西行頼朝を見る條『吾妻鏡』に出てゐる。

ぎて鎌倉に着し鶴が岡八幡宮の鳥居の邊を徘徊してゐると想像する……時は文治二年八月十五日とある。治承四年伊勢で福原遷都を聞いて西行は、今源氏の世と成つてその首都鎌倉の地を踏んでゐる。ああ、この數年間に於ける源平二氏の盛衰は何たる無量の感慨を西行に與へたであらう……源三位頼政が高倉王を奉じての旗揚は宇治川の埋れ木となつた、木曾から立つた旭將軍は粟津原の朝露と消えた、榮拓得喪は掌を反するが如く平家一門は壇の浦の藻屑と亡びた。そして伊豆から起つた頼朝は今天下を掌中に收めて、西行の眼前で八幡宮へ參詣し武運長久を祈つてゐるのである。梶原景季は西行を怪しのものと睨んで彼の名前を尋ねた。西行は『昔は北面の武士佐藤兵衛義清、今は浮世を捨てた一法師西行である』と答へた。頼朝はこのことを景季から聞いて、和歌の清談がしたいから館へ來るやうにと西行へ告げさせた。西行は約束通り頼朝に伺候した。彼は語つた、『長承の末出家の望を遂げた時、私は秀郷朝臣九代相傳の兵法を悉く燒いて捨てた。それ以來弓馬の道は私の心にない。然し私の和歌は花月に對する感興の言葉であるのみで、私は人に語るやうなその奥旨を知らない。若し止むを得ざれば、私は和歌より寧ろ弓馬の道を物語つて折角君の御希望に添ひたい。』頼朝はそれでは有りし昔の武勇の祕密を聞かうとあつて、俊兼なるものに西行の談話を記錄させた、そして彼等兩人は終夜物語に過ごした。翌日西行が頼朝の館を去る時、頼朝は引出物として銀の猫を西行に與へた。西行は銀の猫を手に持つて門前へ出た……無邪氣な子供がそこに遊んでゐるのを見た。『おいお前にこの猫をあげよう』といつて、西行は頼朝の引出物を子供の足下に投げた。この愉快な挿話の後篇は傳へられてゐない。子供は銀の猫をどうしたであらうか。又頼朝はどういふ積りで旅の頭陀僧に銀の猫を與へたのか。然し私は輕い氣持になつて飄乎として其處を立去る西行の姿が眼に見えるやうな氣がする。

鎌倉を去つて武藏野に入る。

彼は鎌倉を去つて『人も住まぬ草花色々に咲き亂れて百の錦を廣げたらん心地して武藏野は行けども秋のはてぞなき』の景に入つた。彼はここで花の机に法華經をならべ入於深山思惟佛道と聲をはり上げて讀經してゐる男を見た。この男は昔都芳門院の侍であつたが、今法華經の力で後世を思ふの外餘念がないのである。そして彼は西行に、『此の野中に住んで既に多くの年を送つてゐるが、御經の力であらうか、彼は虎にも狼にも襲

はれない。また其上腹が空いて來ると天童が雪のやうに白い物を持つて來て與れる。私はそれを見ただけで滿腹の感を持つ』と語つた。西行はこれぞ尊い仙人であらうと感服して、人は讀誦念佛して御佛を賴むより外はないといつて、

『いかでわれ淸く曇らぬ身となりて心の月の影をみがかん』

と歌つてゐる。今草蓬々として天に連なる武藏野を後にして奥羽路に入る……白川の關で秋風に澄み渡つた月を眺めて、

『白川の關屋を月のもるからに人の心をとむるなりけり』

と歌ひ、又關屋で、

『都にて月を哀と思ひしは數にもあらぬすさびなりけり』

と歌つた。實に西行は地上の月だ。地上の月が天上の兄弟とその感情が通じ合ふのは極めて自然である。特に千里と都を離れた旅の孤客西行が奥の細路を照らす秋天の月を眺めた時、如何に彼は悲しい夜半の袂を濡らしたであらう。私は嘗て書いた『自然の現象の中で月位現實との接觸を嫌ひそれと偶然の握手さへ肯られないものはない、月は悠然

秋月に澄み渡る月の白川の關。

西行は地上の月だ。月の姿は出離解脫だ。月は永遠に生死の束縛を離れ、毎夜安養淨土の新生活を開拓しゆく。

として實世界の野卑粗俗から逃れる。花を見給へ、佛壇を飾る淸淨な蓮の花でも人情的である、世俗との友情を交換するやうに見える。然るに月となるとその地上から逃遁する有樣は如何にも巧妙だ。月は樹木の挨拶にも答へずにさつさと上つてゆく。山にも丘にも月を捕へる力がない。雲でも月にかかるとするりと逃げられて仕舞ふ。』私はこの言葉を移して以て西行に適用したい……現實世界をするりと逃れて詩歌の法悅に遊ぶ西行は確に地上の月だ。月の姿は出離解脫そのものだ。月は永遠に生死の束縛を離れて毎夜安養淨土の新生活を開拓しゆく。私は月に人間の言葉を吐かして西行のやうな歌をうたはせたい。

然し西行は稀れなる名僧知識の跡を考へて自分の世の捨工合が完全でないことを歎ずることがある、人間界の憶出に捕はれて生死に迷動することを思つて潸然と泣くことがある。彼は今葛の松原といふ所へ來て、松の木の下に竹の笈と麻の衣とがあるのを見出した。これには何か仔細が有らうと思つて周圍を見廻すと、松の木を削つてその上にかうかいてあつた『昔は應理圓實の覺徒として公家の梵莚に列り今は諸國流浪の乞食とし

て終を葛の松にとる。「世の中の人にはくずの松原と呼ばるる名こそ嬉しけれ」干時保元二年二月十七日權少僧都覺英、生年四十一申の刻に終りぬ。『西行はこの人こそ後二條殿の御子富家の入道殿の御弟で、十年もその行方不明になつてゐたが『くづの松原と呼ばるる名こそ嬉しけれ』と最後せられたことは如何にも求道者の手本であると感激し、自分もそれに見習ひたいと自らを責めた。彼はそれから阿武隈川を渡つて壺の碑へ至ると、『去京一千五百里、去蝦夷國界一百二十里、去常陸國界四百十二里、去下野國界二百七十四里』とある……彼ははるばる遠方へ旅をしたものだと今更ながらに感じた。彼は沼館その他の諸村落を過ぎ、ある田畑の間を通つた時由緒ありげな墓が見えたから其邊の男に聞くと、それは實方中將の御墓だと答へた。西行はそれを聞いて『朽もせぬ其の名ばかりをとどめおきて枯野の薄かたみにぞみる』の一首を詠んだ。

『三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有。秀衡が跡は田野に成て、金鷄山のみ形を殘す。先高館にのぼれば北上川、南部より流るる大河也。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入、康衡等が舊跡は衣ヶ關を隔て、南部口をさし堅め、夷をふせぐと見へたり。偖も義臣すぐりて此城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷て、時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡。

兼て耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を殘し、光堂は三代の棺を納め、三尊の像を安置す。七寶散らせて珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に打て、既に頹廢空虛の叢と成べきを、四面新に開て甍を覆て風雨を凌ぐ。暫時千歳の紀念とはなれり。

五月雨の降のこしてや光堂。」

『三代の榮耀一睡の中。』

これは秀衡榮華の跡を弔ふ芭蕉の文であるが、西行はこの奥州の都會平泉が山に誇り谷に架して壯麗を極める姿を見た。清衡が後三年役の功に依つて餅田の豐田城からここへ移り、衣川と太田川の中間に邸宅寺院市街を建設して子の基衡、孫の秀衡に讓つた……西行がここへ足を入れたのは正に秀衡繁昌の時代である。秀衡は鈴澤と猫間の二つの池の間に伽羅御前を、猫間の池の此方に高館を又彼方に柳の御所を建てた。北上川は東福山の麓を流れ、その流域からこの麓へかけて諸士の住邸や町家が櫛の齒のやうに並ん

四行文治二年十月十二日平泉に著した（山家集）

三間四面の金色堂。

だ。時に堂塔の總稱四十坊舍三面を誇る中尊寺も建築完成を六十年ばかり去つたのみであつたから、西行はその輪奐の美は京都にも比較なしと思つたであらう、又それ等を廻る山川の姿を見て彼は故郷懐しの感に打たれたであらう。

金色堂は三間四面、屋根は寶形造の銅瓦葺、内外四壁床板悉く金色燦爛と光る。内へ入ると柱欄斗栱何れも珠玉を鏤め螺鈿を欲して寶草花文が所狭きまでに施してある。殊に内陣の四本の卷柱は七寶莊嚴で、その柱身に蒔繪で十二光佛が描いてあつて、佛様と佛様の間は螺鈿で寶草花が配置してある。西行はこれぞ阿彌陀如來の御國で精妙莊嚴の極だと感じたであらう。私は今西行が念佛を唱へながら須彌壇へ近づくと想像する……彼は半肉打拔で描出してある孔雀に牡丹唐草さては寶相華を配した迦陵嚬伽、見るもの悉く優麗典雅の萃を集めたもので自然に頭がさがるやうに思つた。彼はかういふ雄麗な構圖や卓越した意匠にも、花や月に於けるやうに涅槃の表現がある。彼はそれ等から菩提の妙音が響いてくるやうに思つて有難涙を流した。

西行は何故にはるばる一千數百里を旅したのであるか。それは單に風雅と念佛の旅行であつたか……いな、彼は風雅と念佛との外、後白河法皇の命を蒙つて東大寺再興の大勸進職を蒙つた俊乘房重源を助ける爲め、秀衡の喜捨を得んとて陸奥に下つたのである。彼が平泉に着いたのは文治二年十月十二日で嵐の烈しい降雪の日であつた。彼は、

『陸奥の東稻川のさくら花よしのの外にかかるしら雪』

の歌から、想像すると、翌年にかけてここに滯在したに相違ない。彼はこの寂しい北國で年を送つて、

『常よりも心細くぞおもほゆる旅の空にて年の暮るれば』

と歌ひ、春光氷を破つて梅の花が白いのを見て、

『一人ぬる草の枕の移り香は垣根の梅の匂なりけり』

と歌つた。彼は秀衡を訪問した。然し西行は秀衡の豪奢な生活には驚かなかつたが、彼の風流には感服した。秀衡はこの遠來の珍客を歡待したに相違ない。西行はそれに對する感謝の意味もあつて、彼が平泉を辭する時秀衡の所望通りに戀の百首を殘した。

彼は櫻の花が落ない中に平泉を立ち出羽の國に入り、瀧の山で、

西行秀衡を訪づる。

『類なき思ひいでは櫻かなうすくれないの花の匂は』

と再び櫻を詠んでゐる。彼はそれから越後に旅の道を取つて京へ歸つてゐるが、幾程の歳月を費やしたか其邊の消息は想像することも出來ない。

西行は今京都をどう見出したであらうか。源平二氏の動亂は靜まつたが保元平治以來の痛ましい戰爭の痕跡は見るもの聞くものに殘つて彼の心を悲しましめ、彼は阿鼻叫喚の叫びの音や酸鼻極まる修羅場の幻を全く忘れることが出來なかつた。彼は往生極樂を夢み靜寂の心境を憧憬して出家したが、果してそれを得たであらうか……彼は依然として生死に迷動する人間である、現實から遣瀨ない追憶を引きだして暗涙にむせぶ人間である。彼は大内右近を過ぎ鳥羽院の昔をしのび萬感胸に溢れて、

『情ありし昔のみなほ忍ばれてながらへばまた憂き世にもあるかな』

と歌ひ、昔の知人を尋ねると早や死んで居つて女房だけが泣いてゐたのを見て、彼は、

『亡き跡の面影をのみ殘しおきてさこそは人の戀しかるらめ』

と歌つた。又ある時鳥邊山で亡き人を送り深夜の月をたち上る荼毘一片の煙の中に見て、

彼は依然として生死に迷動する人間である。現實から追憶を引きだして暗涙にむせぶ人間である。

『鳥邊山鷲の高根のすえならん煙をわけて出づる月影』

と彼は歌つた。

西行は夜冷い床に横たはつて自分の如き不幸な人間はないと思ふことがある……彼が至心信樂の修行を邪魔するものは彼の詩歌である。彼は他を悲しましめる爲め現實世界を捨てたやうに感ずることがある。さういふ時に彼は『諸行無常の世だ』といつて僅に自分を慰める。

『(選集抄) 長承の末の年より無常心にしみて君の忠勤よしなくて、妻子をふり捨てて出で侍りしかば、我が身は流浪の桑門となり、契を結びし女は飾おろして高野の別所とかかやに住み侍る。始はゆかりにつきて都に留まりきと承りぬ。妻子三所に別れて睦言のぶるわざも侍らず、扨も胡馬北風に嘶き、越鳥南枝に巣ふと云ひならはせにや。海人のぬれ衣おもほえて又舊里に上りきて、住馴れし所を見るに築地崩れて門の傾きたりしを見しに、何となく哀に覺えて立ち入り見れば、ありしにもあらず、荒れ果てて人の通ふ氣色もなし。軒の苔垣の蔦、風ぞ僅に拂ひ侍る。葺くことなければ、まばらにて時雨

選集抄に出てゐるこの條も西行の筆ではあるまい。恐らく後人の僞作であらう。

西行の大原生活。

も月もたまらじな。心のままに茂れる草の原にては蟲の聲々鳴きわたり、此處を寢屋とこそ古むべけれと思ひ侍る所までもさながら蟲の住家となりて殊に面白く侍りしかば、歸りて又是にも住まばやと覺え侍りき。身は舊宅の如しと云ふ文あり。此の住家の荒れたる樣我が身の無常思ひ知られて、いとど袂を絞りて歸り侍りき。』……これぞ人間斷腸の言葉である。然し西行は泣き乍らも新生活の門を宗教に見出した、そこが則ち弱い西行が強い西行である所以である。

謠曲『大原御幸』の言葉に、『シテ「山里はもののさびしき事こそあれ、世の憂きよりは中々に、シテ「ワレ「住みよかりける柴の局、都の方の音信は、問遠に結へる笹垣や、憂き節繁き竹柱、立居につけて物思へど、人目なきこそ安かりけれ、折々に心なけれど訪ふ物は、賤が妻木の斧の音、〳〵、梢の嵐猿の聲、これらの音ならでは、正木のかづら青つづら、來る人稀になりはてて、草顏淵が巷に、繁き思ひの行方とて、雨原憲が局とも、濕ふ袖の涙かな』とあるが、西行の大原生活は『人目なきこそ安かりける』の生活であつた、山里は寂しいが住みよかりけるの生活であつた、それでも春の來ること遲いとあつては、

『み山こそ雪の下水とけざらめ都の空は春めきぬらん』

と歌つて京の空を眺めた。一向佛道を修行しながらも、追憶を語り合ひ涙の物語を話し合ふ人を慕つた。彼の歌に

『山里に憂き世厭はん人もがなくやしくすぎし昔かたらん』

とある。

現世を出離する僧院生活。

五

私の詩に『私の若い時には死にたい死にたいと私はいつた』の書出しの一篇がある。私は厭世家であつたが私に斷の一字を缺いたが爲め、爾來三十年も生きのびて今日に至つてゐることを歌つたものだ。然し二十前後の青年詩人で、恐らく三十年前の私のやうに厭世觀に魅せられないものはなかつた。青春の心は柔かい、庭の芭蕉のやうに破れ易い。少くも私に西行に於ける同族の親友左衞門尉憲康の頓死のやうな事件があつたならば、私も現世を出離する僧院生活に入つて居つたであらう。又私の時代は十九世紀の末

葉、私の生活場所は米國であつて、八百年前の陰欝幽怪な京都でなかつた……西行の時代に厭世者となつて出家すること位眞實な、人間に自然なことはなかつた。

保延五年に鳥羽上皇の後宮美福門院の御腹に皇子禮仁親王が生まれ、上皇が門院の愛に溺れて居られた結果當歳の皇子をあげて崇德天皇の皇嗣とせられた。この事は正に崇德天皇と生母待賢門院の衰亡を物語るもので、その外戚に當る人々卽ち西行の主筋の德大寺左大臣一家が如何に失望したかは容易に想像される。この時代に皇室の外戚となることは卽ち宮中の權勢を掌中に納めることであつた。君寵を目的として後宮間に行はれた爭奪戰の如何に激甚であつたかは想像に餘りある。廷臣宮女の生活は神佛の祭祀法要に、春花秋月の遊興に、詩歌管絃に、表面上は如何に優美典雅に見えてもその心中の陋劣さは言語道斷のものがあつたであらう。西行は備にこの消息に觸れた。彼はこの汚い人慾の曝露を何と思つたであらうか。今彼は自分の黨派の衰運を眺めて個人的同情を注ぐに吝なるものでなかつたが、彼には明瞭な理性があつて、批評なくて自黨の行勉を許すことが出來なかつたであらう。彼は野卑欝結な時代精神を不愉快に感ぜざるを得なかつた。憲康頓死以前に西行はこの不愉快な雰圍氣を逃れるには出家の外に道はないと思つたに相違ない。

『空になる心は春のかすみにて世にあらじとも思ひたつかな』

『世を厭ふ名をだにもさは止め置きて數ならぬ身の思ひ出にせん』

と『世にあらじと思ひける頃東山にて人々霞によせて思ひをのべけるに』と前書して山家集に出て居つて、西行は出家前に人の前でかやうの意志を傳へてゐる。實に出家するといふことは彼には生命の新開拓である。擴大である。强者の行爲である。自然が一時的の榮枯盛衰の現實を離れて微笑み自分の姿を齊へる時、自然に解脫の姿がある、往生極樂の姿がある。人間も自然の各存在のやうにその姿を整理する時に眞實の魂が生れる、そして眞實の魂の聲が卽ち眞實の詩歌である。故に詩歌の道は卽ち宗教の道である。西行は出家すると同時に彼の詩歌が生れると信じた。

彼が出家すると同時に彼の詩歌は生る。

佐藤左衞門尉憲康の頓死。

佐藤左衞門尉憲康も生死の問題に對し西行と同じ意見を持つて居つた。彼等は夕方の月を帶びながら連れだつて御所から家路を急いだ。彼等は松風淸い片山里で悟道に入り

西行の妻。

『鳥羽院に出家のいとま申上てよめる、をしむとてをしまれぬべきこの世かは身をすてゝこそ身をも助けめ。』

たいと語り合つて分れた。然るに西行は翌朝參殿の途次憲康の家へ立寄つて彼を同行しようとすると、門の内外で人々が騒ぎ悲鳴の聲が内から聞えた。西行はただ事でないと思つてその仔細をただすと憲康は昨夜頓死したといふことである。西行は驚いて朝露の如き人生の果敢なさに打たれたがこれは彼を決心させる斷の善知識であらうと思つて友人の死に感謝し、直に鳥羽殿に伺候して、君に發心出家のことを申し入れた。龍顏近く仙洞に忠勤するのも今が限りかと思ふと、彼は名殘がいとど惜まれて袖も涙に濡れた。然し彼はこれで長きに渡つた大問題も落著したと思つた時彼の心は一種悲痛な淸々しさを感じた。彼は家へ歸つた……よく繪に西行が愛着の俗緣切れよとばかりに袂に縋る四歳の娘を椽から蹴落してゐる所が描いてあるが、西行はこの位の決心を以て家内に出家の止むを得ない理由を說いたであらう。妻は彼を理解しようとしなかつた、又理解して笑つて分れて呉れといふことは西行の無理であつた。『俺のいふ事が分らなければ勝手にしよ』と呶鳴りつけて、どたばたと西行は家を捨てていつたに違ひない。

西行の妻は案外氣性の勝つた女であつたであらうと想像される。然し彼女は女だ……夫は俗塵を離れて佛の光明に浴するなどと口で綺麗なことをいつては、詰りは自分に厭いたので家を捨てたのだと彼女は思つたであらう。又或時は彼女は西行は他の女と一緒に何處かに隱れてゐるとさへ思つたかも知れない。彼女は理性の勝つた女だ……嫉はれたものならば後を追つたつて仕方ないとも思つたであらう。如何に時代が八百年以前でも西行の行方が分らないといふ理由はないが、西行は恐らく『畿内めぐりや熊野詣』をして直ぐ『東下り』と京都を離れて仕舞つて居つたであらう。彼の最初の東下りは富士山見物が主で鳴立澤邊までで、多分武藏野までには及んで居らなかつたであらう。保元の亂間近くなつて彼が京都と高野山とを往復して居つた頃には、彼の妻は最早や出家してゐたであらう。

選集抄の『西行遇二妻尼一事。』この條も疑問の一章である。西行の筆ではあるまい。

選集抄第九卷中に西行が妻に立會つたことが書いてある、『神無月上の弓張月の比長谷寺にまゐり侍りき。日暮れかかり侍りて、入相の鐘の音ばかりして物寂しき有樣梢の紅葉嵐にただよふ姿、何となく哀に侍りき、扨觀音堂に詣りて法施なんど手向け侍りて、あたりを見めくらすに、尼心を澄まして念珠をすて侍りき、哀さにかく、

彼は人の遁世を聞く位喜ばしかつたことはない。

思ひ入りてすず音の聲すみて覺えずたまる我が涙かな

と詠み侍るを聞きて、此の尼こゝをあげて此は如何にとて袖にとりつきたるを見れば、年頃偕老同穴の契り淺からざりし女のはや様かへにけるなり。』これぞ天から降つたか地から湧いたかの場面である。西行の妻は語つた、『私は君の遁世の疑ひ他の女と御一緒にお暮しかとも相像して君を恨んでゐました……今君の御姿を見て、私は疑ひ深い女であつたことを恥ぢる。私共は君に捨てられて以來寂しい生活をしました。今では娘を母方の伯母の家にあづけて、私は御覽のやうに尼さんになつて只管後世を願つて居ります。』西行はそれを聞いて喜んだ。如何なる場合を問はず又どんな動機からでも、人が出家するといふことを聞く位西行を喜ばせることはなかつた。その後西行は四歳の時分れた娘に面會して彼女を出家させてゐると西行物語に出てゐる。西行に遁世勸誘病があつた。彼は公衡中將にそれを勸め又侍從大納言成通や中院右大臣雅定等にも勸誘してゐる。

『いつ歎きいつ思ふべきことなれば後の世知らで人のすぐらん』

私の興味は頼朝の與へた銀の猫にない。

愚祕抄の語る所。

と歌つて人に出家を勸めてゐるが、迷悟の境に立つといつた人に、

『世を捨てぬ心のうちに闇こめて迷はんことは君ひとりかは』

と歌つて自責の言葉としてゐる。

然し西行は人に風雅を勸誘して居らない。詩歌の道は自ら求むべきものだ、人から敎へられても何の役に立たないと彼は信じた。彼の詩歌は感興が自然に齎らす結果で豫定の行動でない。彼自身も如何にして彼の歌が出來たかの理由を人に語ることが出來なかつたに相違ない。私は文治二年鎌倉に於ける頼朝と西行との會見に興味を持つものだが、私の興味は西行が貰つた銀の猫を門前の小供に與へた所にない……私の興味は彼が詩歌を頼朝に語らなかつた點にある。詩歌は祈禱である、祈禱の言語は語られてもその心持は他に傳へられる筈のものでない。西行は詩歌は神聖で問題とすべきでないと思つて居つたであらう。この點が彼を和歌の第一人者だとするに十分である。彼は口で歌は語られないといふ……これが彼が作られた歌人でない證據でなくて何であらう。

愚祕抄に『先年仙洞にて老若の勝負の御歌合當座なりしに、西行出すなたて籠めてよ

ませよと勅定なりき、げにもと覺えて侍りしが、さればその時はさまで秀逸とおぼしき歌なかりき』とあるが、これは當然過ぎる當然である。如何に西行と雖も自然の感興の無き所から立派な歌を生むことは出來ない。彼は頭で歌を習つた技巧家でない、所謂六條二條の門に敎を乞ふて辭章を練つた歌の製造人でない。西行は自然の諸現象に佛性を認めた時偶然に詩歌を拾つた汎神論者である。若し彼が普通の汎神論者と異つてゐるならば、それは自然の現象がいづれも彼と共に泣き或は時に笑ひ、罪障消滅の道として念佛を唱へてゐると思つた點にある。彼は自然の個性を認めた……即ち月は彼と共に泣き、秋の夕は彼と共に骨を嚙むやうな寂寞を味つた。西行位個々別々の現象の劇的表現を眺めた歌人はない。彼はものの哀れを歌つた、又寂寞を歌つた、そしてそれ等を劇的に取扱つた。彼の歌の大部分は感傷的のものであるが、その感傷性が適當に表現された劇的姿勢は麗しい。さういふ場合に彼の歌は自然の方則を音律に響かして自由の三昧境に立つであらう。

彼の時代の詩歌精神は單調不活潑であつた。萎縮沈滯して千篇一律であつた。それ等

彼の時代に於ける詩歌精神は單調不活潑であつた。

後鳥羽院御口傳云『後賴が後には、西行、俊憲、俊頼阿闍梨也、すがたことにあらぬ體也。……西行はおもしろくて、しかもこころもことにふかくてあはれなる、あり、がたき出來がたくもに相かたもとれてみゆ、生得の歌人とおぼゆ。このなげにおぼゆ。なんとすべきの人のまれびと歌なり。云々可說の上手なり。』

が無味平凡な環境に吸込まれた時に、西行の歌だけは毅然として獨立の境地に立つた、如何となればそれが詩歌の現實主義であつたからである。今日の詩歌の現實主義は有名無實の感なしでないが、彼のそれは實際の行爲そのものであるが故に、その價値は永劫に光を放つと云へる。今日彼の歌が生きてゐるやうに百年後も五百年後も等しく日本人に生きるであらう。私は現實主義の半面は神祕主義であると信ずる……即ち西行の歌はこの二面を備へてゐる。彼は山川草木を現實的に眺めた、故に神祕的の表現をすることが出來たのだ。この奧旨は彼だけに屬するもので、彼とても人に傳へることが出來ない。定家が宮河歌合の判に『ひとの心幽に歌の姿高くして空よりも測がたし』といつたのは、その點を認めたものであらう。又後鳥羽院口傳にも、西行の歌は『おほろげの人のまねびなんとすべき歌にあらず不可說の上手なり』といつてある。

西行が二見浦滯在中の弟子蓮阿は、假令『西公談抄』が僞書であるにしても、兎に角そのなかに西行は『よき歌は誠にたやすく出來がたりし祈りもすべき事なり』と云ひ、又『和歌は常に心澄む故に惡念なくて後世を思ふも其の心を澄しむるなり』と書いてあ

る。彼の歌は祈禱から生れたものだ。如何なるものでも祈禱の姿は麗しい。實に自然は祈禱のうちにその姿を齊へる……青い秋の空へ祈禱を捧げる樺の木の姿は麗はしい。海岸に打寄せる春の海に祈禱を捧げる松の木の姿は麗しい。祈禱なきものは何物も生長しない。ああ詩歌が祈禱から生れる時何たる麗しい姿を備へるであらう。西行は、『和歌はうるはしく詠むべきなり』といつたとあるが、それは決して外形的の言葉ではあるまい。詩歌は祈禱の姿を得て始めて麗しくなることが出來る。

然し彼の歌は彼の生活の脚註みたやうなものだ。彼の歌は彼の生活と相待つて十分の光輝を放つ。ある意味からいふと彼の生活の方が彼の歌より遙に暗示的であつたとも云へる。日本の文學史は長いが、西行位詩歌即ち宗教一つに生きた人間はない、彼の生活は普通の人間には奇怪に見えるであらう。然し彼自身には彼の生活は最も自然なものであつたに相違ない。

私は西行が如何なる風采容貌の男であつたらうかと想像する。セント・フランシスは快活な小柄の人で一寸見たよりは實際の方が高かつたと聞いて居るが、西行もさういふ

西行の風采容貌を想像して見る。

印象を人に與へたと思はれる。云はば中肉中脊の日本人だ、きりつとした好男子であつたであらう。彼が出家前仙洞御所の武士であつた頃紺叢濃の直垂に唐綴縅の鎧を着け重藤の弓に二十四差したる大中黒の矢を負つた姿は、どんなに立派に彼が見えたであらう。彼は確に紫宸清涼兩殿を飾るに足る美丈夫であつたに相違ない。男振はよし歌は上手これぞ鬼に金棒だ……彼は御殿の女連の間に人氣男であつたに相違ない。女房堀川中納言の局さては待賢門院も非常な好感を彼に持つて居られたらう。堀川と西行との戀愛談を紡ぐことは出來ないが、晩年に至るも彼等の交際は續いて堀川が、

『此の世にて語らひ置かむ郭公死出の山路のしるべともなれ』

といつて來たのに、西行は、

『郭公なくなくこそは語らはめ死出の山路に君しかからば』

と答へてゐる。彼は所謂遁世後は洗濯もろくにしない着物を綻びたまま着て居つたであらうが、いつも小綺麗にさつぱりと見えたと想像される。

小さつぱりした好男子は得て潔癖家であるが、少くも精神的に西行は潔癖家であつた。

潔癖家であつた。

セント・フランシスと西行法師。

古今著聞集にかういふ話が出てゐる、『西行法師出家より先は徳大寺左大臣(實能)の家人にて侍りけり。多年修行の後都に歸りて、年頃の主君にておはします睦まじさに、後徳大寺左大臣(實定)の御許にたどり參りて、まづ門外より內を見れば寢殿のむねに繩を張りけり。怪しく思ひて人に尋ねければ、あれは嵩するゑじとて張られたりと答へけるを聞きて、嵩の居る何かは苦しきとて疎みて歸りぬ。』これは一少事ではあるが西行の潔癖性を證明するに足る。それから、同文章に『次に實家の大納言はいづくにぞと尋ね聞きけるに、北の方の思ふやうにもおはせざりければ、あながちに利をも留めたる御振舞うたてしとて尋ね行かず』とあるが、彼の性癖から見ると成程と思はれる。

セント・フランシスは難行苦行と實際宗教の戰爭で疲勞して僅か五十歳で死んだが、わが西行法師は七十三歳(或は七十八歳)まで生きた……セント・フランシスより二十年も長命した理由は何處にあつたか、西行は心に迷ひながらもその迷ひを人間眞實の姿と眺めて山川草木の間に悠々と一笠一杖の生活を續けたからであらう。假令芭蕉のやうに臨終の詳細は知ることが出來なくとも、私共はもう少し詳しくこの雲水流浪の歌人修

河內名所圖會に、『龍池山弘川寺、弘川村にあり眞言宗。西行堂、西行上人の尊像を安置す、文覺上人の作。西行上人墳、本堂より二町許奧にあり、塚上に石標あり、圓位上人墓墳の圍り、凡そ二十五間、高さ二間餘古松樫、椿の類數十株あり、塚前に燈籠、表石に西行上人之墓と鐫す、寶曆四年甲戌十一月刻す。』

行者の臨終を知りたい。東山雙林寺の傍の草庵で、

『願はくば花の本にて我死なむその更衣の望月のころ』

と歌つて、釋迦入滅の頃花と月との間に死にたいと願つた西行は、今河內の弘川寺の病褥に横たはつてゐる。最早や酸鼻な保元平治の幻も彼に接近しない、崇德上皇の痛ましい追憶も彼を苦しめない。彼はうとりうとりとしながら大自然が響かせる平靜な音律の波に浮かんで　西方の極樂へと漂つてゆくやうに感ずる。彼は不思議な靈香を鼻に嗅ぐ、彼の棚引く紫雲と紫雲との間から聞える妙音を耳に聞く、彼は光明かがやく三尊の來迎を眼に見る……時は幽契違はず建久元年二月十六日、彼は西へ向つて微かに念佛し最後の歌として　……

『佛には櫻の花を奉れ我が後の世を人とぶらはば』

西行の死は廣く時の歌人の間に悼まれた、俊成は『願ひ置きし花のもとにて終りみの蓮の上もたがはざらなん』と、定家は『望月の頃はたがはぬ空なれど消えけん雲の行方悲しき』と歌つて悲んだ。西行死後七百幾十年、自然は時々刻々に榮枯盛衰の挽歌を歌

ふ、私共の眼に時と空間とを超絶する詩歌の世界にこの多情多恨の一求道者の姿が永遠に彷徨するのを見る。

時と空間とを超絶する詩的一求道者の姿。

西行が『御裳濯川歌合』をその俊成に送つてその判を乞うたのは、文治五年七十歳で、西行時に七十二歳。俊成はそれを河内弘川寺へ送した。西行その時そこに滞在してゐたのである、即ち西行の死去の前年である。

御裳濯川歌合

作者　西行法師
判者　俊成卿

一番　左　山家客人
岩戸明しあまつみことのそのかみに櫻を誰かうへ初めけむ

右　野徑亭主
神ち山月さやかなるちかひ有て天の下をは照らす成けり

豐あし原の國のならひとして、なにはづの歌は、人の心をやはらぐる中立と成にければ、是をよまざる人はなかるべし。しかはあれども、よしとはいかなるを云、あしとはいづれを定むべしとは、我も人もしる所にあらざるものなり。そのゆへは、あをによし、奈良のみやこのとき、えらびをかれたる萬葉集は、世もあがり、ひとの心をよ

西行が『御裳濯川歌合』をその俊成に送つてその判を乞うたのは、文治五年七十歳で、西行時に七十二歳。俊成はそれを河内弘川寺へ送した。西行その時そこに滞在してゐたのである、即ち西行の死去の前年である。

眼前の櫻を見て、太古にもかうはいふ見事なあらうかと想像するとすると、千年の日月もその長さを失つて所謂天地開闢

も極めて現實的に感じられて來るあ、誰がわが國に始めてあらうか、誰もそれを知らない。恐られくは自然の悲しい。陽春四月の櫻と顯れて櫻の國土を飾らるにて至つたこの禮讃は詩的に章いの。神路川の月は皎々と照つて永の神の御稜威は、優しい歌の終で心は、匹敵窟『櫻の歌』には、得るのだが、理つてはいい點が目立つて見える。私は左の歌を右の方より優れるとするものである。

びがたければ、暫くをく。それよりこのかた、紀貫之、凡河内躬恒等が、えらべる所の古今集こそは、歌のもととは仰べきことなるを。同集のうたをも、或ゐにかける女にたとへ、しほめる花の匂ひのころによそへ、或商人のよき衣きたるといひ、田夫の花のかけにやすめるがごとしといへり。是等のこころをおもふに、撰集は、さまざまの歌のすがたをば、わがすそのすぢにとりて、よろしきをとりえらべる成べし。彼ときより後、四條大納言公任卿、さまざまのうたの道をみがき、あるはとをあまりいつつがひの歌を合、あるは三十あまり六つがひのうたをたたかはしめ、九しなの歌をさだめたり。これすなはち、おほくは古今集の内のうたを、あるは上が上の品にあけ、あるは下が下の品にをけり。此等のたぐひは、疑心のむすぼほれぬべけれど、先達のことばをよぶ處にあらず。今の世の人は、歌のよしあしをいはむにつけて、さかひに入ざるほどに、しらざるものなり。抑歌合といふものは、上古にはありけむを、しるしつたへざりけるにや、亭子のみかどの御ときより、しるしをかれたれど、あるときは勝負をつけられず。あるおりは勝負をばつけながら、判の詞はしるされず。村上の御とき、天徳の歌合よりぞ、判のことば書きしるされて後、永承、承暦の歌合、ならびに私のいへにいたるまで、勝劣をつけしるすことになりにたる。あるは佛事によせて結緣と稱し、或は靈社によせて、神感をかけてつがひをむすび、判をうけしむる間、かつは今の愚老にいたるまで、かたのごとく、古きあとをまねびつつ、をよばぬこころにまかせて、勝負をさだむること、すでに數なく成にけむ。つらつらこのことをおもふに、かつは此道の先賢のなきかげにも、みおもはれむこと、その耻かぎりなし。いかにいはむや、住吉明神より始奉りて、照しみそなはすらんこと、そのおそれいくばくぞや。しかるのみにあらず、齡かたふき、老にのぞみて後は、朝に見ること、夕にわすれ、夜半の莚におもふこと、あかつきの枕にとまることなければ、古き時の證歌、今の世の作法、見ることきくこと、ひとつも心に殘事なし。よりてちかきとしより此かた、なかくこのことたちをはりにたれど、今、上人圓位、壯年のむかしより、たがひにをのれしれるによりて、二世のちぎりをむすびをはりにき。各老にのぞみて後、離居は山河を隔るといへども、むかしの芳契は、旦暮にわすれることなし。その

うへ、これはよの歌合の儀にはあらざるよし、しゐてしめさるる趣をつたへ承により て、例の物覺えぬひがことども、註し申べきなり。さおもふやうの事のつゐでには、哀におもひつづけられ侍ることを、とどめがたくてなん。むかし、天承長承の比ほひより、かくのごとく此道にたづさひて、或時は、はこやの山の花のもとにつらなり、ある時は、雲井の月の前に見なれしともも、むかしの夢にのみなりぬる世に、ひとの數にもあらず、桑の門のすて人と成ながら、今まで世にながらへて、かやうのすすろことを書付侍るにつけても、竹の窓に露しけく、苔の袂しほりあへかたく侍るを、かかるもくづのみだれたることのはながら、かけまくもかしこき、神かぜのつてに、みもすそ川のみぎは、玉くしのはのかけにもちり侍らば、おほうち人の中にも、をのづから、露の哀はかけられ侍らむや。

一番の一つがひ、左の歌は、春の櫻をおもふあまり、神代のことまでたどり、右歌は、天の下をてらす月をみて、神路山の誓をしれるも、ともに深くきこゆ、持とすべし。

二番　左

櫻の宮の花は今爛熳と咲いてゐるが、その運命は神のみが知召す所であるの。神風は何の邪念がある筈がないと安心して、花は自らを美麗にすることに勉めると、實に歌ふ心は私は左の歌を優れりとする。

爛熳たる春の櫻を雲に譬へることは平凡である。又右の歌も理窟がかつて面白くない。この二首は面白くないの點で持とすべきであらう。

神風に心やすくそまかせつる櫻の宮のはなのさかりを

右

さやかなる鷲の高ねの雲井より影やはらくる月よみのもり

左のさくらの宮、右の月よみのもり、又勝劣なし、なほ爲ㇾ持。

三番　左

をしなへて花のさかりに成にけり山のはことにかかるしら雲

右

秋はたた今宵一夜のななりけりおなし雲ゐの月はすめとも

左歌、うるはしく長高くみゆ。右のうた、是も歌のすがたいとおかし。十五夜の月をめづるあまりに、今夜一よの名なりけりといへる、心ふかしといへども。なを殘りの秋をすてむを、いかがときこゆ。左こともなくうるはし。勝と申べからむ。

四番　左

なへてならぬ四方の山への花は皆吉野よりこそ種はとりけめ

月の桂の連想は今日から見るとなんの意味もなくてあるのみならず、この月のなにのは生氣と櫻と共に今吉野の日優美をそそもふし。歌にふと思ふ左の感がそもつ一種の歌をあるる。て來の私いと

人に愛愁をそそる秋の風は動然しいて止まなの月は一天上のべき無語の發すくるがの時寂のあるの愛愁の影の移りゆの歌が感にはの一段右の勝だがあ

秋になれは雲ゐのかけのさかふるは月のかつらに枝やさす覽

　左右ともに心有て聞ゆ。但左の初の句、右の中の五もじ、殊歎美のことばにあらずや侍らん。持なるべし。

五番　左

思ひかへす悟りやけふはなからまし花に染をく色なかりせは

　右

身にしみて哀しらする風よりも月にそ秋の色はみえける

　左のさとりやけふはなからましといひ、右の月にそ秋といへる、心すがたともにおなじ又爲レ持。

六番　左

春をへて花の盛にあひきつつおもひ出おほき我み也けり

　右

左の歌は、春秋月はことなりといへども、歌の心はおなじすぢなるを、思ひ出おほきといへるより、月を詠てとしをへにけるといひすてたるなど、少まさり侍らむ。

七番　左

ねかはくは花のもとにて春しなむそのきさらきの望月の比

　右

こむ世には心の中にあらはさむあかてやみぬる月の光を

　左の花の本にてといひ右の來む世にはといへる、ともに深にとりて、右は、打まかせて宜歌の體なり、左は、ねがはくはとをきて、春しなむといへる、うるはしきすがたにはあらず。此體にとりて、かみしもあひかなひ、いみじく聞ゆる也。さりとて、ふかき道にいらざらむ輩は、かくよまんとせば、かなはざることありぬべし。これは又、いたれるときのことなり。姿は雖レ不相似一。なずらへて持とす。

八番　左

浮身こそいとひなからも哀なれ月をなかめて年をへにける

　左右歌、春秋月はことなりといへども、歌の心はおなじすぢなるを、思ひ出おほきといへるより、月を詠てとしをへにけるといひすてたるなど、少まさり侍らむ。

七番　左

ねかはくは花のもとにて春しなむそのきさらきの望月の比

　右

こむ世には心の中にあらはさむあかてやみぬる月の光を

　左の花の本にてといひ右の來む世にはといへる、ともに深にとりて、右は、打まかせて宜歌の體なり、左は、ねがはくはとをきて、春しなむといへる、うるはしきすがたにはあらず。此體にとりて、かみしもあひかなひ、いみじく聞ゆる也。さりとて、ふかき道にいらざらむ輩は、かくよまんとせば、かなはざることありぬべし。これは又、いたれるときのことなり。姿は雖レ不相似一。なずらへて持とす。

八番　左

左の歌は、春秋月はことなりといへども、歌の心はおなじすぢなるを、思ひ出おほきといへるより、月を詠てとしをへにけるといひすてたるなど、少まさり侍らむ。

七番　左

ねかはくは花のもとにて春しなむそのきさらきの望月の比

　右

こむ世には心の中にあらはさむあかてやみぬる月の光を

　左の花の本にてといひ右の來む世にはといへる、ともに深にとりて、右は、打まかせて宜歌の體なり、左は、ねがはくはとをきて、春しなむといへる、うるはしきすがたにはあらず。此體にとりて、かみしもあひかなひ、いみじく聞ゆる也。さりとて、ふかき道にいらざらむ輩は、かくよまんとせば、かなはざることありぬべし。これは又、いたれるときのことなり。姿は雖レ不相似一。なずらへて持とす。

八番　左

私は西行の歌に思ふわかれの言葉が多くあるのは実際死ぬとき『捨はてて身』の感ぬ死んだとき例の失禮なこつてはいとなにこのみるやうな骨賛にが薄い。右の歌の方がいい。

同感。

花にそむ心のいかて残けむ捨はててきと思ふわか身に

右

更にける我世のかけを思ふまに遥に月のかたふきにけり

右歌、いとおかし。但左歌、なをことともなく宜、かちとや申べき。

九番　左

よしの山こそのしほりの道かへてまたみぬかたの花を尋ん

右

月を待高ねの雲ははれにけり心あるべき初しくれかな

去年のしをりといひ、たかねの雲はといへる、姿こころともにおかし。持とす。

十番　左

よし野山やかていてしと思ふ身を花ちりなはと人や待らん

右

ふりさけし人の心そしられける今夜みかさの月を詠て

同感。

左の歌のやうな擬人法は今日から見ると実に鼻持ちがならない。右の『岩まとちし』の歌は平凡な自然の姿ではあるが千古不滅だ……自然が平凡であるやうに平凡な歌の姿は尊い。

右の歌は今日の私共から見ると、いささか似而非風流の感なきを得ない。そして左の『色つつむ』の歌は平

今夜みかさのとをける詞は、優に聞ゆ。ふりさけしといへる、初の句やいかにきこゆらむ。左歌こともなく宜。勝と申べからむ。

十一番　左

立かはる春をしれともみせかほに年をへたつる霞成けり

右

岩まとちし氷も今朝は打とけて苔の下水道もとむらん

左歌、姿心相叶てみゆ。但みせかほにといへる詞、我も人もみなよむことばかり。さはありながら、猶歌合などには、ひかふべきにやあらむ。かつは歌のさまによるべし。

右歌、心詞おかし。勝とや申べき。

十二番　左

色つつむのへの霞のしたもえて心をそむる鶯のこゑ

右

とめこかし梅さかりなる我やとをうときも人は折にこそよれ

安朝の大宮人の着るといふ紫色の装束のやうに艶なれど何等詩的新鮮味なし。然し無理に勝負をつけようといふならば、俊成の判のやうに左の勝。

右の歌は前出十一番の『岩まとちし』の歌と同様に平凡なる自然詩である。十一番の歌が、私を引きつけるのやうに左の歌は路傍の印象にのみ止るが、歌人の所かうい拾つたとも思ふ態度が出てゐる。私は面白く感ずる。右の方が表面的に見るとそんな譯でいが、左の歌を取る。

左右、春の歌、ともに艶なるにとりて、右は今少おかしきさまにみゆる。左うた、詞いひとめぬさまながら、心なをおかし。今少まさるとや申べからむ。

十三番　左

山かつのかた岡かけてしむるのの さかひに立る玉のを柳

右

降つみし高ねのみ雪解にけり 清瀧かはの水のしら波

左うた、さることありとみる心ちして、めづらしきさまなり。するの句、をの字や少いかが、さもよみてはべるかとよ。右うた、すがた面白みゆ、まさると申べし。

十四番　左

つく〳〵と物思ひをれは郭公 心にあまる聲聞ゆなり

右

うき世おもふわれかなあやなほととぎす 哀こもれる忍ねの聲

兩首のほととぎす、ともに心こもりて、よき持なり。

兩首共に西行式感傷の歌で眞實味少い。西行には時鳥の聲が『哀こもれる忍ねの聲』なら聞たかは知らないが、私は時鳥の歌には聞ゆるあまりの方に相應しいやうに思はれる。然し左の歌は前出八番の歌に更に前出の世番の歌を思ふ我ふまに』かけて思ふと同じやうなものだ。持心こもりてよくき持ちの歌ちなの歌でなくて結ちのでよてあらう。

十五番　左

鶯の古巣よりたつほととぎすあるよりもこき聲の色哉

右

きかすともここをせにせむ郭公 山たのはらの杉のむら立

古き歌合の例は、花をたづぬるにも、みるをまさるとし、ほととぎすを待にも、きけるを勝とすることなれども、是はただ、うたの勝劣を申べきなり。あるよりもこき心、おかしく聞えながら、又おり〳〵人よめる成べし。山田の原のといへるすがた、凡俗及びがたきに似たり。勝と申すべし。

十六番　左

ほととぎす深き峯より出にけり 外山のすそに聲の落くる

右

五月雨の霽間もみえぬ雲路より 山郭公鳴て過なり

右歌、難とすべき所なく、高く聞ゆ。左かた、ほととぎすふかきみねよりいでて、外

何故に山田の原が凡俗及び難いかを私は知らないが、この判に私は賛成する。

同感。

山のすそにこゑのおつらんほど、今まさしく聞心地してめづらしくみゆ。左まさるとも申侍らむ。

十七番　左

哀いかに草はの露のこほる覽秋風たちぬ宮城のの原

右

たなはたの今朝の別れの涙をはしほりやかぬる天のは衣

左右の初秋の歌、ともに艶なるべし。但右はかやうの心聞なれたるべし。左みやきのの歌に『露のこぼるる』といふのもちと嫌だ。右の歌も今日から見ると至つて詰らないといふ氣がする。いづれも愚作であらう。

十八番　左

大かたの露には何の成ぬらん袂にをくは涙なりけり

右

心なき身にも哀はしられけり鴫立澤の秋の夕暮

鴫立澤といへる、こころ幽玄に、すがたをよびがたし。但左のうた、露には何のといへる、詞あさきに似て、心殊にふかし、勝と申べし。左の歌の不自然さが、私には面白くない。右の鴫立澤の歌の方がどんなにいいか知れない。俊成が左の歌に、詞あさきに似て心にふかし』と評してゐるのは私にはどういふ意味か分らない。

十九番　左

あし曳の山陰なれはと思ふまに梢に告る日くらしの聲

右

山里の月待秋のゆふくれは門田のかせの音のみそする

左のうた、こすゑにつくるといへる、心ふかくゆへありて聞ゆ。但此まにといへる詞は、又人常によむことなれど、なをおもふべくやとおぼえ侍る。かやうの事は、人かへりてわらふべきことなり。しかあれども。一身思ふ所を、此次てに申出るなり。右歌は、難とすべき處なくはみえながら、又よみつべきことにや。なを左末の句。心まさると申べきなり。

廿番　左

長月の月のあり明のかけふけてすその原にをしか鳴也

右

私は寧ろ右の歌の自然さを取る。

同感。

月みはと契りをきてし古郷の人もや今宵袖ぬらす覽

すそののはらといへる、心ふかくして、姿さびたり。但人もや今宵といへる、詞をかざらずといへども、哀殊にふかし。右なほ勝るべし。

廿一番　左

蛬夜さむに秋のなるままによはるか聲の遠さかり行

右

松にはふまさのはかつらちりにけりと山の秋は風すさふらん

左右ともに、すがたさび、詞おかしく聞え侍り。右のまさのはや、少いかにぞ聞ゆれど、とやまの秋はといへる、末の句優に侍れば持と申べくや。

廿二番　左

霜さゆる庭の木のはをふみ分て月はみるやととふ人もかな

右

山河にひとりはなれて住をしの心しらるる波の上哉

同感。

別に評なし。

平安朝以降鎌倉朝へかけての歌人の戀歌を讀むと、たゞそのの情調の繊細微妙なる點が如何に精妙にあるかに驚かされるが、苦しそれ等の生活の伴ふものに生がいとしたならばそれは單に空虛な言葉の遊戯に過ぎない。

右歌。いみしく艶にはきこゆれど、左歌、心すがた殊宜勝。

廿三番　左

大原やひらの高ねのちりければ雪ふる里を思ひこそやれ

右

枯野うつむ雪に心をしらすれはあたりの原に雉子鳴也

左歌は、たた詞にして哀ふかく、右は、こころこもりて姿たけ有。なずらへて爲レ持。

廿四番　左

數ならぬ心のとかになしはてししらせてこそは身をも恨め

右

もらさてや心の底をくまれまし袖にせかるる涙なりせは

兩首の戀、共にこころふかしといへども、右のうた、なをよし有てきこゆ、まさるべくや。

廿五番　左

ただ想像の上に於てのみとしても、四行にかういふ情緒があつたといふことは私は感ずるのみ。私は歌の價値を批判しない。

あやめつつ人しるとてもいかかせむ忍ひはつへき袂ならねは

右

たのめぬに君くやと待宵のまの更ゆかて只明なましかは

左、しのびはつべきなどいへる、末の句はいとおかし。初の五もじや、いかにぞ聞ゆらむ。右歌、心ふかくやあらむ、又勝とすべし。

廿六番　左

世をうしと思ひけるにそ成ぬへき吉野のおくへ深く入なは

右

この兩首共傑出した作でない。

斯る身をおほしたてけむたらちねの親さへつらき戀もする哉

左の、よしののおくへ入、右の、親さへつらきの心、ともにふかくぞきこゆ。大かたは此いづこへと云への字は、これ又ふるくもちかくも、人よむことにはあれど、こひねがふべきにはあらざる也。是もおもふ所を、つゐでに申出るなり、但歌のほど持とす。

同感。

廿七番　左

人はこて風のけしきも更ぬるに哀に雁の音信て行

右

物おもへとかからぬ人も有ものをくやしかりける身の契り哉

左の『なげけとて』の歌は所謂諧調も優美で、その感傷的情緒にも神祕的な所があつていい。右の歌以上に上出來だと思ふ。

左も、心ありてをかしくきこゆ。右歌宜、まさると申べし。

廿八番　左

なけけとて月やは物をおもはするかこちかほなる我涙かな。

右

しらさりし雲井のよそにみし月の影を袂にやとすへしとは

左右兩首ともに心ふかく、姿優なり。よき持と申べし。

廿九番　左

あくかれしあまの河原と聞からにむかしの浪の袖にかかれる

右

私は枯葉に渡る風を聞いて、春の夢も過ぎたと感ずるの歌に自然味がある。私は左より右を取る。

嗚の鐘に耳をそばだてる寂寞詩人の情緒何物にも譬へることが出來ない。到底右の歌のやうな愚作の及ぶ所にあらずだ。

剛首共所謂歌人の常套情調で面白くない。

津の國の難波の春は夢なれやあしのかれはに風渡る也
ともに幽玄の體なり。又爲レ持。

卅番　左
しけきのをいく一村に分なして更にむかしを忍びかへさん
右
枝折せて猶山ふかく分いらむうきことときかぬ所有とや
左、こゝろことにふかく、右、いとふ心またふかし。なほ可レ爲レ持。

卅一番　左
曉の嵐にたくふ鐘の音を心の底にこたへてそ聞
右
よもすがら鳥の音おもふ袖の上に雪は積らて雨しほりけり
右歌、末の句などおかし。但左歌、ことに甘心す。仍爲レ勝。

卅二番　左

いづれも詰らない連想を人に强ひるのみだ。

私はこの種の宗教めきた作にはとんと感服しない。

花咲し鶴の林のそのかみをよしのの山の雲にみる哉
右
風かほる花の林に春くれて積るつとめや雪の山みち
左、鶴林をよしののおくに察し、右、春風の花前に雪山を思へる、心すがた無二勝劣一。
可レ爲レ持。

卅三番　左
鷲の山思ひやるこそ遠けれど心にすむは有明の月
右
あらはさぬ我心をそ恨むへき月やはうときをは捨の山
二首。尺教のこころ。左は靈鷲山をおもひ、右はをはすて山をひけり。天竺和國雖二各
別一所詮は心月輪を觀ぜり。歌の品も又同心仍なを爲レ持。

卅四番　左
わか葉さすひらのの松は更にまた枝にやちよの數をそふ覽。

兩首共至つて詰らない。

四行はどの天子樣を心に描いてその聖朝を祝賀したものか私は知らない。

神意宇宙に滿ちて春風千古に盡きな

澤邊よりす立はしむる鶴の子は松の枝にや移り初覽

左歌は、ひらのの松にわかばをささしめたる、定てそのゆゑありけんかし。右歌は、ただ澤べの鶴の子の、松のうつりそめたるは、悅のこころ、左には及がたくやと覺え侍れと。うたのほどはなを持成べし。

卅五番　左

くもりなき鏡の上にゐる塵をめにたててみる世とおもははや

右

たのもしな君〳〵にます折にあひて心の色を筆に染つる

左右ともに、由緒ありけむとはみえなから、左は訴訟のこころ有、右聖朝にあへるにたり。仍右爲レ勝。

卅六番　左

ふかく入て神ちのおくを尋れは又うへもなき峯の春風

風い。上つては春の風となり、下つては御裳濯川の秋を祝ふ詩人の國土觀の情熱如何にも尊し。ここに於てひひこの感深く西行は偉し。特にこの二首は最初の『岩戸明し』と『神ち山』との二つと相應じてこの歌合に一層嚴肅の感を人に與へずに置かない。

右

流たえぬ波にや世をはおさむらん神風涼しみもすそのきし

左歌は、心詞ふかくして、愚意難レ及。右歌も、神かぜ久しく、みもすそのきしに冷かならんこと、勝劣の詞くはへがたし。仍持と申べし。

まことにや、此歌はじめに、もも枝の松と侍るは、愚詠たてまつるべきにやとて。

ふちなみもみもすそ川のすゑなれはしつえもかけよ松の百枝に

副送二首。

契りをきしちきりの上にそへをかむわかのうら地のあまのもしほ木

このみちのかたきさとりをおもふまに蓮ひらけはまたたつねみよ

かへし。

わかのうらにしほ木かさなる契りをはかけるたくものあとにてそしる

さとりえて心のはなのひらけなはたつねぬさきに色そそむべき

表紙にかける歌。

西行は俊成に依頼したもどう思つて俊成のか。これ等の歌かから見る巧技とは俊成の家でいつこの世の單にに過ぎ彼のとつて西行を評は明瞭だが、外に案ずるは居られて私は行手には俊成認めないを相西行をつ思ふ。彼にはなくてどもよ俗的な一面が案外世つたかも知れない。

藤なみをみもすそ川にせきいれてももえの松にかけよとそおもふ

此歌諸本闕。今據二古今著聞集一附レ之。

この歌合も『御裳濯川歌合』と同時に、或は前後して、定家に送りそのの判を乞つたものである。然しここに納められてゐる西行の歌は、概して『御裳濯川歌合』の歌に劣つてゐるやうに思はれる。この二つの國土禮讃の歌は、實際に『御裳濯川歌合』のなかのものに比較

宮河歌合

作者　西行法師
判者　定家卿

一番　左　玉津島海人

萬代を山田の原のあや杉に風しきたてて聲よはふ也

右　三輪山老翁

流れ出て御跡たれますみつかきは宮川よりやわたらひのしめ

左右歌。義隔二凡俗一。興入二幽玄一。杉上之風聲。模二柿本之露詞一。見。宮河之流。深二蒼海之底一。短慮易レ迷。淺才難レ及者歟。仍先爲レ持。

二番　左

くる春は峯に霞を先たてて谷のかけひをつたふなりけり

すると、どうも二番煎の感がある。定家の漢文評もきざだ。今日高襟が文中に英語を入れる類であらう。

兩首共に勝負を爭ふほどの價値あるものでない。然し左の歌の方がいいやうに思はれる。

私は若菜摘などといふ一小瑣事が昔からどうしてかういふ連想を引き出したものかを不思議に思はざるを得ない。

右

わきてけふ逢坂山のかすめるは立おくれたる春やこゆ覽

左、さきだつ霞に、谷の道の春をしり、右は、おくれたる春を、關山のかすみにみる。詞はかはれるに似て、心はすでにおなじければ、峯に霞をとをきて、谷のかけひをといへる、よき歌にも、おほくよめることには侍れど、此右のうたは、今少とどこほる所なくいひくだされ侍れば、まさるべくや。

三番　左

若な摘のへの霞を哀なるむかしを遠く隔と思へば

右

わかな生る春のの守に我なりてうきよを人につみしらせはや

右の歌も、詞たくみに、こころおかしくはみえ侍るを、するの句や、なべての歌にはなをいかにぞ聞ゆらむ。むかしをへだつるのへの霞は、あはれなるかたも、立まさり侍らむ。

この兩首の歌の如きは何も西行を待つて詠んで貰はなくてもいい程度の歌だ。

四番　左

古巣うとく谷の鶯なりはては我やかはりて鳴んとす覽

右

色にしみ香もなつかしき梅かかにおりしもあれや鶯の聲

右。對紅梅之濃香。感黄鳥之妙曲。左。聞新語之好音。閑舊巣之閑居。景氣雖異。歌詞是均者歟。

五番　左

雲にまかふ花の盛を思はせてかつ〳〵霞むみよしの〻山

右

ふかく入と花の咲なむおりこそあれともに尋ん山人もかな

左歌、こころ詞殊におかしくも侍るかな。花より先に、はなを思へる心も、おなじやうなるを。右の句は、なを艶に聞侍れど、よしの山の春のけしきも、猶をとると申がたくや。

右の歌の方が西行らしい香氣がするが、いづれも生氣のないものだ。

六番　左

としをへて待も惜も山さくら花に心をつくす也けり

右

花を待心こそなをむかしなれ春にはうとく成にし物を

春にはうとくなるといへる、哀には聞え侍れど、左もはなをおもへる、こゝろふかく、詞やすらかに、いひ下されて侍れば、又同ほどのことにや。

七番　左

山櫻かしらの花におりそへて限の春の家つとにせむ

右

花よりも命をそ猶おしむべき待つくへしと思ひやはせし

左の限の春のといひ、右の命をはなをといへる、何も哀ふかくは侍るを、かしらのはなにとをける。此歌にとりては、さこそと、みゆれど、雪霜などは、つねにききなれたることなるを。花といへるも有ことにはあれど、いかがと聞え侍るにや。大方は歌

この二つの歌には眞實の聲が響いて居い。定家の評の如く優劣なしであらう。

右の歌はわざとこんな歌を作つて詩興を添へたといふに止る。勝劣を定めるならば、右の歌の方がいいであらう。

合のために、よみあつめられたるに侍らねば、かやうのことは、しゐて申べきにあらねど。右のうた、耳にたつ所なきに付て、勝と申べし。

八番　左

おしまれぬ身たにも世には有ものをあなあやにくの花の心や

右

浮世にはととめをかしと春風のちらすは花をおしむ成けり

右、花を思ふあまりに、ちらすかぜをうらみぬこゝろ、誠ふかく侍べき上に、左のあなあやにくのとをける人、常によむことはに侍れど、わざと艶なる言葉にはあらぬにや。ちらすは花をなどいへる、猶まさりはべらむ。

九番　左

世中を思へはなへてちる花のわかみをさてもいつちかはせん

右

花さへに世をうき草になりにけり散をおしめはさそふ山水

かういふ風の歌が、尊まれた時代が、日本にあつたであらうが今日私共は如何なる詩歌にも實感を要求しなければならない。

私はこのいづれにも共鳴はされないが、左の方がいい。四行はこんな歌を餘りに澤山作り過ぎて私共を苦めて

ゐる。

右歌、心詞顯て姿もいとをかしくみえ侍ば、山水の花を色心もさそはれ侍り、左歌、世中をおもへはなべてといへるより、終りの句のするまで、句ごとに思ひ入て、作者の心ふかくなやませる所侍れば、いかにもかち侍らむ。

十番　左

風こしの峯のつゝきに咲花はいつさかりともなくや散らん

右

風もよし花をもちらせいかにせん思ひ出ればあらまうきそよ

私は左の歌の平凡な自然の詩境を取る。

左は、よのつねのうるはしき歌のさまなれど、右、風もよしとをけるより、終の句の末まで、心詞たくみぞ、人のおよびがたきさまなれば、勝と申べし。

十一番　左

かそへねとこよひの月のけしきにて秋のなかはを空にしる哉

右

月のすむ淺茅にすたく蛬露のをくにや夜をしる覽

右の歌の率直な姿がいい。

仲秋三五夜、左歌のすがたたかく、詞きよくして、二千里のほかも、眞に殘るくまなからむと思ひやられ侍れば、淺茅か下のむしの音、月の光は同くひるにまがふとも、露のことばは、なを空に及がたくやはべらむ。

十二番　左

きよみがた奥の岩こすしら波に光をかはす秋のよの月

右

月すみてふくる千鳥の聲すなり心くたくやすまの關守

清みがた、すまの浦、關の名所の樣。左まさる、右おとるとは、まことに申かたく侍れど、姿につきては、なを岩こすなみによる心をおもへば、又夜ふかく關にとまりぬべく侍を。崇德院の百首御製の中に、浦半のかけに空はれてと侍れば、近き世の事なれど、玉のこゑ久敷とゞまりて、今はむかしといふばりか、時隔り侍にければ。なを右の勝とや申べからん。

月光千里に渡つて岩越す波と秋の情調を奏でるといふ夜景。まことに清麗無比である。私は左の歌を喜ぶものである。

十三番　左

山かけにすまぬ心はいかなれやおしまれて入月も有世に

右

いつくとて哀ならすはなけれども荒たる宿そ月はさびしき

左右の、こころすがた、うるはしくくだりて、いづれと申がたけれど、あれたるやどぞ月はさびしきと、いひはてたる。よろしくも侍る哉。

十四番　左

月の色に心をふかく染ましや都をいてぬ我身なりせば

右

わたの原波にも月はかくれけり都の山を何いとひけむ

兩首歌、海外の月色、海上之曉影。又しるてわきがたく侍れど、右、浪にも月はといへる、今少つよくきこえ侍らん。

十五番　左

世中のうきをもしらてすむ月の影は我みの心ちこそすれ

同感。

私は左の歌を取る。

右

かくれなく藻に住むしはみゆれども我からくもる秋のよの月

右歌、みるべき月をわれはただと云。古きこころおもひいでられて、くもるなみだもあはれふかく、藻にすむむし、かくれぬ月の光も底清く侍れは、まさるとや申べき。

左の歌に自然な西行の實感味がある。私は左を取る。

十六番　左

うき世には外なかりけり秋の月詠るままに物そかなしき

右

すつとならば浮世を厭ふしるしあらん我みは曇れ秋のよの月

月はうきよと云、歌のそばに付て、こゝろをおもへば、ともに心ふかく見え侍れば、持とや申べからむ。

かう立つけに秋は悲しい悲しいとのみ云はれては、何故にさう悲しいかと質問する勇氣も出なくなつて來る。

十七番　左

秋きぬと風にいはせてくちなしの色にそ染る女郎花哉

右

同感。右の歌極めて艶美である。

花か枝に露のしら玉ぬきかけて折袖ぬらすをみなへしかな

左歌、かぜにいはせて口なしのなどいへる、いと宜くはみえ侍を、右歌のすかた心、なを尤優なり、仍爲レ勝。

十八番　左

山里はあはれなりやと人とはは鹿の鳴ねを聞とこたへん

右

小倉山麓をこむる夕霧に立もらさるるさほしかの聲

立もらさるるさほしかのこえ、きかぬ袂までつゆをく心ちしはべれば、なほ勝と申べし。

同感。夕霧と洩れて聞える鹿の聲は人に悲哀をそそるに相違ない。

十九番　左

白雲をつはさにかけて行雁の門田の面の友したふなり

右

鳥羽に書玉章の心ちして雁なきわたる夕やみの空

どちらがいいにしても、左程問題にするほどの作でない。

同感。

からすはの玉章、跡なきことにはあらねども、近き世より人このむことに侍べし。左歌、こころ詞、こひねがはれはべれば、勝と申べし。

廿番　左

秋しのや外山の里やしくるらんいこまの嶽に雲のかゝれる

右

なにとなく心をさへは盡すらむわかなけきにて暮る秋かは

心をさへはつくすらんなどいへる、ことばのよせありて、ことなるとがなく侍れど、いこまのたけに雲をみて、外山のさとまて時雨を思へる心、なをゆかしく聞え侍れば、左の勝とや申べからむ。

廿一番　左

ますけおふる荒田に水をまかすれはうれしかほにも鳴蛙かな

右

水たたふ入江のまこもかりかねてむなてに過る五月雨の比

かういふ田園の情景は、俳句にもつともつといいものが澤山ある。

どちらにも詩歌の生氣に乏しい。

左の歌何となく神々しいやうにも感じられる。

左右のこころすがた、おなじ様のことに侍べし。あら田に水をといひ、むなてに過るといへる、何もいひしりて聞え侍れば、よき持に侍り。

廿二番　左

ほととぎす谷のまにまに音信て哀にみゆる藤つつしかな

右

人聞ぬふかき山へのほととぎす鳴音もいかにさびしかる覽

左歌、面影ありて、優にこそ侍めれ。右歌も、鳴ねもいかになどいへる、誠にさびてはきこゆれど、左の詞、谷のまにまに、なをふかく思ひ入たる所侍れば、勝と申べし。

廿三番　左

しのにをるあたりも涼し河社榊にかかる波のしらゆふ

右

楸生てすすめとなれる陰なれや浪うつきしに風渡りつつ

左右歌、波のけしき、納涼の心わくべきところ侍らぬにや。

この二つの歌とも面白しと私は思ふ。然し俳句でこれを表現したならば、その姿がもつと嚴肅の感を人に與へるであらうと思ふ。

かういふ歌の優劣はどうでもいいことである。

廿四番　左

霜うつむむくらの下のきりきりすあるかなきかの聲きこゆ也

右

をくら山ふもとの里に木葉ちれは梢にはるる月をみるかな

兩首歌、左、暮蟲霜底聞ニ暗蛩殘聲一。右、寒夜月前望ニ黃葉落色一、意趣各宜。歌品是同。仍爲レ持。

廿五番　左

よしの山ふもとにふらぬ雪ならは花かとみてや尋いらまし

右

風寒くよすれはやがて氷つつかへる波なきしかのから崎

右もうるはしき様に宜侍れど、歸浪なきといへるよりは、花にまがふよしのの雪、ふりてや聞え侍らむ。仍以レ左爲レ勝。

廿六番　左

をしなへて物を思はぬ人にさへ心をつくるあきのはつかせ

右

たれ住て哀しるらん山里の雨降すさむゆふくれの空

左の秋風。右の夕雨。心かれこれにみだれて、又わきがたく侍れば、持とや申べからむ。

この『宮河歌合』には隨分詰らない作が入つてゐる。

廿七番　左

我こころさ社都にうとからめ里のあまりになかゐしてける

右

ほとふれはおなし都のうちたにも覺束なさは間まほしきを

右歌、姿さびていと哀にも聞え侍るを。左、なをとどこほる所なく、いひながされて侍れば、まさるとや申べからむ。

これも評するほどの價値なし。

廿八番　左

時雨かは山めくりする心かないつまてとのみうちしほれつつ

わかやとは山のあなたにある物を何とうき世をしらぬ心そ

しぐれかはとをけることも、いつまでとのみしほれつつ、といひはてたる末の句も、なを左まさり侍らん。

判者定家と同感ではあるが、かれこれいふほどのものでない。

廿九番　左

年月をいかて我身に送りけむ昨日の人もけふそなきよに

右

むかし思ふ庭に薪をつみをきてみしよにもにぬ年の暮哉

きのふの人もけふはなきよ。誠にさることと聞えて、いと哀には侍るを。庭に薪をつみをきてとをける、定ておもへるところあらむと見侍るうへに、みし世にも似ぬとしのくれかなといへるも、なを優にきこへはべれば。勝とや申べからむ。

評するほどの價値なし。

卅番　左

またれつる入相の鐘の音すなりあすもやあらは聞むとすらん

いづれも生氣のない凡歌である。

かういふ歌はいづれも實際を背景に持つと、人に感動を與へるであらう。

右

何ことにとまる心の有けれは更にしも又世のいとはしき

左の、かねの音にこころつきはてて、まさると申べきを。右の歌、更にしも又といへり。まくべきうたの詞とはみえ侍らねば、勝負又分がたくや。

卅一番　左

なき人をかそふる秋のよもすからしほるる袖や鳥へのの露

右

はかなしやあたに命の露消てのへにや誰も送りをかれん

をくりをかれん、哀もあさくみなさるるには侍らねど、左の下句、猶ながき夜の袖露も、ふかくをきまさる心地して侍にや、仍為勝。

卅二番　左

道かはるみゆきかなしきこよひ哉限りのたひとみるに付ても

右

左は鳥羽法皇御他界を弔ふの歌。右は崇徳上皇が幽閉遊ばされた、松山をづたれての吟。共に悲痛の感が文字に溢れてゐる。かういふ歌があつて始めて西行といへる。

松山の波になかれてこしふねのやがてむなしく成にける哉

左右ともに、舊日之往事故、不二加判一。

卅三番　左

うき世とて月すますなることあらはいかにかすべき天の下人

右

なからへて誰かは更に住とけむ月かくれにし浮世成けり

左、月をおもふあまりの心に侍めり。右、生滅無常しれる詞のつつき、又耳にたつ所侍らねば。持と申べし。

卅四番　左

身をしれは人のとかとは思はぬに恨かほにもぬるる袖かな

右

中々になれぬ思ひのままならは恨はかりや身につのらまし

左も心有樣なれど、右なを優に聞え侍れば、勝と申べし。

同感なれど、取りたてて評するほどの價値なし。

同感。

卅五番　左

哀とてとふ人のなとなかる覽物思ふ宿の萩の上風

右

おもひしる人有明の世なりせはつきせす身をは恨さらまし

左歌、誠に宜みえ侍を、右の、人あり明のよなりせばといへる、なををとると申がたくや。

二つ共に感服しない。

卅六番　左

逢とみしその世の夢のさめてあれ長き眠はうかるべけれど

右

憐れ〳〵此世はよしや遮莫こむ世もかくや苦しかるべき

兩方ともに平凡普通の感傷歌である。

兩首の歌、こころともにふかく、詞およひかたきさまにみえ侍るを。右のこの世とをき、こん世といへる、ひとへに風情を先として、詞をいたはらすはみえ侍れど、かやうの難は此歌合に取ては、すべて有まじきことに侍れば、なゝらへて、又持とや申べからむ。

神風、宮河の歌合、勝劣しるしつくべきよし侍しことは、玉くしげ、二とせあまりにも成ぬれば、かくれては、宮をまもる神の、ふかく見そなはさんことを恐れ、あらはれては、家につたはらむことのはに、あさき色を見えむことを、つつむのみにあらず、わづかにみそもじあまりをつらぬれど、いまだ六のすがたの趣をだにしらず、をのづから、難波津の跡をならへども、さらに、いつも八雲の行衛、くらくのみ侍るうへに、もろこしのむかしのときだにも、いく百とせのうちにや、詩人才子文體、三度あらたまりにければ、まして、やまと詞のさだまれる所なき心姿、いづれをあしよしといひ、いかなるをふかしあさしと思ひはかるべしとは、たれにしたがひて、なにをまこととしるべきにもあらず、時により所につけ、このみ、よみし、ほめ、そしるならひにてぞ有べき、しかるを、此歌合は、わざとしくみおもひて、合つがはれたるにもあらず、ただおほくのとし頃、つもれることのはをひろひて、ならびぬべきふしふし、かよへるところところ、思ひ合ひつつ、右左にたてられて侍れば、ことの心幽に、歌のすがた高くして、空より

もはかりかたし、つもる哀はふかけれど、雪間の草のみしかき言葉、みだれてかきあらはさむかたもなく、おもふふししけけれど、浪路のあしのうきたる心のみ、たたよひて、うち出へきことも、おもひたがへられぬれば、春のあらたのかへし、思ひやみぬべくなりぬれど、ひじりのちぎりをあふぎ奉ることも、此代ひとつのあだのよしみにもあらず、佛の道に、さとりひらけむあしたは、ひるかへす縁と、むすびをかむためにと思ひ、又は高きいやしき、そこら道をこのむともからををきて、よはひいまだ三そぢにをよばず、位猶いつつのしなにしづみて、三笠山の雲のほかに、ひとり拾遺の名をはぢ、九重の月のもとに、久しく陸沉のうれへにくだけたる、淺茅の末、蓬の下のちりの身を尋ねて、うらのはまゆふのかさなれるあと、まさぎのかつら、たえぬみちばかりをあはれみて、鈴鹿の關のふりはへ、八十瀬の波のたちかへりて、思ゆゑあり、なをかならず、つとめをけと侍りしかば、宮河の清きながれに、ちぎりをむすび、位山のとどこほる道までも、御しるべや侍るとて、今きき、後みむ人の、あざけりをもしらず、むかしをあふき、古きを忍ぶ、こころひとつにまかせて、かきつけ侍りぬるなん。

君はまつうき世の夢はさめぬとも
　おもひあはせむのちの春秋

かへし

春秋をきみおもひ出はわれはまた
　月と花とをなかめおかなむ

文治五年八月日書寫之。清書伊經朝臣云々。銘左大將殿。

此本烏丸殿御本請申也。

異本山家集序

私の西行の人格竝に歌に對する批判はほぼ私の『西行論』と『御裳濯川歌合』竝に『宮河歌合』の冒頭に入れた批評で盡きてゐる。私は常に西行について思ふことが一つある……若し彼が所謂萬葉時代に生れたならば、彼は必ずや一層引締つた詩的感情の反省と表現上の節約とでもつと立派な歌人になつて居つたに相違ない。それから若し彼が俳人として元祿時代に生れたならば、もとより正風の詩的革命は芭蕉を待たずして恐らく西行が第一に着手したであらう。昔でも今日でも西行の歌に對する非難は少くないことを誰も知つてゐる。彼の歌を通覽すると、時代の粉粧的流行を追つて低調無個性な題詠歌やまた消息的贈答歌などが、可なり澤山に作られてゐることを注意せざるを得ない。彼の作品に無理に悲觀化した風雅を衒氣や雅氣でこねまはしたやうなものの餘りに多いことを驚かざるを得ない。然し特殊の場合に於ける西行は偉ひ。この偉ひ西行の姿を見ようとするならば、私が『西行論』のなかに引用した彼の歌や『御裳濯川歌合』一卷さ

へ讀むと恐らく十分であらうと思はれる。

『眼に見えぬ神の御手に招かれて、そよ吹く銀の風の如く、聖き空をめぐる。胸に祕むる一曲の歌、……我等は祈禱の僕童だ。

われ等の歌は、亡びし都城の跡を知らず、王國の哄笑も、我等の足を止めない、我等の心は遠く、太陽、風、雨を友として、聖なる大路をさまよふ……ああ、我等は影の一旅客だ。』

これは私の詩一篇であるが『影の一旅客』としての西行は正に光風霽月の言葉で評して差支がない。私は彼が果して人麿の再來であつたとは思はないが、少くも彼はもつといい詩的雰圍氣に置かれたならば人麿に近い價値の歌人になることが出來たと私は信じて疑はない。『後鳥羽院口傳』或は『八雲御抄』或は『兼載雜話』或はまた『愚祕抄』など、古來から西行を最大級的に禮讃した言葉は澤山あつて、勿論優に彼に對する非難を負かしてゐる。『愚祕抄』のなかにかう書いてゐる、『さても西行上人の歌勢を能く見侍れば、誠に此道の權者と覺侍る。天氣も、つねは無比の上手とおぼしめされけるにや。柿本の再誕の例のしごとよと勅定ありき。已に今世此道をとろへもてきて、跡なくなりぬべかりしを、西行と甲聖、其實を存せるがゆへに、風體をよみ直して、其かたはら殘れりと申したるにや。但西行上人の樣をまなばんことは、其人ならでは、非器の輩の努てかなふまじきさまに侍る。また損ぜば、世に平懷にも又かたはらいたくもきこゆべきも也。つらつら思ふに、まなぶべき人の歌ざまは、清輔、亡父卿などにて侍るべし。』この言葉などは、西行が所謂生れた歌人で作られたものでないことを語つたものである。如何に西行を非難してケチを附ける人でも、彼が天成の歌人であつたことを否定するほどの冒險者たることは出來ない。

實際に『最美なる場合の西行』を知るには、前に私がいつた如く私の論中に引用した歌と『御裳濯川歌合』とを讀めば十分であるが、本書は『西行全集』である以上、彼の作品全部を網羅しなければならない。所で遺憾なことに西行の歌集には定本と云はれて

いいものがない。詰り西行は自撰の家集を後世に殘してゐない。普通これまで世に行はれてゐる西行歌集は、所謂六家集本山家集であつて、これは藤原俊成の長秋詠草、慈鎭和尙の拾玉集、藤原良經の秋篠月淸集、藤原定家の拾遺愚草、藤原家隆の壬二集と共に西行の山家集を入れて六家集と稱へ世に刊行したものである。この流布本卽ち六家集から山家集だけ拔いて單行本としたものに納められてゐる歌の數は、一千五百七十一首許であるが、中に性質の疑はれる歌なども澤山あつてまた文字の誤脫も少くない。然し明治になつて飜刻された西行歌集はいづれもこの六家集本に依つたものである。『六歌仙の集中に、唯此山家集のみ後人の撰み集めしと見ゆ。定家卿の家集は自撰擇の上、伯父河內前司親行に淸書を誂へ、慈鎭和尙の集は嘉曆の撰聚、貞和の淸撰尊圓親胡王記之瑚子丸の筆、玄旨法師の比校等、皆慥に侍けるに、此集のみ淺間しう不沙汰に侍けん。……歌の年代の前後し、斯彼の入亂れしは、諸處山家の自撰の小冊或は家々文庫の一首をも後に拾ひ集めし成べし云々』と釋固淨の增補山家集抄に旣にいつてあるのを見ても、六家集本山家集が信用すべき西行歌集でないことは明白である。

それから『西行法師家集』と題して五百四十二首の歌を收めるものがある。それには半紙形四卷の板本と數種の寫本とがあつて、內閣文庫の寫本には和學講談所淺草文庫等の印があり、その奧書に『此西行法師家集、去元中年中、於二吉野一以二或家一書寫者也。應永二十年癸巳二月十八日。藤原判』としてあつて、次に一本の奧書をあげ更に他の奧書のある二種の本から寫した由が奧書きしてある。藏岡作太郎博士はこの寫本についてかういつてゐる、『古き寫本にはあらじといへども、そのもとは南朝に仕へたる臣下などの手に出でしならん。この寫本もまた前にいへる家集(卽ち六家集本山家集)と同種のものにして、これ等を總括して家集本と稱せん。この家集本は、余が見たる限にては、至るところ誤脫に滿ちて、殆ど讀むに堪へず。その歌數の少きと誤脫の多きとを以てにや、從來世に行はるること稀なり。』

然らばここに收めてある『異本山家集』とはどういふ性質の西行歌集であるかといふに、明治三十九年十月本鄕書院出版にかかる藤岡博士の『異本山家集』を轉載したものである。本書の原寫本は少くも三百年前のものであらうと想像されて、『群書一覽』の著

者尾崎雅嘉がその著に異本山家集(寫本)一卷の目を揭げて、西行研究者をして垂涎たらしめたものと同種類のものであらうといふことである。尾崎雅嘉は『群書一覽』のなかにかう書いてゐる、『予が藏するところの古寫本にて、刊本よりは歌すくなし、奥書に云、此集周嗣禪師不慮被レ相二傳西行上人自筆一之處、於二法勝寺僧房一燒失間、尋二他本一書二寫之一、

けぶりだに跡なき浦のもしほ草又かきゆくを哀とぞ見る　頓阿

此西行上人集、蔡花園上人、此本卷始和歌十一首銘二奥書歌一副二一首、新所レ被レ灑二翰墨一也。雖レ未レ消二遺恨之心灰一、聊擬二殘芳之手澤一而已。觀應二年七月日修行者周嗣判○雅嘉案ずるに、草庵集にこの歌入りて、こと書に周嗣西行上人自筆の山家集を傳へて侍るを、法勝寺僧房の火の時燒き侍りて後、又料紙など元の如くに違へず書きて侍りしを、見せ侍りし、其の奥に書き付け侍りしとあり。又按ずるに、頓阿の高野日記に云、西行上人自ら書きたまへる山家集を、周嗣傳へられけるを、法勝寺僧房の火の時燒け侍りける。その後、西行の筆に露違はず書かれて侍りしを、見せられたまひしなり云々。これらを考へ合せて、愈〻予が藏本の眞の山家集なることを知れり、尤も上人自撰の集なること疑なし。○周嗣は禪僧にて、新千載集にも歌入りて、頓阿時代の人、五玉集の中の一人なり。』

今假にここに收める異本山家集が雅嘉の語る所のものと同じであるとしても、それが果して西行の自撰集であるだらうかといふ問題は容易に決せられない。尾山篤次郎氏はその編著『西行法師全集』のなかにこれに關してかういつてゐる、『然し自撰歌集とすれば、他の箇所は兎も角もとして、雜の部がもつと整理されてゐなくてはならぬ筈である。吾々が自分の歌集を編纂する心理と、彼の時代人の心理と、直に其全部が同一であるとは云はないが、若し假りに編纂心理といふものがあつて、それが幾分か働くとすれば、新舊の配列に順序を踏まうとするに相違ない。所がその雜の部に於てはそれが隨分混雜してゐる。また第一に、六家集本に見える吾々が觀て如何にも西行らしい數多の秀歌が、これに漏れてゐる。次に題詠の歌がその題を除いて載せられてゐる。總てがその例に倣つてゐるならばまだいいが、他の幾多の歌に題があるのだから、これは甚だ不整理である。次に、甚しい一例として、新古今集雜の部に「あづまの方へ修業しはべりけるに、

ふじの山をよめる」とある例の風に靡く富士の煙のの歌が異本には戀の部に出てゐる。其他なほ種々疑問點がある。之らは自己の作を出來るだけ正當に解せられたいと思ふ所謂作家心理と悖戻するものであつて、私などには雅嘉の說を何の理由なしに受入れることは出來ない。だが曩に云ふた通り自撰であらうと無からうと、整理されてゐようがるまいが、歌さへ彼自身のものならば全部差支へない。生じひ晩年の自撰にかかるものなどがあつたとすれば、却つて禍である。何故なれば、人は年齢の相違に依つて感情に隔世の距離を生ずるから、古い作が氣恥かしくなり、進んではそれを除去したがるものであるから、さうなつてくると、彼に就いての唯一の傳記となり、批評の標準となる處に非常な狂ひが生ずるからである。その點、吾々は六家集本に彼の出家前の歌若干を見出すことを感謝するものである。『これは一隻眼であるが、異本山家集を世に紹介した藤岡博士はかういつてゐる、『流布本は歌の數多しといへども、西行の作として古來人口に膾炙したる、

つの國の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風渡るなり

年たみてまた越申べしと思ひきや命なりけりさやの中山

及び作者が第一の自讃歌と稱せらるる、

風に靡く富士の煙の空にきえて行方もしらぬわが思かな

の如き、いづれもこれに漏れたるはいぶかしき限なるに、異本には載せたり。兩本に通じて擧げたる歌にも、彼此異同なきにあらず、その小序も意義の異なるなり、意義同じけれども字格句法の異なるあり、詳細の度の頗る異なるあり。概するに異本の歌は誤謬少く、流布本を讀みて疑はれし節の評釋するも少からず、小序のかき方は古拙にして、流布本の整へるに似ざるは、却つてその時代を先にせることを示せるが如し。されど異本とても淨寫を重ねたるものなるべければ、おのづからその間に誤を生じたるものあるべく、時には流布本の正しと見ゆるもあり、彼此參考して、漸く正鵠を得るに近し。これらの例一々に擧ぐるは餘りに煩しければ省略すべし、讀者意あらば、本文の中に校合せるに注意せよ。今は僅かに一二を擧げんに、名著文庫本の解題に、露伴氏が道心遂年深の遂は逐の誤、仁和二年の和は安の誤と推斷せられし精讀の程は感ずべく、また異本

には初よりこの正しき方になり居りて、なほ二年は三年とあり。また

何事にとまる心のありければ更にしも又世のいとはしき

の詠の小序を、新古今集には、「題しらず」とし、流布本には「述懐」とし、異本には「素覺がもとにて、俊惠と罷合て、述懐し侍りし」とあり、各々そのいふところを異にするを見るべし。』また博士は、『山家集中題によりて歌を詠じたるものなきにはあらず、夢中落花、獨聞擣衣など三四字の漢文の題あるは、この種に屬するものなるべく、屏風の靈讃もありまた經文を題にしたるも屢々これあり、されど寄何戀などいふ題の異本には一もこれなく、流布本にのみ存するは、そのもと作者の好むところにあらざればみづからは一も載錄せず、後人の集むるに當りて捨つるに忍びざりしものにあらざるか』といつて、博士の異本山家集が西行の自撰歌集に相違ないと信じてゐる。

博士は異本山家集を公にせられた時例言としてかう書いてゐる、『今始めてこれを刊行するに當り初めて原書の面目を存ぜんと欲して、送假名當字の如き正式に合はぬものも、その儘になし置きたり（送假名の不足にて訓みにくきところは、本文のわきに片假名にて小さくこれを加へ置きたり、）假名遣文字の誤などは誤解を招くの恐多き故、正しき方に改めたり。歌の上に丸符あるは流布本山家集にこれなきものなり、符なきは此にも彼にも通有せるものなり、肩書に新古玉葉などあるは、新古今集玉葉集などの歌集にもある由を示せるものにて、これは新たに調査したるにあらずして原書の儘に從ひたるなり、實際は漏れたるものもあるべし。内ナシと肩書せるは西行法師家集の内閣本と比較して、この本に無きを示し、補内とあるは、内閣本によりて補へるものをいふ。間々本文のわきに漢字を當てたるは了解に便ならしめんが爲の校訂者の老婆心にして、括弧内にある傍註は流布本山家集によりて異同を示せるもの、特に内と記したるは内閣本の異同を擧げたるものなり。□の符あるところは衍文もしくは蠹蝕あるところなり、その文字あるは校訂者が試みに充てたるなり。』所で私は博士の書物をそのまま借りて用ひるのであるから、この例言もそのまま役に立つのである。それから『追加西行和歌』は後人がつけ加へたもので異本山家集とは關係がない。『拾遺』は流布本山家集だけにあつて異本に無いものを拾ひあげたものである。

そして異本山家集と追加と拾遺の二部を合して歌數何程であるかといふに、千七百五十有餘首を算ずるのである。

最後に西行歌集と山家集とどういふ譯で名附けたものであらうかと想像してみたい。『遁世の後山家にてよみ侍りける』と題して、『山里は庭の梢の音までも世をすさみたるけしきなるかな』といふ歌などがある。詰り『遁世して山家で詠んだ歌の集』といふ意味に取つて差支がない。

八雲御抄云、『法性寺入道、此みちこのみ、崇德院のすゑつかたより、やうやう又歌の事さたありて、久安に百首歌などありしより、俊成、清輔、西行法師など云もの、此みちにたへたるが故に、今は又ひろまれる也。凡中頃よりこのかたは、此みちにたえたる人もすくなし。ただ經信、近くは西行があとをまなぶべし。其樣は別の事にあらず、ただ詞をかざらずして、ふつふつといひたるがききよきなり。』

兼載雜話云、『慈鎭、などは歌よみ、其外の人はうた作りなりと、定家之被レ書たる物にあり。』

異本山家集

春

初春

新古　○岩間とぢし氷も今朝はとけそめて苔の下水みちもとむらん。

同　○ふりつみし高ねのみ雪とけにけり、清瀧川の水の白浪。

立かはる春をしれとも見せがほに、年をへだつる霞なりけり。

くる春は嶺の霞をさきだてて、谷のかけひをつたふなりけり。

こぜりつむ澤の氷のひま見えて春めきにけり櫻井の里。

春あさみすずのまがきに風さえてまだ雪きえぬしがらきの里。

春になる櫻がえだは何となく、花なけれ共むつまじき哉。

すぎて行羽風なつかし、鶯よなづさひけりな、梅の立えに。

鶯はるなかの谷の巣なれども旅なる音をば鳴ぬなりけり。

かすめども春をばよその空にみてとけんともなき雪の下水。

春しれと谷の細水もりぞ行岩間の氷ひまたえにけり。

鶯

鶯のこゑぞ霞にもれてくる、人目ともしき春の山里。

○我なきて鹿秋なりと思ひけり、春をぞさてや鶯のしる。

霞

○雲にまがふ花のさかりをおもはせて、かつ〳〵かすむみ吉野の山。

社頭の霞と申事を、伊勢にて讃侍しに。

浪こすとふたみの松の見えつるは、梢にかかる霞なりけり。

子日

春ごとに野邊の小松をひく人は、いくらの千代のふべきなるらん。

若菜・はつねのあひたりしに、人の許へ申遣し侍し。

若なつむけふ(上)はつねのあひぬれば、まつ(松)には人のこころひくらん。

雪中若菜を。

けふはただおもひもよらで歸りなん、雪つむ野邊の若菜成(ナリ)けり。

雨中若菜。

春雨のふる野の若菜おひぬらし、ぬれぬれつまん、かたみぬぎ(手ぬぐい)いれ。

寄若菜述懷を。

若菜(生)おふ春の野守に我なりて、浮世を人につみしらせばや。

住侍し谷に、鶯のこゑせず成にしかば、何となく哀にて。

ふるす(古巣)うとく谷の鶯なるはてば、我やかはりてなかんとすらん。

梅に鶯の鳴侍しに。

梅がかにたぐへて聞ゝば、鶯のこゑなつかしき春の明ぼの(山ぎわ)。

旅宿の梅を。

獨ぬる草のまくらのうつり香は、かきねの梅の匂ひなりけり。

布留野は大和國石上の布留なり。降るとかけた地名にかけたものである。

續拾

嶢峨に住侍しに、道をへだてて、隣の梅のちりこしを。

ぬしいかに風わたるといとふらん、よそにうれしき梅の匂ひを。

きぎすを。

おひかはる春の若草待わびて、原のかれ(枯)野にきぎすなくなり。

もえ出る若菜あさるときこゆなり、雉子鳴の(野)の春の明ぼの。

霞中かへる雁を。

何となくおぼつかなきは、天の原霞にきえて歸る雁がね。

歸雁を長樂寺にて。

玉づさのはしがきかとも見ゆるかな、とびおくれつつ歸るかりがね。

歸雁

○いかで我とこ世の花のさかりみて、ことわりしらむ、歸るかりがね。

燕

○歸る雁にちがふ雲路の燕(ツバクラ)め、こまかにこれやかける玉章。

有名な自讃歌十二首の一

四行には櫻を咏した名歌が多い。もとより何れを最善とするか難であるが、そはこれもさらどもこれも吟嘯しておつて自然の奏を供へつて自然の時代を供へる。超越して悠々たる自由の天地に彷徨する。自由にした風流傍若無眼にはそれの顯作やれて來る。巧まずして技巧は供つてのねる。

梅

○色よりも香はこきものを、梅の花、かくれん物か、うづむ白雪。

○とめゆきてぬしなき宿の梅ならば、勅(ミイ)ならずともをり(手折)て歸らん。

○梅をのみ我垣ねには植置て、見に來ん人に跡しのばれん。

新古　○とめこかし、梅さかりなる我宿を、うときも人はをりにこそよれ。

柳風にしたがふ。

見わたせば、さほの川原にくりかけて、風によらるる青柳の糸。

山家柳を。

新古　山がつのかた(片岡)をかけてしむる野(柳)の、さかひ(境)にたてる玉のを柳。

花

○君こずは霞にけふも暮なまし、花待かぬる物がたりせよ。

新古　○吉野山櫻がえだに雪ちり(ち)て、花おそけなる年にも有哉。

玉　山さむみ花さくべくもなかりけり、あまりかねてぞ尋きにける(ら)。

○山人に花さきぬやと尋ぬれば、いさ白雲とこたへてぞ行。

新古　○吉野山こぞのしほりの道かへて、まだみぬかたの花を尋ねん。

よしの山人にこころをつけがほに、花よりさきにかかる白雲。

玉藻　○咲(内ナシ)やらぬ物ゆゑかねて物ぞおもふ、花に心のたえぬならひに。

○花を待心こそなほ昔なれ、春にはうとくなりにし物を。

かたばかりつぼむと花を思ふより、空また風(こころ)の物になるらん。

○またれつる吉野の櫻さきにけり、心をちらせ、春の山風。

○さきそむる花を一えだまづ折て、昔の人のためとおもはん。

○あはれわがおほくの春の花をみて、そめおく心誰にゆづらん。

山人よ、吉野のおく(ヒ)のしるべせよ、花もたづねん、また思ひあり。

千載　おしなべて花のさかりになりにけり、山の端ごとにかかる白雲。

○春をへて花のさかりにあひきつつ、思ひでおほき我身なりけり。

續古　ねがはくは花の下にて春しなん、その着更衣(キサラギ)のもち月のころ。

『ねがはくば』の歌。古今著聞集第

十一巻に云、西行法師、當時より釋迦如來に入滅の日修をとらんことをねがひてよみ侍ける。

ねがはくは花の下にて春しなん　その衣のもちの月のころ

かくよみて、つぬに建久五年二月十五日（十六日七十三歳）に往生をとげて、此事を聞て、左近衛中將定家朝臣、菩提院三位中將のもとに申つかはし侍ける。

もちの月のころはたがはぬ空なれどきへけんくもの行ゑかなしき

新古

花にそむ心のいかで殘けん、すてはててきと思ふ我身に。

よしの山やがて出じと思ふ身を、花ちりなばと人や待らん。

○ちらぬまはさかりに人もかよひつつ、花に春あるみよしのの山。

あくがるる心はさても山櫻、ちりなん後やみ身にかへるべき。

佛には櫻の花をたてまつれ、我後の世を人とぶらはば。

花ざかり梢をさそふ風なくて、のどかにちらん春にあはばや。

白河の木ずゑをみてぞなぐさむる、吉野の山にかよふ心を。

新古

わきて見ん、老木は花もあはれなり、今幾たびか春にあふべき。

おいづ（老）とに何をかせまし、この春の花待つけぬ我みなりせば。

○よしの山、花をのどかに見ましやは、うきがうれしき我身なりけり。

○山路わけ花をたづねて日は暮ぬ、宿かし鳥の聲もかすみて。

○鶯のこゑを山路のしるべにて、花みてつたふ岩のかけ道。

○ちらばまたなげきやそはん、山櫻、さりかになるはうれしけれども。

○白川の關跡の櫻咲にけり、あづまよりくる（來）人のまれなる。

○濱風（谷カ）（谷脱）の花の波をし吹こせば、ゐせきにたてる嶺の村まつ。

那智に籠りし時、花のさかりに出ける人に、つけ（付）て遣ける。

○ちらでまてと都の花をおもはまし、春かへるべき我みなりせば。

○いにしへの人の心のなさけをば、ふる木の花の梢にぞしる。

○春といへば誰も吉野の山とおもふ、心にふかきゆゑやあるらん。

○あかつきとおもはまほしき音なれや、花に暮ぬる入あひのかね。

○今の我も昔の人も、花みてん心の色はかはらじものを。

○花いかに我を哀と思ふらん、見て過にけり、春をかぞへて。

何となく春になりぬと聞ゞ日より、心にかかるみよしのの山。

○さかぬまの花には雲のまがふとも、雲（ヒ）（内）には花のみえずもあらなん。

今さらに春をわするる花もあらじ、おもひのどめ（やすくまちつつ）てけふもくらさん。

吉野山木ずゑの花を見し日より、心は身にもそはずなりにき。

勅とかやくだす御かどのいませかし、つらばおそれて花やちらぬと。
かざごし(風越)の嶺のつづきにさく花は、いつさかりともなくやちるらん。
○芳野山、風にすすきに花さけば(すすきに咲花は)、人のをるさへをしまれぬかな。

玉葉

散そむる花のはつ雪ふりぬれば、ふみわけまうきしがの山ごえ。
春風の花の錦(吹雪)にうづもれて、ゆきもやられぬしがの山道。
吉野山、たにへたなびく白雲は、嶺の櫻のちるやあるらん。
たちまがふ嶺の雲をばはらふとも、花を散さぬ嵐なりせば。
木のもとに旅ねをすれば、芳野山、花の衾をきする春風。
峯にちる花は谷なる木にぞさく、いたくいとはじ、春の山風。
風あらみ木するゑの花のながれ來て、庭に浪たつ白川の里。
春ふかみえだもゆるがでちる花は、風のとがにはあらぬなるべし。
おもへただ花のなからん木の本に、なにをかげにて我身住みすみなん。
○風にちる花の行へはしらねども、をしむ心はみにとまりけり。

何とかくあだなる花の色をしも、心にふかくおもひそめけん(思ひ染)。
花もちり人も都へかへりなば、山さびしくやならんとすらん。
よしの山一村見ゆる白雲は、咲おくれたるさくらなるべし。

玉葉

ひきかへて花見る春はよるもなく(夜)、月みる秋はひるなからなん(晝)。
○打はるる雲なかりけり、吉野山、花もてわたる風と見ゆれば(見ゆれば)。
初花のひらけはじむる梢より、そばへて風のわたるなる哉。
おなじくは月の折さけ、山櫻、花みるよひのたえまあらせじ(をり)。
木すゑふく風の心はいかがせん、したがふ花のうらめしきかな。
いかでかはちらでありともおもふべき、しばしとしたふなさけしれ花。
あながちに庭をさへはく嵐かな、さこそ心に花をまかせめ。
○をしむ人の心をさへにちらすかな、花をさそへる春の山風。
浪もなく風ををさめし白川の、きみのをりもや花はちりけん(君)。
をしまれぬ身だにも世にはある物を、あなあやにくの花の心や。

玉葉　うき世にはとどめおかじと、春風のちらすは花ををしむなりけり。

新古　○世中をおもへばなべてちる花の、我みをさてもいづちともせん。

○花さへに世をうき草になしにけり、ちるををしめばさそふ山水。

○風もよし花をもちらせ、いかがせん、おもひはつればあらまうきよぞ。

○鶯の聲に櫻ぞちりまがふ、花のこと葉を聞〃心ちして。

もろともに我をもぐしてちりね花、浮世をいとふ心あるみぞ。

新古　ながむとて花にもいたくなれぬれば、ちる別こそかなしかりけれ。

ちる花ををしむこころやとどまりて、又こんはるのたねとなるべき。

○花もちりなみだももろき春なれや、またやはとおもふ夕暮の空。

朝に花を尋ぬるといふことを。

さらに又霞に暮る山路哉、花をたづぬる春の明ほの。

獨尋花。

誰か又花を尋ねて、芳野山、こけふみわくる岩つたふらん。

有名な自讃歌十二首の一。

上西門院は鳥羽帝第二皇女。前齊院統子内親王のこと。持賢門院の女。

尋花心を。

吉野山、雲をばかりに尋いりて、心にかけし花をみるかな。

熊野へまゐり侍しに、やかみの王子の花ざかりにて、おもしろかりしかば、社に書付侍し。

待きつるやかみの櫻さきにけり、あらくおろすなみすの山かぜ。

上西門院の女房法勝寺の花見られしに、雨の降て暮にしかば、かへられにき。又の日、兵衞の局のもとへ花のみゆき思ひ出させ給ふらんとおぼえてなど、申さまほしかりしとて、申おくり侍し。

見る人に花も昔を思ひ出て、戀しかるらし、雨にしほるる。

返し

いにしへを忍ぶる雨に、誰か見ん、花もその夜のともしなければ。

花のしたにて、月をみて。

雲にまがふ花のしたにてながむれば、おぼろに月のみゆるなりけり。

書絶(カキタエ)、ことはずなりたりし人の、花見に山里へまかりたりしに。

年をへておなじ木ずゑに匂(ミ)へども、花こそ人にあかれざりけれ。

白川の花のさかりに、人のいざなひ侍しかば、みにまかりてかへりしに。

千載　ちるをみてかへる心や、櫻花、昔にかはるしるしなるらん。

すみれ。

○古郷の昔の庭を思出て、すみれつみにとくる人もがな。

杜若。

○つくりすてあらしはてたる澤を田に、さかりにさけるうらわかみ哉。

早蕨を。

なほざりにやきすてしの野のさわらびは、をる人なくてほどろとやなる。

欵冬(ヤマブキ)。

山ぶきの花のさかりに(さくさとに)成ぬれば、ここにもゐでとおもほゆるかな。

かはづ。

乳酪　ますげおふる荒田(山田)に水をまかすれば、うれしがほにも鳴く蛙哉。

春の中に郭公を聞といふことを。

うれしともおもひぞはてぬ(わかぬ)、郭公、春きくことのならひなければ。

三月、一日たらで暮待しに。

春ゆゑにせめても物をおもへとや、みそか(三十日)にだにもたらで暮ぬる。

暮春。

○春くれて人ちりぬめり、芳野山、花のわかれをおもふのみかは。

夏

卯月朔日になりて後、花を思ふといふことを。

青葉さへみれば心のとまるかな、ちりにし花の名殘と思へば。

夏歌よみ侍しに。

草しげるみち(路)かりあけて、山里は、花(ヒ)みし人の心をぞ見る。

社頭卯花。

神がきのあたりに咲もたよりあれや、ゆふかけたりとみゆる卯花。（木綿）

無言し侍しころ、郭公のはつ音を聞て。

時鳥、人にかたらぬ折にしも、はつね聞こそかひなかりけれ。

夕暮時鳥。

玉葉

里なるるたそがれどき（黄昏時）の郭公、聞ずがほにて又名のらせん。

郭公をまちて、むなしく明ぬといふことを。

時鳥なかで明ぬとつげがほに、またれぬ鳥の音こそ聞ゆれ。（ずきこゆなる）

時鳥の歌あまたよみ侍しに。

郭公、聞ぬものゆゑまよはまし、花をたづねし山路ならねば。（ね）（なりせば）

時鳥、おもひもわかぬ一こゑを、ききつと人にいかがかたらん。

聞おくる心をぐして、郭公、たかまの山の嶺こえぬなり。（高間）

雨中の郭公を。

四行は西洋詩人と異つて郭公を『天上の音樂師』とも呼ばず、ただ山の懷から落ちて來るその聲を聞いて喜んだに過ぎない。四行の簡單率直、自然とそのままに受入れてゐる所に彼の歌人としての價値がある。

五月雨のはれまも見えぬ雲路より、山時鳥鳴て過なり。

郭公。

我宿に花橘をうゑてこそ、山郭公待べかりけれ。

新古

○聞ずともここをせにせん、時鳥、山田の原の松の村立。

○世のうきをおもひし知れば、やすきねをあまりこめたる郭公哉。

○うき身しりて我とはまたじ、時鳥、橘にほふとなりたのみて。

○橘のさかりしらなん郭公、ちりなん後にこゑはかるとも。

○待かねてねたらばいかにうからまし、山時鳥、夜をのこしけり。

○郭公、花橘になりにけり、梅にかほりし鶯のこゑ。

○鶯の古巣より立ッ時鳥、あゐ（藍）よりもこきこゑの色かな。

○時鳥こゑのさかりに成にけり、たづねし人にさかりつぐらし。

○浮世おもふわれかはあやな、時鳥、あはれもこもるしのびねのこゑ。

○郭公いかなるゆゑの契りにて、かかるこゑある鳥となるらん。

新古　○時鳥、ふかき嶺より出にけり、外山のすそにこゑのおちくる。

○高砂の尾上を行ゞど人もあはず、山郭公里なれにけり。

五月雨。

早瀬川つなでの岸をよそにみて、のぼりわづらふ五月雨の頃。

河ばたのよどみにとまるながれ木の、うき橋になる五月雨の頃。

水なしとききてふりにしかつまだの、池あらたむる五月雨のころ。

五月雨に水まさるらし、うぢ橋のくもでにかくるなみの白糸。

花橘によせて懐舊といふことを。

軒ちかき花橘に袖しめて、昔を忍ぶ涙つつまん。

夕暮のすずみをよみ侍しに。

夏山の夕下風の涼しさに、ならの木陰のたたまうき哉。

海邊夏月。

露のぼる蘆の若葉に月さえて、秋をあらそふ難波江のうら。

雨後夏月。

夕立のはるれば月ぞやどりける、玉ゆりすうる荷の上はに。

對泉見月といふことを。

むすぶてに涼しき影をそふる哉、しみづにやどる夏のよの月。

夏野月。

みまくさのはらのすすきをしかふとて、ふしどあせぬとしかおもふらん。

旅行野草深といふことを。

たび人のわくる夏のの草しげみ、はずゑにすげのをがさはづれて。

山家に秋を待といふことを。

山郷は外面の眞葛はをしげみ、うらふき返す秋を待哉。

秋

山家の初秋を。

さまざまにあはれを籠て、木ずゑふく、風に秋しる太山邊のさと。

はじめの秋の頃、鳴尾なるをと申所にて、松風の音を聞て。

つねよりもあきになるをの松風は、わきてみにしむ物にぞ有ける。

新古　○おしなべて物をおもはぬ人にさへ、心をつくる秋のはつ風。

七夕を。

舟よする天の川瀬の夕暮は、涼しき風や吹わたすらん。

○七夕のながき思ひもくるしきに、この瀬をかぎれ、天ノ川なみ。

秋風。

○あはれいかに草葉の露のこぼるらん、秋風立ぬ、宮城野の原。

雜秋。

○たへぬみにあはれおもふもくるしきに、秋のこざらん山里もがな。

鳴。

心なきみにも哀はしられけり、鳴たつ澤の秋の夕暮。

櫻を歌ひ月を歌つては、四行は實に古今獨歩の感がある。

ひぐらし。

○足引の山陰なればとおもふまに、木ずゑにつぐる日ぐらしのこゑ。

露。

大かたの露には何のなるならん、袂におくは涙なりけり。

月。

みにしみてあはれしらする風よりも、月にぞ秋の色は見えける。

新古　○山陰にすまぬこころのいかなれや、をしまれて入ル月もある世に。

待出てくまなきよひの月みれば、雲ぞ心にまづかかりける。

○いかにぞや、殘りおほかる心地して、雲にかくるる秋のよの月。

打つけに又來む秋のこよひまで、月ゆゑをしくなる命哉。

玉葉　人も見ぬよしなき山の末までも、すむらん月のかげをこそ思へ。

なかなかに心つくすもくるしきに、曇らばいりね、秋の夜の月。

新古　夜もすがら月こそ袖にやどりけれ、昔の秋を思ひ出れば。

有名な自讃歌十二首の一。

播磨がたなだのみおきにこぎ出て、にしに山なき月をみる哉。

玉葉　わたの原浪にも月はかくれけり、都の山を何いとひけん。

○あはれしる人見たらばとおもふかな、旅ねの袖にやどる月影。

新古　○月見ばとちぎりおきてし古郷の、人もやこよひ袖ぬらすらん。

同　くまもなき折しも人をおもひ出て、心と月をやつしつる哉。

物おもふ心のたけぞしられける、夜な〳〵月をながめ明して。

○月のためこころやすきは雲なれや、浮世にすめる影をかくせば。

○わび人のすむ山里のとがならん、くもらじ物を、秋のよの月。

玉葉　○うきみこそいとひながらも哀なれ、月を詠て年をへぬれば。

續後撰　○世のうさに一かたならずうかれゆく、心さだめよ、秋のよの月。

續拾　なにごともかはりのみ行、世の中に、おなじ影にもすめる月哉。

いとふ世も月すむ秋になりぬれば、ながらへずばと思ひける哉。

玉葉　世中のうきをもしらですむ月の、影は、我みの心ちにぞある。

○すつとならば浮世をいとふしるしあらん、我にはくもれ、秋のよの月。

○いにしへのかたみに月ぞなれとなる、さらでのことはあるは有かは。

○ながめつつ月にこころぞおいにける、今いくたびか世をもすさめん。

いづくとてあはれならずはなけれども、あれたる宿ぞ月はさびしき。

○山里をとへかし、人にあはれみせん、露しく庭にすめる月かげ。

水の面にやどる月さへ入ぬれば、池の底にも山や有ける。

有明の月のころにしなりぬれば、秋はよるなき心ちこそすれ。

八月十五夜を。

かぞへねどこよひの月のけしきにて、秋のなかばを空にしるかな。

秋はただこよひ一よの名なりけり、おなじ雲井に月はすめども。

さやかなる影にてしるし、秋の月、とよにあまりていつか成けり。

老もせぬ十五の年もあるものを、こよひの月のかからましかば。

八月十五夜くもりたるに。

月まてば影なく雲につつまれて、こよひならずばやみに見えまし。

九月十三夜。

雲きえし秋の中ばの空よりも、月はこよひぞ名に出にける。

こよひはと心得がほにすむ月の、ひかりもてなす菊の白露。

後の九月に。

月みればあきくははれる年は又、あかぬ心もそふにぞ有ける。

月の歌あまたよみ侍しに。

秋のよの空にいづてふ名のみして、影ほのかなる夕月よ哉。

うれしとや待人ごとにおもふらん、山の端出る秋のよの月。

あづまには入ぬと人やおもふらん、都にいづる山のはの月。

天のはらおなじ岩とをいづれども、ひかりことなる秋のよの月。

行末の月をはしらず、過來ぬる、秋まだかかる影はなかりき。

ながむるもまことしからぬこころちして、世にあまりたる月の影哉。

月のためひるとおもふばかひなきに、しばしくもりてよるをしらせよ。

さだめなく鳥や鳴らん、秋のよは、月のひかりを思ひまがへて。

月さゆる明石のせとに風吹ゞば、氷の上にたたむしらなみ。

清見がた沖の岩こそ白浪に、ひかりをかはす秋のよの月。

ながむればほかの影こそゆかしけれ、かはらじ物を、秋のよの月。

秋風やあまつ雲井をはらふらん、ふけ行くままに月のさやけき。

中々にくもると見えてはるる夜の、月は光のそふ心ちする。

月を見て心うかれしいにしへの、秋にもさらにめぐりあひぬる。

ゆくへなく月の心のすみすみて、はてはいかにかならんとすらん。

野徑秋風を。

すゑばふく風は野もせにわたるとも、あらくはわけじ、萩の下露。

草花路をさへぎるといふことを。

夕露をはらへば袖に玉ちりて、道わけわぶるをのの萩原。

行路の草花を。

をらで行く袖にも露はかかりけり、萩がえしけき野ぢのほそ道。

薄當路野滋といふことを。

花すすき心あてにぞ分て行、ほの見し道のあとしなければ。

野萩似錦といふことを。

けふぞしる、そのえにあらふから錦、萩さく野べに有ける物を。

月前野花。

花の色を影にうつせば、秋の夜の、月ぞ野守の鏡なりける。

女郎花帶露といふことを。

花がえに露の白玉ぬきかけて、をる袖ぬらすをみなべし哉。

池邊女郎花。

たぐひなき花のすがたをおみなべし、池のかがみにうつしてぞみる。

月前女郎花。

庭さゆる月なりけりな、をみなべし、霜にあひたる花とみたれば。

野花虫。

花をこそ野べの物とは見に來つれ、暮れば虫の音をきゝけり。

田家虫。

小萩さく山田のくろの虫の音に、庵もる人や袖ぬらすらん。

獨聞虫。

ひとりぬの友にはならで、きりぐす、鳴々音を聞ば物おもひそふ。

廣澤にて人々月を翫ぶこと侍しに。

池にすむ月にかかれる浮雲は、はらひ殘せる水さびなりけり。

讃岐の善通寺の山にて海の月をみて。

くもりなき山にて海の月見れば、嶋ぞ氷のたえま成ける。

月前落葉。

山おろし月に木の葉を吹ためて、光にまがふ影をみる哉。

秋の歌どもよみ侍しに。

玉葉　鹿の音をかきねにこめて聞のみか、月もすみける秋の山里。

庵にもる月の影こそさびしけれ、山田はひたの音ばかりして。

おもふにも過て哀に聞ュるは、萩のはわくる秋の夕風。

なにとなく物がなしくぞ見えわたる、とばたの面の秋の夕ぐれ。

山郷は秋のすゑにぞ思ひしる、かなしかりけり、木がらしの風。

擣衣。

獨ねの夜さむになるにかさねばや、誰ためにうつ衣なるらん。

山家紅葉。

そめてけり、紅葉の色のくれなるを、しぐるゝと見えし太山邊の里。

寂然高野に參て、ふかき山の紅葉といふことを、宮法印の御庵室にて歌讀

べきよし申侍しに、まゐりあひて。

さまゝ〜の錦有けるみやまかな、花見し峰を時雨そめつゝ。

虫歌あまたよみ侍しに。

續拾　秋風に穂ずゑなみよるかるかやの、下葉に虫のこゑみだるなり。

夜もすがら袂に虫の音をかけて、はらひわづらふ袖の白露。

虫の音にさのみぬるべき袂かは、あやしや心物おもふべく。

暁、初雁を聞て。

新古　横雲の風にわかるるしののめに、山とびこゆるはつかりのこゑ。

遠近に雁を聞といふことを。

同　白雲をつばさにかけてとぶかりの、門田の面の友したふなり。

霧中鹿。

晴やらぬ太山の霧のたえ〴〵に、ほのかに鹿の聲聞なり。

夕暮鹿。

しの原やきりにまどひて鳴〻鹿の聲かすかなる秋の夕暮。

暁鹿。

夜をのこすねざめに聞ぞ哀なる、夢ののの鹿もかくやなくらん。

山家鹿。

なにとなくすままほしくぞおもほゆる、鹿あはれなる秋の山里。

田家月。

夕露の玉しくを田の稲莚、かけほすすゑに月ぞやどれる。

菩提院の前の齋院にて月ノ歌よみ侍しに。

くもりなき月のひかりにさそはれて、幾雲ゐまで行心ぞも。

老人翫月といふ心を。

○我なれや、松の梢に月たけて、みどりの色に霜ふりにけり。

春日にまゐりて、つねよりも月あかく哀なりしに、みかさ山を見あげて。

かく覺侍し。

ふりさけし人の心ぞしられける、こよひ三笠の月をながめて。

雁。

からす羽にかく玉づさの心地して、雁なきわたる夕やみの空。

鹿。

○三笠山、月さしのぼる影さえて、鹿鳴そむる春日ののの原。

○かねてより心ぞいとどすみのぼる、月待嶺のさほしかのこゑ。

○山里はあはれなりやと人とはば、鹿の鳴音をきけとこたへよ。

○小倉山ふもとをそむる秋霧に、立もらさるるさほしかのこゑ。

田家鹿。

新古を山田の庵ちかく鳴〻鹿の音に、おどろかされて、おどろかす哉。

西忍入道西山にすみ侍けるに秋の花いかにおもしろかるらんと、床敷きよし申つかはしたりける返事に、色々の花を折てかく申ける。

しかのねや心ならねばとまるらん、さらでは野邊をみなみする哉。

返し。

鹿のたつ野べの錦のきりはしは、殘おほかる心ちこそすれ。

虫。

新古　○きりぐす夜さむに秋のなるままに、よはるか、こゑのとほざかり行。

雜　秋。

同　○誰すみてあはれしるらん、山郷の雨降すさむ夕暮の空。

同　○雲かかる遠山ばたの秋ざれは、思ひやるだにかなしき物を。

新、内　○立田やま、時雨しぬべく曇空に心の色をそめはじめつる。

秋の暮。

なにとなく心をさへはつくすらん、我なげきにて暮ゝる秋かは。

終夜秋ををしむといふことを、北白川にて人々よみ侍しに。

をしめども鐘の音さへかはるかな、霜にや露を結かふらん。

冬

時雨。

○初時雨あはれしらせてすぎぬなり、おとに心の色をそめにし。

かねてより木ずゑの色を思ふかな、時雨はじむるみやまべのさと。

新古　○月をまつ高ねの雲は晴にけり、心ありけるはつ時雨哉。

十月のはじめの頃、山郷にまつりたりしに、すずむしのこゑのわづかにし侍しに。

霜うづむ萩がしたのきりぐす、あるかなきかの聞きけゆなり。

曉落葉。

續後撰　時雨かとねざめの床にきこゆるは、嵐にたへぬ木のは成けり。

水邊寒草。

霜にあひて、色あらたむる蘆のはの、さびしくみゆる難波江の浦。

山家寒草。

かきこめしすその薄霜がれて、さびしさまさる柴の庵哉。

閑夜冬月。

千載　霜さゆる庭の木のはをふみ分て、月はみるやととふ人も哉。

夕暮千鳥。

あはぢ嶋せとの鹽干の夕暮に、すまよりかよふ千鳥鳴なり。

寒夜千鳥。

さゆれども心やすくぞ聞あかす、川瀨の千鳥友ぐ(具)してけり。

船中霰。

せとわたるたななしを舟心せよ、あられみだるるしまきよこぎる。

落葉。

玉葉　木がらしに木のはのおつる山鄕は、涙さへこそもろく成ぬ(けれ)。

○くれなゐの木のはの色をおろ(う)しつ(と)つ、あくまで人にみゆる山風。

○瀨にたたむ岩のしがらみ浪かけて、錦をながす山川のみづ。

冬月。

○秋すぎて庭のよもぎのすゑみれば、月も昔になる心ちする。

○さびしさは秋見し空にかはりけり、かれ野をてらす有明の月。

新古　○小倉山ふもとの里に木のはちれば、梢にはるゝ月をみる哉。

ひとりすむ片山陰の友なれや、嵐にはるる冬のよの月。

○まき(槙)のやの時雨の音を聞〻袖に、月のもり(も)來(内)てやどりぬる哉。

凍。

水上に水や氷をむすぶらん、くるとも見えぬ瀧の白糸。

雪。

新古　雪うづむ薗の呉竹おれ伏て、ねぐらもとむる村すずめ哉。

打返(うら)すをけ(小忌)の衣と見ゆるかな、竹の上葉にふれる白雪。

○道とぢて人とはずなる山鄕のあはれは雪にうづもれにけり。

千鳥。

○千鳥鳴ふけ(吹)ひ(飯)のかたを見わたせば、月影さびし難波江のうら。

山家の冬の心を。

新古　さびしさにたへたる人の又もあれな、庵ならべん、冬の山郷。

冬の歌どもよみ侍しに。

花もかれ、紅葉よちりぬ山里は、さびしさを又とふ人もがな。

玉かけし花のかつらもおとろへて、霜をいだゝく女郎花哉。

つの國の蘆のまろ屋のさびしさは、冬こそわきてとふべかりけれ。

山櫻はつ雪ふれば咲にけり、茅野はさらに冬ごもれども。

よもすがら嵐の山に風さえて、大井のよどに氷をぞしく。

風さえてよすればやかて氷つつ、かへるなみなきし賀のからさき。

山郷は時雨し頃のさびしさは、あられの言はややまさりけり。

續千　茅野山ふもとにふらぬ雪ならば、花かとみてやたづね入まし。

雪のあした、靈山と申ところにて。

○立のぼる朝日のかげのさすままに、都の雪はきえみきえずみ。

山家雪深といふことを。

とふ人も初雪をこそ分こしか、道たえにけり、みやまべの里。

世のがれて東山に侍しころ、年の暮に、人々まうで來て、述懷し侍しに。

玉葉　年くれしそのいとなみはわすられて、あらぬさまなるいそぎをぞする。

年の暮に、高野より京へ申つかはしける。

おしなべておなじ月日の過ゆけば、都もかくや年は暮ぬる。

歳暮。

新古　○昔おもふ庭に浮木をつみおきて、見し世にもにぬ年のくれ哉。

戀

弓はりの月にはつれて見しかげの、やさしかりしはいつか忘れん。

千載　しらざりき、雲井のよそに見し月の、影を袂にやどすべしとは。

月待ッといひなされつるよひのまの、心の色を袖に見えぬる。

玉葉　あはれとも見る人あらばおもひなん、月のおもてにやどす心を。

新古　數ならぬ心のとがになしはて、しらせでこそはみをもうらみめ。
難波がた浪のみいとど數そひて、うらみのひまや袖のかはかん。
日をふれば袂の雨のあしそひて、はるべくもなき我心哉。
かきくらす涙の雨のあししけみ、さかりにものゝなげかしき哉。
いかがせん、その五月雨の名殘より、やがてをやまぬ袖のしづくを。

新古　さまゞくにおもひみだるる心をば、君がもとにぞつかねあつむる。
みをしれば人のとがとはおもはぬに、うらみがほにもぬるる袖哉。
かかなみにおほしたてけんたらちねの、おやさへくらき戀もする哉。

玉葉　とにかくにいとはまほしき世なれども、君がすむにもひかれぬる哉。
むかはらば我がなげきのむくいにて、誰ゆゑ君が物をおもはん。
あやめつつ人しるとてもいかがせん、しのびはつべき袂ならねば。
○けふこそはけしきを人に知られぬれ、さてのみやはとおもふあまりに。
物おもへば袖にながるる涙川、いかなるみをにあふせありなん。

もらさじと袖にあまるをつつまま、情を忍ぶ涙なりせば。
こと付て今朝の別はやすらはん、時雨をさへや袖にかくべき。
きえかへり暮待ッ袖ぞしをれぬる、おきつる人は露ならねども。
なかゞくにあはぬ思ひのままならば、うらみばかりやみにつもらまし。
○さらに又むすほゝれ行心か那、とけなばとこそをもひしかども。
○昔より物おもふ人やなからまし、心にかなふなげきなりせば。
夏草のしげりのみ行おもひかな、またるる秋の思ひしられて。
くれなるの色に袂の時雨つつ、袖に秋ある心地こそすれ。

新古　今ぞしる、おもひ出よとちぎりしは、忘れんとての情なりけり。
日にそへて、うらみはいとどおほ海の、ゆたかなりける我涙かな。
わりなしや、我も人目をつつむまに、しひてもいはぬ心づくしは。
山がつのあら野をしめてすみそむる、かただよりなき戀もする哉。
○うとかりし戀もしられぬ、いかにして人をわするることをならはん。

有名な自讃歌十二首の一。

中〳〵に忍ぶけしきやしるからん、かかる思ひにならひなきみは。
玉葉　いくほどもながらふまじき世ノ中に、物をおもはでふるよしもがな。
○よしさらばたれかは世にもながらへんと、思ふをりにぞ人はうからぬ。
新古　○風になびく富士の煙の空にきえて、行へも知らぬ我思哉。
同　あはれとてとふ人のなどかなるらん、物おもふ宿の荻の上風。
同　思ひ知る人あり明の世なりせば、つきせずみをばうらみざらまじ。
千載　あふと見しその夜の夢のさめであれな、ながきねぶりはうかるべけれど。
あはれ〳〵この世はよしやさもあらばあれ、こんよもかくやくるしかるべき。
千載　物おもへどかからぬ人もある物を、哀なりける身のちぎり哉。
歎くとて月やは物をおもはする、かこちがほなる我涙かな。
○七草にせりありけりとみるからに、ぬれけん袖のつまれぬるかな。
ときは山、しひの下柴かりすてん、かくれておもふかひのなきかと。
○我おもふいもがりゆきて郭公、ね覺の袖のあはれつたへよ。

人はうし、なげきは露もなぐさまず、さはこはいかがすべき思ひぞ。
續古　○浮世にはあはれはあるにまかせつゝ、心にいたく物なおもひぞ。
○今さらに何と人目をつつむらん、しぼらば袖のかはくべきかは。
○うきみしる心にもにぬ涙かな、うらみん年もおもはぬ物を。
などか我ことのほかなるなげきせで、みさをなるみに生れざりけん。
續古　袖の上の人目しられし折までは、みさをなりける我心かな。
同　○とへかしな、なさけは人のみのためを、うき我とても心やはなき。
うらみじとおもふ我さへつらきかな、とはで過ぬる心づよさを。
ながめこそうき身のくせになりはてて、夕暮ならぬをりもわかれね。
わりなしや、いつを思ひのはてにして、月日を送る我みなるらん。
玉葉　心から心に物をおもはせて、身をくるしむる我身なりけり。
かつすすぐ澤のこぜりのねをしろみ、清げに物をおもはずもがな。
玉葉　身のうさのおもひしらるゝことわりに、おさへられぬる涙なりけり。

みあれの頃、賀茂に來たりけるに、精進にはばかる戀といふことをよみけり。

いとづくるみあれのほどをすぐしても、なほや卯月の心なるべき。

なほざりのなさけは人のある物を、たゆ(絶)るはつね(常)のならひなれ共(ドモ)。

新古　何となくさすがにをしき命かな、ありへば人や思ひしるとて。

心ざしありてのみやは人をとふ(問ふ)、なさけはなどとおもふばかりぞ。

○あひみてはとはれぬうさぞ忘れぬる、うれしきをのみまづおもふ(まに)まで。

今朝よりぞ人の心はつらからで、明はなれ行々空をながむる。

新古　あふまでの命もがなとおもひしは、くやしかりける我心かな。

同　○うとくなる人を何とてうらむらん、しられずしらぬ折もありしを。

雜

院熊野の御幸の次に、住吉に參らせ給たりしに、

院とは後白河法皇のことなり。時に承安元年六月。四行が伊勢に滯在したのは治承四年頃のことである。住吉明神は和歌の守護神である。百練抄承安二年三月の條に、十五日、太上法皇於入道大相國福原亭、供養千僧持經者、三箇日被行之。同じ十月の條に、十五日、入道太政大臣於播州輪田濱、修千境阿彌陀供養、上皇去十三日臨幸、令修法花法給。と見ゆ。法皇は後白河、上皇は高倉の事。

かたそぎのゆきあはぬまよりもる月や、さえてみそでの霜におくらん。

伊勢にて。

○ながれたへぬ浪にや世をばをさむらん、神風涼し、みもすその川。

承安元年六月一日、院熊野へ參せおはします次に、住吉へ御幸ありけり。

修行しまはりて、二日、かの社に參て見まはれば、すみのえ(住吉)の釣殿あたらしくしたてられたり。後三條院のみゆき、神もおもひ出給ふらんとおぼえて、釣殿に書付侍し。

たえたりし君がみゆきを待つけて、神いかばかりうれしかるらん。

松のしづえあらひけむ浪、古にかはらずこそはとおぼえて。

いにしへの松のしづえをあらひけん、浪を心にかけてこそみれ。

俊惠天王寺に籠て、住吉に參て、歌よみ侍しに。

續拾　住吉のまつの根(分續拾)あらふ浪のをとを、梢にかくるおきつしほ風。

昔心ざしつかまつりしならひに、世のがれて後も、賀茂社へまゐりまうで

て、なん。としたかくなりて四國のかたへ修行すとて又かへりまゐらぬこ
とにてこそはとおぼえて、仁安三年十月十日夜、まゐりて暇まいらせしに、
内へもいらぬ事なれば、たなの社に取付てたてまつれとて、心ざし侍しに、
木のまの月ほのぐ〜と、つねより物哀に覺て。

かしこまるしでに涙のかかるかな、またいつかはとおもふ哀に。

寂超入道大原にて止觀の談儀すと聞て、遣しける。

ひろむらん法にはあはぬみなりとも、名を聞〻數にいらざらめやは。

阿闍梨勝命、千人集〻て、法花經に結緣せさせけるに、露もかはらじと、

つかはしける。

つらなりし昔に露もかはらじと、おもひしられし法の庭哉。

法花經序品を。

ちりまがふ花の匂ひをさきだてゝ、光を法の莚にぞしく。

法花經方便品の深着於五欲の心を。

玉葉

寂超は所謂大原三寂の一人。丹後守忠の子。三人兄弟。世の一番の宋學者。名は爲隆。兄弟三人共に崇德帝に仕へた。寂超離髮後は兄等と共に叡山の麓大原の里に住んだ。

時に四行五十一歳である。

こりもせずうき世のやみにまどふかな、みを思はぬは心なりけり。

勸持品。

あま雲のはるるみ空の月影に、うらみなぐさむをばすての山。

壽量品。

千載

鷲の山、月を入ゝぬと見る人は、くらきにまよふ心なりけり。

觀心。

新古

やみはれて心のうちにすむ月は、西の山邊やちかくなるらん。

心經。

なにごともむなしき法の心にて、罪ある身とも今はおもはじ。

美福門院の御骨、高野の菩提心院へわたされけるを、見たてまつりて。

○けふや君おほふ五の雲はれて、心の月をみがきいづらん。

無常の心を。

○なき人をかぞふる秋のよもすがら、しほるる袖や鳥べのの露。

靈鷲山は天竺摩竭陀國釋迦說法の靈地。

時に永暦元年、四十三歳である。選集抄に依ると、この年に早春から東下りをして、陸奥から北海道へ旅行してゐるが、それは出鱈目である。